

川柳塔



No. 889

西尾栞七回忌川柳大会特集

六月号

橘高薫風名誉主幹に栄誉

平成十三年度の春の叙勲で本社名誉主幹橘高薫風氏（社団法人全日本川柳協会常務理事）に木杯一組台付が授与されることとなりました。

この栄誉は同氏の永年にわたる川柳文化の普及と向上に貢献された功績によるものであり、心からお祝い申し上げます。

またこれは昭和六十三年度秋の叙勲で故西尾葉氏が木杯一組台付を受章された慶事に続くもので、川柳塔社としての誇りでもあります。ここに謹んで報告いたします。

川柳塔社

第16回 国民文化祭・ぐんま2001

― 見つめようひとの心 ものの心 毛の国ぐんま ―

応募受付期間 4月1日(日)～6月30日(土)

宿題・選者（各題2句・未発表作品に限る）

事前投句 「書く」

小松原 爽介選

「雷」

田中 寿々夢選

「牛」

田口 麦彦選

「風」

成田 孤舟選

小・中学生の部

「書く」 江畑哲夫選・

「雷」 河内天笑選・「牛」 撫尾清明選

当日投句

「門」

福岡 竜雄選

「威張る」

早川 双鳥選

「野菜」

松岡 葉路選

第二次選者

仲川たけし

吉岡龍城 今川乱魚

磯野いさむ

斎藤大雄

応募料

1000円（小・中・高校生は無料）

応募方法

所定の応募用紙を使用のこと

応募先

〒370-2192 多野郡吉井町大字吉井371

国民文化祭吉井町実行委員会事務局

TEL 027-387-3111

FAX 027-387-3212

賞（予定）

文部科学大臣奨励賞・国民文化祭実行委員会会長賞・群馬県知事賞・他

入選発表大会

11月11日(日)10時30分～15時30分

吉井町体育館

(027-387-3553)

問い合わせ及び募集要項請求先

〓 応募先

主催者 文化庁・群馬県・群馬県教育委員会・

主催者

文化庁・群馬県・群馬県教育委員会・

(社)全日本川柳協会・他

名将 橋高薫風

河内 天笑

橋高薫風名誉主幹が、平成十三年春の叙勲で木杯一組を授与されることが、四月二十九日の朝刊で発表されました。これは昭和六十二年秋の叙勲で故西尾葉氏（当時川柳塔社主幹）が授与されて以来の榮譽で、川柳塔社をあげておよろこび申し上げます。

文化功労者としての氏の足跡には比類なきものがあり、昭和三十一年一月に川柳活動を開始されて以来、同三十二年一月麻生路郎氏に師事され、昭和四十五年十一月清水白柳氏急逝の後、同月から編集長、平成六年十月に川柳塔社主幹に就任され、同十二年九月までの六年間、トップリーダーとしての手腕を存分に発揮されました。

一方マスコミ関係でのご活躍も花々しく、昭和五十六年五月から平成六年三月まで、十三年間に亘るNHKラジオ川柳選評、西日本文字放送を昭和五十六年六月から八年間担当されるなど、ご活躍は広範囲に及

び、現在なおご活躍されて居られるものに、キリスト教月刊誌「声」

朝日新聞なにわ柳壇 昭和50年1月から
山陽新聞柳壇 昭和55年6月

大阪都市協会月刊誌「大阪人」 昭和56年1月

大阪府警本部月刊誌「なにわ」 昭和60年1月

南海電鉄情報誌「サウスウエーブ」 平成6年6月

等など、氏の選句眼と健筆ぶりは皆様方ご承知の通りであります。またカルチャー教室の講師としても

朝日カルチャーセンター 昭和55年6月
NHK文化センター大阪 昭和56年6月

NHK学園川柳入門 昭和56年6月
NHK学園川柳入門 昭和56年10月

毎日文化センター 昭和56年10月
産経学園梅田第二 昭和56年10月

豊中福祉センターひまわり 平成1年1月
NHK文化センターりんくう 平成6年4月

よみうり松阪屋文化センター 平成12年7月
の八ヶ所の教室で講師を務められて居ます。

昭和五十五年五月には、「川柳界のノーベル賞」とも称される「第十二回三条東洋樹賞」を受賞されています。

氏の川柳句集も五冊に及び

『有情』 昭和37年9月

『肉 様』 昭和40年7月

『愛 染』 昭和48年11月

『古稀薫風』 昭和60年8月

を上梓されました。そのほか

『麻生路郎』 平成7年11月

『なにわ川柳の一句』 昭和54年7月

『川柳に見る大阪』 昭和58年7月

『師 弟』 昭和60年7月

『和顔愛語』 平成11年3月

の著書が発刊されています。

来る秋には、新阪急ホテルに於て氏の榮譽を祝する会が開かれる予定になりました。木杯の受賞祝賀会が、川柳歴45年になる事も意義深いものがあります。

薫風名誉主幹には十分に健康にご留意され、今後益々ご活躍されん事をお祈りいたします。

しします。



座右の句

人恋し人煩わし波の音

私の句

奥山の落葉ゆつくり地にかえる

(栞)

国森 武子

川柳塔 六月号 目次

題字・中島生々庵／表紙・直原玉青

■巻頭言 名将 橘高薫風

西尾 栞先生と私

河内 天笑 …… (1)

川柳塔 (同人吟)

田中 正坊 …… (2)

自選集

河内 天笑選 …… (4)

水煙抄

板尾 岳人選 …… (55)

愛染帖

波多野 五葉庵選 …… (81)

川柳の群像 佐藤正敏

東野 大八 …… (84)

俳風柳多留二四篇研究 30

茴香の花

西出 楓楽選 …… (88)

秀句鑑賞

同人吟

小池 しげお …… (90)

水煙抄

安平次 弘道 …… (96)

西尾 栞先生と私

田中 正坊

平成四年の暮れ、西尾栞先生から電話があった。「今、着きましたでえ。ええ本ができましたな。おおきにおおきに」。川柳塔八〇〇号記念特集号(平成五年一月号)の編集に對するねぎらいの言葉である。同号は、全国誌上大会入選句や田辺聖子さんらの寄稿文などを掲載し、二〇〇ページの大冊となったが、これでいっぺんに疲れが吹っとなった。先生はこういう気配りをする方である。

栞先生が主幹に就任された翌年の昭和五十八年、私は同人にしていたから、平成六年に退任されるまで十二年間にわたってご指導を受けた。それだけでなく、同五十九年九月に先生を団長として上海・蘇州・桂林を訪れた中国吟行の旅に伴い、全日本川柳大会をはじめ中国・四国・九州など各地における川柳大会に誘われて参加し、寝食を共にして心安くしてくださった。

そして今なお思い出に残るのは、六十年九月、新阪急ホテルで開かれた喜寿・金婚・句碑建立五周年記念川柳大会の花やかなシーンである。金屏風を背に和服姿で並んで座られ

「ゲーム」

吉村一風選……(92)

一路集「線」

小谷美ツ千選……(92)

「それから」

宮崎ヒサ子選……(93)

初歩教室「さらり」

吐田公一……(94)

■エッセー 大阪商人と懷徳堂

井上桂作……(97)

鳥取県鹿野町句碑紹介

木村あきら……(100)

山地マツエさんを偲ぶ

吉村一風……(101)

村上剛治さんを偲んで

……(102)

西尾 栞 七回忌川柳大会

……(103)

おはなし 西尾 栞先生を偲ぶ

板尾岳人・八木千代……(113)

栞先生の思い出

……(115)

各地柳壇(佳句地十選／大橋政良)

……(130)

柳界展望

……(132)

六月各地句会案内

……(134)

■編集後記

楓楽・朱夏……(134)

座右の句

われは一匹狼なれば瘦身なり

(三太郎)

私の句

チャリンコの無理無限符を描き続け

山本蛙城

た御夫婦のにこやかなお顔がありありと臉に浮かぶ。さらに六十三年度の秋の叙勲で木杯授与の荣誉に輝かれ、翌年の平成元年三月に受章祝賀会、同七月に叙勲記念川柳大会がなにかにわ会館で盛大に開かれ、川柳塔社を挙げて沸きに沸いたのは、先生のご人徳のしからしめるところだろう。

平成二年に私が編集を担当するようになってから毎月、月末近くになるとドサッと選句した用箋の束が届き、巻頭言やエッセーなどの原稿とそれについての連絡という主幹・編集長間のホット・ラインが続いた。よろず大らかな人柄であったが、締切日をきちんと守られたのは、編集部としてありがたかったことを特記しておきたい。

このほか先生は、全国川柳界の重鎮として畏敬され、全日本川柳協会常務理事の任にあつて出版委員長をつとめ、大阪川柳人クラブの会長にも委嘱された。私は先生のご指名により日川協常任幹事として、『全日本柳人写真名鑑』などの出版実務にたずさわリ、また川柳人クラブも幹事の一員として、『大阪文化芸術年鑑』の執筆陣に加わった。これもできるだけ先生をお助けしたい一念からであった。

そして逝去された翌年の平成八年、刊行委員の一人として、『定本 西尾栞句集』を編集し、御霊前にお供えたことで、いささかのご恩返しができたと思っている。



河内天笑選

弘前市 高瀬霜石

日々平安入浴剤を選っている

錆止めになるかもしれないぬ本を読む

守備位置に戻る お金のいる話

こめかみの奥に潜んでいるマグマ

美しい裾野が見える無位無冠

平凡が一番 安い酒を飲む

弘前市 須郷井蛙

忙しいナースにすまぬボタン押す

食材も無駄になつて二人きり

香水と沢庵におう満員車

日曜のパパの背中の子すり台

新製品ワンクッションを置いて買い

農繁期爪の先まで疲れきり

黒石市 千葉風樹

まねき猫暖簾守った顔で居る

転がれぬ鞠の鱗が干涸びる

染まるもの探して雨を身に纏う

三回転ジャンプを叱ってる校則

人間になろうと朝陽浴びている

牡丹雪 街で別れて以後の姉

富山市 舟渡杏花

屈伸が三日で果てたダイエット

ごった煮で育ったばくは六番目

すり切れた尻尾みせ合う日向ぼこ

イエスさま左の頬まで出せません

見知らぬ街で先祖に出合う花の種

前向き之余生だバック念入りに

宇部市 平田実男

少子化へ悩むメダカの学校も
出来る子といのお子さんは違います
停電ヘライフラインは脆かった
心まで染めてなかった茶髪の子
清貧を貧乏神に褒められる
小便の音もだんだん歳を取り

大阪市 玉置英子

一度くらい棚ぼた食べてみたいものは
よいかな桜散ります車椅子
大宇宙塵の捨て場になりそうなの
ど餡がほしい黄砂の所為かしら
動くものなんにも無くて日向ぼこ
ストレスが無かったのでしょう百七歳

尼崎市 春城年代

エジプト展はるか遙かの命かな(エジプト文明展 5句)
幻ならぬ金 宝玉に囲まれて
至宝なる古代の人の技は神か
来世を信じた念い胸を打つ
古代人に今の貧しさ申し上げ
花疲れ湯舟にじんとしずませる

尼崎市 春城 武庫坊

歳相応と言われて返す言葉なく
花開く花の鼓動が胸を打つ
いかなごが幾つも届き花万朶

桜吹雪 細胞減った頭撫で

ありがとうなんと綺麗な言葉だろ
戦友会ももうすぐ死語になる言葉

西宮市 西口 いわゑ

Eメール内緒ばなしに打ってつけ
一のボタン外しゆっくり話し合う
カーテンを開けるニコツと花の顔
これ以上望むと神に叱られる
夫婦坂 晴時々暴風雨
花いかだ春をゆっくりのせてゆく

西宮市 菊池 トミエ

学卒を氷河の海に送り出す
公園の青いテントを取るけじめ
コーヒーのうまい飾らぬ店に行く
いかなごの釘煮が届く良い笑顔
千年の淡墨桜今もなお
桜守しだれ桜を呼び戻し

尼崎市 長浜 澄子

健康保険まだ無疵なり桜散る
お日さまが一番好きな花の芯
憤懣がいっきに溢れ出す受話器
正座して湯豆腐かこむ外国語
これからへ話が弾む木の芽和え
一日の流れを変えるEメール

倉敷市 小野 克 枝

借りた傘忘れぬように雨が降る

支え合う種も仕掛もない笑顔

弁解をしない涙と知っている

キッチン隅に動かぬ母の席

その昔父は立派な二等兵

五十年やっと夫婦の音になる

米子市 木村 富美子

悪友がほぐしてくれる肩のこり

悪女にはとてもなれない花の下

まばたきで通じてくれる友もいる

紫は忘れてならぬ母の彩

どの道もあなたが前に居てくれた

阿古屋貝目立たぬ色で真珠抱く

吹田市 山本 希久子

六月のテーマは重しあじさい忌

道草の好きな五歳と手をつなぐ

頭数足りず仲間にしてもらう

再会の盃に蜜あふれさせ

原点はキッチンにあり家族の輪

イタリア紀行読む名曲を聞きながら

宝塚市 嵯峨根 保子

口にせぬ心配がある花の寺

豆をむく下校チャイムをききながら

眠れんと言うので逢うとよく食べる

老い方に創意工夫がいりそうだ

お寺さん親の信心ちらと言ひ

菜の花と鈴はまだまだ先の旅

鳥取市 植田 一 京

春らんまんのどかな里は留守ばかり

なりゆきで奇抜な君とふたり連れ

イメーজのとおりにならぬ春の絵よ

自信など無いけど上を見て歩く

少し若い今日を遺しておくビデオ

嬉しかったハガキ十年持っている

香川県 清川 玲子

プールサイド体の線を気にしてる

腐れ縁と言いつつ好きな人と居る

シルクより木綿の好きなスニーカー

修羅場など無かったような仲の良さ

ワンカップでも治まっている腹の虫

中立を守って母の生き上手

香川県 池内 かおり

巻き返し意外に速い雪印

紅ひいて寝惚けまなこに活いれる

お弁当こさえる新妻のように

思い出したように体操する私

草を引く墓地の桜も良いもんだ

ギックリ腰忘れた頃にやって来た

香川県 瀧井 勝

折り込みの花見弁当味見する
老体は未だ頼られて生きている
美しい花を見る背がしゃんとする
悠々と草食む牛の無邪気な瞳
来歴は言わぬ諭吉の窠ぐされよう
長いこと諭吉を泊めて上げられぬ

香川県 神保 坊太郎

まごころを見せたく墨を濃ゆく磨る
除幕式石がこの世の風に会う
出ぎらいを乗せて押してる桜みち
ぬれ衣の七十五日を貝になる
場所取りに試されている新社員
四月馬鹿知っているのに担がれる

松江市 銭山 昌枝

怖いもの無いが手古摺る花粉症
言つてない言つたと他愛無いけんか
頑張るの止めたやさしくなれるかも
白髪染め止めて馴染んだ赤い服
愛犬の墓へ牛乳かけてやる
老人手帳十年前の写真貼る

出雲市 佐藤 治代

絵手紙のぼんたん友に似てうれし
厳しさの中で安らぐ風に会う
すんなりと心に入るさだまさし

マイナスの通帳のまま月始め
健康を粗末にしては薬のむ
靴下の穴を大きくする夫

箕面市 椎江 清芳

豊かさに先祖の汗を忘れさり
長女二女三女と預金消して嫁き
少年の地図から消えた宝島
軍港に二度となりたくない港
空港に歴史を変える人が降り
城のない地酒がうまい米どころ

箕面市 出口 セツ子

人間で居たくて損をして生きる
新色の口紅ベリをふんわり包む風
下駄箱で威張つて居ます女靴
正直な鏡を処刑したくなる
プラス思考ばかりしたがる輩である
騙すより騙され生きている安堵

大阪市 神夏磯 典子

ぼんばりのあかりが愛を膨らます
弁当の上で踊っているさくら
余生なお花一輪の恋がある
ふくれ顔妻に活気が満ちている
会釈してとれた小さなわだかまり
出しゃばりともよく気が付くとも言われ

富田林市

中井アキ

恋唄をひとつ覚えた古稀の春

ときめいて独りの部屋が忙しい

産んだ子に三つ指ついて礼を言う

切り絵からシャープな答え返される

アリバイがはつきりしない春おぼろ

なまくらで春の残像ばかり追う

寝屋川市

江口度

叱られた部下がバットを振っている

魚籠下げて川の流れを読んでいる

変わらないものを求めて旅に出る

賛辞から遠く十葉咲いている

山咲きの花が泣いてるにわか雨

突風へ傘裏返るシクラメン

藤井寺市

中島志洋

紫陽花の色に見惚れる蛇の目傘

君となら濡れてもみたい花の雨

許すとは言わぬが顔が笑ってる

落書きの傘の相手と共白髪

警察や坊さん暇なほうがい

明日のこと解らないから夢がある

羽曳野市

川口信子

病む社会映す鏡が小さすぎ

雨の唄老いを幼き日に戻す

少しずつ春が障子に動く影

絵手紙へ愛のひと文字足してある

人生に迷いも有ったうしろ影

心にも四季あり幸いだと思う

羽曳野市 三好専平

図書館で昼寝する人増えてきた

省略語増えて中味がわからない

特養のホームでみんな貝になり

青空にカラオケひびく天王寺

春の札所猫こっそりと寄ってくる

大根を抜く妻の背もよく曲がり

大阪市 本間満津子

地図読んで浮かぶ景色に足が向き

湧き上がる希望早春動く土

血の巡り悪い頭へ急ぐ返事

しょうもないこと何でも言えるので家族

天変地異 地球が耐えて居た怒り

良き時代生きて来たんだ八十路

河内長野市 加島由一

水をやるように言われて水をやる

懐石の皿にも老舗意地をみせ

できるなら俺の子供に生まれない

日曜の半分妻の愚痴で消え

せつかくのシャレが子供に通じない

愛敬はいいがさっぱり譲らない

寢屋川市 籠 島 恵 子

朝ドラを追ってるうちに歳をとり
父を恋う連ぎょうの花咲くころは
ファックスは多忙な時の思いやり
嘘のない会話酸欠おこす部屋
わたくしを見下していた言葉尻
生きるって頑固になってゆくばかり

東大阪市 谷 口 義

心配もだんだん腹が立ってくる
信心のない仏壇に物をのせ
札束になると団結するお金
姑になつてくれる猫もおり
検査して一番心配な頭
多数決迷ってる手も上がってる

堺市 宮 本 かりん

ピリオドを打ち出直しの誕生日
日光浴 頭のかびも殺さねば
いたわりの言葉に老いを感じます
束の間のよろこびだった勘違い
考えの甘さを恥じて口閉じる
小さくとも良し小回りのきくボディー

和歌山市 古久保 和 子

アナウンスも少し訛って旅の駅
開けゴマ両手塞いでいる荷物
筋道を立てると眠くなる話

旨そうと水族館で不謹慎
迷走を始めた妻の長電話
おばさんと呼ぶから知らん振りをする

和歌山市 桜 井 千 秀

思い込み過ぎて裏側見えてこず
メリハリをつけて革命する自分
表情の隙からこぼれ出る本音
パフォーマンス一人暮らしで身につける
ごもつとも膝打ってから出る疲れ
目が合えば逸らさぬつもり今度こそ

奈良市 天 正 千 梢

旅人に山寺の南天色が冴え
庭掃除これもひとつの座禅です
零落つ私に何か語りかけ
石仏が沈黙の美をみせつける
日輪に手を合わしてる幸に酔い
目も耳もとろくそうなった阿弥陀さま

寢屋川市 堀 江 光 子

職退いて旅を味わう旅に出る
わが旅の原風景の椿みち
分けてゆく草の香もよし一人旅
乗り継いで雪国の灯に魅入られる
太閤の桜を撮し五十年
この狭い国で派閥がせめぎ合う

砂川市 大橋 政良

酔うほどにとくりと話長くなる
鯉のぼり一匹ずつに風のうた
やけに効く素うどん一味唐がらし
夫婦別姓みんな半分ずつにする
字余りの顔で駐在さんが来る

弘前市 小寺 花峯

絵葉書に真心添えて旅終る
新しい世紀に風を送り込む
紫陽花と一日語る雨の音
ふる里の訛が遊ぶ街が好き
かくれんぼ夕陽が沈んだままだよ

弘前市 高橋 岳水

少年の夢が水平線駆ける
老人を湯浴みへ誘う無料パス
負け犬にされても筋は曲げられぬ
忘却という良薬を神がくれ
その先は祈るしかない手術室

弘前市 今 愁女

春の川さらばさらばと花筏
葉ざくらの下霧島つつじ紅く燃え
いくなれば少女満開花りんご
耐えること知ってあふれるバラの笑み
大國でさむらいたちが快挙あげ

弘前市 蒔苗 果林

春雨も雨です老いても男です
やるはずをぱっと忘れて眠りこけ
はようおいでと言わんばかり亡妻の夢
曾孫誕生 男児桜に先駆けて
黄緑の好きで長引く緑内障

弘前市 宮崎 ヒサ子

四年目でやっと綻ぶクンシラン
妹に生きて欲しいと鶴を折る
寿命という言葉反芻する重さ
咲く花も散る花もあるこの世です
浅瀬かと甘く見過ぎた結果出る

弘前市 一戸 ツネ

夜が明けて今日も気になる他人の目
春の風ローカル線と握り飯
薫る風 林檎の花と津軽衆
酒たばこ止めて羅漢の貌になる
花粉症 壁の写楽もくしゃみする

弘前市 福士 慕情

長男も次男もいるが独り住む
聞くだけは聞いて断る金のこと
土壇場で急に変わった風の向き
パソコンが幅を利かせている机
十年前とは違う頭腕脚

黒石市 相馬 一花

年輪の喉が聴かせるよされ節
天辺はつるり顎には密生す

糟糠の妻を裏切る鼻の下

だるまより下腹が出るマイダーリン

英語では楽々言えるプロポーズ

十和田市 阿部 進

ほろにがい春を味わうフキのとつ

卒業の記念にボタンねだられる

粗探しうまいのが居て疲れ果て

恩のある人にはいやと言えませんか

せせらぎの音きいて脳リラックス

富山県 酒井 輝

携帯をONにしないと寝付けない

薄い絹着せて乳房が春を撒く

言い過ぎに尺度があつて親子無事

底辺で見る凶の字は怖くない

出戻りの本社で部下の部下にされ

富山県 増田 紗弓

見抜かれた嘘もトークにする司会

軽いふりしながらバット重かろう

宇宙的ユーモアが持つ真価

澄みきった答え搜している蛇行

今年こそ和解したかと咲くさくら

大宮市 八田 敏

墓出来てはいる順番ゆずり合い

体調はいいがあちこち要注意

ケータイを持つと孤独をふと忘れ

鷹めざす子へ遣伝子が邪魔をする

花の道散るまで通い春惜しむ

横浜 小野 句多留

分校に一人で遊ぶ鯉のほり

初孫のウンチ褒めてる妻と嫁

朝六時起きてなにかをするでなし

ベア券当って困る歳と知る

少年の顕示欲から出る無謀

横浜市 清水 潮華

不満足五体で気持だけ闊歩

腰痛の前触れ骨の音がする

相談をされて本人より悩み

満開の桜に軽い偏頭痛

人間を選別ティッシュ配られる

横浜市 菱田 満秋

友が近く私もそんな年になり

他人ではないと他人は見抜いてる

輸血から得た肝炎を恨めない

同じ花でも赤いのが花らしい

生きているのをたしかめた花の下

横浜市 菊地政勝

桜咲き平常心でいられない
齒に衣を着せて相手を思いやり
ロボットの犬に心を癒される
マスクする女 美人に見えてくる
永遠に終らぬ家事を妻とやり

横浜市 山下省子

いい年も原色着けて若がえる
脳ミソを変える手術ないかしら
朝刊が喜怒哀楽を積んできた
化けきれず夫婦のシッポ見え隠れ
お食事よ はあいと夫子に戻り

東京都 播本充子

知らぬ知らぬとお利口な人ばかり
メロンパン人氣に溺れたりしない
嫁達にかやくごはんも伝授する
朝型に私を変えた大リーグ
怖いなど聞くヘルベスやピロリ菌

東京都 後藤早智

I Tに老若男女括られる
ペンだこの指が恐れているマウス
I Tもまんざらでない人の顔
押しつけの手には乗らないEメール
ロボットと仲良く年を取ることに

川崎市 和泉あかり

指一本痛め五体が音をあげる
ゆっくりと時間も食べているひとり
願いごと少し削って生きている
うれしいね今日もポストに落ちる音
思うにはまかせぬものに皺がある

静岡県 蘭田 獏 杏

オーロラは天の神から絵手紙か
雑炊の熱さを吹いて春の冷え
せつかくの春にわざわざ北へ行く
けむそうな顔してタバコやめられず
何もせずカレンダーだけ四枚目

愛知県 早川盛夫

おう来たか一升瓶をどんと置き
従いて行くみんなで決めた事だから
犬掻きはつらい沈んでまた浮かび
句読点みたいに酒を吞んでいる
教養と育ちが分かるバイキング

高知県 北川竹萌

青い空あつきり乗った四月馬鹿
大空の接触 米中荒れ模様
薬稷に己見つけて米寿越ゆ
鏡川散歩楽しく愛の餌
鳩や鴨 鯉も集うよ鏡川

高知県 赤川菊野

松山市 丹下美津子

あの人が来ると空気がよどみ出す
あまりにも腹の立つ記事多すぎる
貧しいが心豊かに米をとぐ
カラタチの花が咲いたら嫁にゆく
逢うだけで私を少女に変える人

香川県 成重放任

娘の家の分まで馬鈴薯植えており
花冷えに一合が二合とはずむ酒
桜茶で客をもてなす娘の門出
生きる夢託して植える梅苗
消防車やじ馬心に火をつける

香川県 川崎ひかり

さくらサクラ 光がピンクに染まってる
草餅の緑指先まで染まる
女同士解る図太さしたたかさ
ポケットに桜ひとひらかくれんば
あきらめた枯木に今年も緑の芽

松山市 宮尾みのり

おいと呼び はいと答えて事が足り
不協和音どこかのネジがゆるみだす
気負いばかり空回りして春が過ぎ
終着駅もう虹のこと口にせず
思いつきり遠出をしたい春うらら

しだれ桜寿ぐ今日は句碑除幕
隠し芸隣のゴザも手を叩く
悲しいな血税までもつまみ食い
右へならえ自治体までもつまみ食い
口上手にまたまた軽くひねられる

愛媛県 中居善信

しっぺ返しを何時かは食らう有頂天
振り向きもせずに茨の道を来た
退職をしてから百姓面白し
正直な人に挨拶しています
大声で笑った事のない母よ

唐津市 樋口輝夫

相棒に掛けた梯子を外される
言い訳はどうにかなるささあ飲もう
あの娘式を延ばせぬワケがある
バツイチでだんだん賢くなる娘
正論の唯の一人を持て余し

唐津市 仁部四郎

借金をテコに社長の菜っ葉服
あの人は小金持だなよく笑う
大金も税金だから買う兵器
散歩道今日は小銭が二か所要る
小銭だが借りると何か壊れそう

唐津市 宗 水 笑

水門を開ける閉めるの矛と盾
陰ながら飲み屋の寂れ哀れなり

信仰が違うと仏像ただの石

疲れ目に桜の下の脚線美

大吉はお世辞のようで引き直す

唐津市 井 上 勝 視

喪主になることは思わぬ妻である

貶しながら老妻のパワーに頼ってる

無理がきかぬボチボチ自我の傘たたむ

手抜きせず佃煮だけはいつもある

ワビサビが埒外となるIT化

唐津市 山 口 高 明

春風に浮かれて少し羽目外し

ホロホロと鳥啼く夜は眼が冴える

後ろ楯ついて話が余計揉め

これ以上上げば危ない絡み癖

金比羅の駕籠は石段横に這い

唐津市 久 保 正 剣

嫁不足街は厚底ギャルの群れ

新世紀残る同期の数を読む

養生訓 温故知新で甦る

農継がぬ子にも土の香送る母

DNAいつまで続く団子鼻

唐津市 山 門 タ ミ

一瞬のパノラマだった八十年

子等去って広い畳よ春休み

可愛がり過ぎて包丁首が折れ

家族皆本音を吐けばすごかろう

昨日消え過去の事なら日時まで

唐津市 山 門 幸 夫

戻り寒桜吹雪に牡丹雪

春麗らポトリポトリと寒椿

葉根芽萌ゆ雀もしゃんとなりました

鳩ポッポお前と話が交わしたい

年度末ここ掘れワンと大渋滞

北九州市 梅 田 宣 司

思い出の節目節目に残る恥

この嘘を永久保存して置こう

ああそうか酒の言い訳酒が要る

ご機嫌の老母が受話器下ろさない

年老いて素直に言えるありがとう

熊本市 永 田 俊 子

さくら花いくさ嫌いになり申し

未練まだあつて燃えてる落椿

問題の子が卒業したおめでとう

ひとつ覚えふたつ忘れて日が暮れる

雑踏も命の音よ通夜に行く

熊本泉 高野宵草

酒税の消費税まで呑んだ酔い
敵を撃つことのみ考えたがる輩

白蟻の桃源郷となる枯木

温い茶を好むゆとりが眩しかり

セクハラを咎めしらけてきた職場

倉敷市 井上富子

花火師のロマン宇宙をキャンパスに

エプロンが宣誓してる家事のプロ

老眼の視野に恭しい皇居

天才の視線 百年先を読む

石ころ一つあればゲームになる子供

岡山県 大石あすなろ

妥協がいちいちこちらで火傷する

時どきは夫に効かす練りガラシ

タクト振る妻に任せた第二章

沖からの波が昔をつれて来る

まだ痛む傷を時どき陽に当てる

岡山県 山本玉恵

残り火を溜めてひとりの花ぐるま

もうずっと長いひとりの飯茶碗

忌は巡る去りにし人は戻らざる

不器用なままで八十路を迎えけり

バラ一本女こよなく甘えたや

岡山県 荻野 鮫虎狼

平成に男駆け込む寺が欲し
老いてなお年を隠すのも女
泰平の夢を覚ませと花便り
手拍子が乱れピンチが続く日々
風に乗る噂聞こえぬ事にする

岡山県 福原悦子

遅咲きのつばみにかける親の愛
少し前に傾く母の小さい背な
なかったこととする話に斜線引く
ストレスを上手に捌く妻の箸
薄化粧ちよっぴり若くなる鏡

岡山県 富坂志重

割箸の墓標で金魚のお墓
美辞麗句聞けば心に花が咲く
ゼロで結ばれ愛を食べつつ八十路坂
口答えしても此の人から生まれ
客を待つ一人芝居の化粧する

岡山県 矢内 寿恵子

敗者復活 明日の風を読みながら
波紋広がる蟻一匹にない出口
啄木の母より軽くなって来た
身の程を知って背伸びもままならず
今はもう守備にまわっている命

竹原市 小島 蘭 幸

辞令一枚 四月馬鹿ではなかったか

みんな許して私は古い人間ぞ

真面目人間にされてしまっている噂

たてがみが淋しくなってきた帽子

もも組はみんな眠っている三時

竹原市 森 井 菁 居

日本の末路を見たり家電ごみ

桜満開 減塩食は侘しかり

腎不全かかえ細々生きるのみ

食べ物に欲を言わねば生きられる

コンビニで育ち忘れた母の味

竹原市 古 谷 節 夫

機密費をたつぷり遣い国乱れ

田が荒れて瑞穂の国が沈みそう

価値観の相違時代のせいにする

無器用に生きて真っ直ぐ歩む道

大輪の日まわり咲かそ宇宙基地

竹原市 三 宅 不 朽

春愁の辞書一行のままならず

プラス思考そこがあんたは他人です

コンビニのむすび切り絵のごとくあり

野仏の笑みこぼれそう夏みかん

黄牡丹 仏の頬に見えてくる

広島市 森 田 文

勢いよく咲いているのかすみ草

直感ビタリ君子ではなかった

頂点は一瞬 恋も憧れも

親しみは世代を越えてローカル線

山好きで山の容姿のことばかり

広島県 藤 解 静 風

天麩羅も私も中身より衣

根っこまで見せて話せる友がいる

ミール落下試算どおりという驕り

夕映えがきれいだったとだけ話す

穏やかな瀬戸ゆるがせた大ナマズ

美祿市 安平次 弘 道

赤い月が出るとけものが叫び出す

定年後妻から届く果し状

焦点をあわせば海が風いでくる

開けゴマくらいじゃ開かぬ不況風

修羅いくたび男は海に立ち向かい

島根県 伊 藤 寿 美

沈丁花の香りに止まる白い杖

飾らない言葉真っ直ぐ突き刺さる

忘れたい昔を連れてきた他人

ブランドー子に買う古稀のパスポート

トレビの泉アイスクリン食べ銭を投げ(ローマ)

抜けられぬ闇の道にも射す光

島根県

堀江正朗

余生なお卒寿をたどる白い杖

鯖の丸焼き少年の日を提げてくる

人並みに触れて楽しい花の土手

手さぐりの届かぬ先の夢を追う

島根県

堀江芳子

明日という光に生きる点字音

お茶ですと呼ぶの待つてる意地つぱり

頑張りはこちらから老いを生き抜こう

言うことがあつても妻という立場

戦官の妻で生き抜く知恵も湧く

島根県

森茂美

リストラの隅に過労の記事が載る

印象のうすれぬうちに書いておく

九合目で下山した子を褒めてやる

風呂敷が日本文化を包みこむ

転がる度嘘が大きくなつてゆく

松江市

佐野木みえ

吸殻を踏んで待つてる停留所

鶯が来て吾が庭も賑やかに

火の見櫓出来てお城はお茶の会

けもの道行けばかたくりの花に逢う

セピア色の日記 涙の跡がある

胸に来るはずのロマンの星が消え

松江市

安食友子

杉花粉には愛想が尽きてくる

逢瀬でのお高祖頭巾は一途です

来る来ないソファで無駄な時が過ぎ

先立たれ頻度になつたボトルキープ

出雲市

青山久子

雪解風 君の便りも柔らかい

咲き誇る桜哀しい過去がある

おむすびに祖母の祈りをこめておく

赤ワインそのくれないが憎らしい

錯覚があつて元気な八十路坂

出雲市

石倉芙佐子

対角線ほらねああしてこうなるの

一直線にさよならをする太陽

曲線の神秘今でもふれさせぬ

傍線の四季折々を愛おしむ

境界線アバンチュールもそこはかに

出雲市

竹治ちかし

一步身を下げると見える他人の所作

物事を計る自分の眼の高さ

身を守る術を雑草だから知る

口漱ぐ水にも春の味がする

人知れぬ傷を夫婦で癒し合う

出雲市 小白金 房子

地位名譽すてた男の薄い影

検診へわたしたためらう紙コップ

ネックレスが揺れる男の喉ぼとけ

花ごよみ頼つて農婦春を蒔く

地下足袋のかるさで励む農の春

出雲市 岸 桂子

このあたり昔は森がありました

ぬいぐるみみたいな犬に吠えられる

価値観の違いするめを噛みながら

日本語にないギャル達の立ちばなし

崩れゆく心遺影の目が叱る

出雲市 吉岡 きみえ

野仏も花かんざしにネックレス

気らくさもあつてひとりを間のびする

えびすさん真似のできない笑い顔

ちゅうらさんがどつしり重い尻にする

朝行の鐘に仏が目をさます

出雲市 板垣 草丘

尾道の句碑どのあたりどんな句碑

句碑を見て孫弟子ですと名乗りたい

筍が親とは距離を置いている

植木鉢あなたの留守に枯れました

点滴を卒業 両手で顔洗う

出雲市 久谷 まこと

制服をきっちり着てる一年生

深呼吸してときめきを鎮めてる

律儀者はじめて貰うほめ言葉

あるがまま見てもらいたい姑迎え

歓迎をされてはいない眼が迎え

出雲市 園山 多賀子

春の雪私の鬱を倍加する

昼の虹輪廻転生果てもなし

悪筆は遺伝と憶うそろかしこ

桜曇りほのぼの心の装を埋め

万朶の桜朧おぼろに湧く慕情

出雲市 板垣 夢酔

衣替え靴真つ白で身は軽し

金借りる気持なかなか口に出ず

死にたいが生命線が邪魔をする

スイスイとバイク渋滞すり抜ける

一票をくれと握手を求められ

出雲市 小玉 満江

ハイポーズとてもやさしいタイ娘

陽が沈むタイ王国の夢のあと

三十度二十パーツで水を買ひ

肉親と離ればなれになる玉子

小銭入れさげて朝市のぞき込む

出雲市 城 多喜

春よ春わたしに虫がつかぬよう
のほほんと老いてゆくなど柄じやない
不届きなわたしぼろりと化けの皮
尻拭いばかりしている影法師
友の愛わたしを鳥にしてくれる

米子市 政岡 日枝子

病院の入口にあるさくらトンネル
咳続き愛も私も疲れ果て
天井に張りつけてある診察券
ばらばらの風になった母の形見
座ぶとんに母は体温おいて逝き

米子市 中井 ゆき

梨送る宛名死ぬまでへらされぬ
道標を無視した若い日もあった
足止めてうこん桜にいやされる
エプロンのポッケがばらす桜んぼ
一本道先は見えぬが迷うまい

米子市 鷺見 正子

一円貨拾う縁起がいい朝だ
右脳に一錠ほしいバイアグラ
柔道着の帯まだ白き鯉のぼり
うぐいすに言われて外す冬タイヤ
少年は手の鳴る方へ背を向ける

米子市 光井 玲子

いい知らせところにワツと桜咲く
今年また桜に逢えたありがとう
丸かじり梨も冥利につきるだろう
迷わずにじゃんけんばんに賭けてみる
波風を立てまい口にチャックして

米子市 澤田 千春

仁王さん花の笑顔について笑う
クレヨン画子供梯子月へ行く
陽のあたる野原で女神会議中
ふところに故郷のせせらぎ離れない
棘のあることは集めて軒に干す

米子市 田中 亜弥

雨ごとに豊かな大地ひろがりぬ
わたくしも豊かな中の一人かな
かくや姫の子孫ひっそり筈に
散るまでの夢は誰にも明かされぬ
季がめぐり筈いつせいに伸びる

米子市 神庭 詩郎

突然の停電時間まで止める
守秘義務を盾に上手に逃げられる
毎日が日曜町内の役が来る
歩から金まで出世して定退し
ひと月も立って気付いた四月馬鹿

米子市 林 瑞 枝

折り鶴の向こうに雪の伯耆富士
しまなみ海道 船で寝てゐる蒼い海
胸いっぱい森の空気を新世紀
銀髪の再会 少女の日に還り
花活けてパントマイムのひとり部屋

米子市 門 脇 晶 子

母の地図私の道の羅針盤
夢を買う列に愚かな私も
地震から歯抜けになった市街地図
世渡りの地図は迷路が多すぎる
道草をしたから友の輪が出来た

米子市 白 根 ふ み

千秋楽まで面白く組み合わせ
国ぐにの表彰 大儀になってくる
真っさらなドラマ背負って一年生
ふきの臺 突き出しにしてあわい酒
ふきの臺 ハウス栽培では売れぬ

米子市 永 井 三 津 子

横着に打ち勝つ薬買いに行く
寡婦ひとり月を友にし露天風呂
逃げたがる心宥めてオペを待つ
独り生き心の捻挫繰り返す
拳万を破った夫の墓参り

米子市 木 村 春 枝

地震から昔の匂い消えてゆく
無駄骨も明日の糧となつてゆく
たけのこの暮らしもあつた若かつた
梨娘故郷の自慢を負うて立つ
花の旅 日本列島縦断する

米子市 青 戸 田 鶴

藪椿小さな夢をありがとう
芽吹いた樹々をやさしく包む春の雨
ゆつくりと歩き詩心ゆすらせる
友達と話す豊かな時がある
終章はマニアルとおりにならぬ

米子市 本 吉 宗 光

軽車両車検で消えた八万余
年寄り死ねよと言うか行政府
定まらぬ春にも桜咲きほころ
選抜に山陰勢の姿無し
参院選無党派派吾れの票も待つ

倉吉市 野 口 節 子

ハイチーズいつも私はブレている
明るさを取るとなんにもない私
褒め殺し何か魂胆あるらしい
税金は汗の喜び掴み取り
悪ぶって見ても所詮は蛙の子

倉吉市 牧野芳光

窓際に花幸せなふりをする
遣された一人に風が美しい
オゾン層みんなスリルの中にいる
こんな細い棒にも縋る蔓がある
子育ての日々が喜劇になっている

倉吉市 最上和枝

釣道具豪華揃えてフゴ軽い
不景気に百円シヨップ混んでいる
辛い点くれた先生お達者か
したたかに花びんの花が根を伸ばす
ブランコは多弁桜は散り急ぐ

倉吉市 松本よしえ

選ばれたわけは兎に角背が高い
祝い膳母が上座に小さくいる
根を分けて隣と植える福寿草
罪もない泥鰌が鍋の刑に遭う
掃除機をかけると猫が逃げまわる

倉吉市 猪川由美子

医療ミスうっかり病気でできません
脳ドック オツムの程度知られちゃう
老いジワリ中味で勝負しかないな
昇天の予定日神は決めており
格好の川柳ネタを総理くれ

倉吉市 米田幸子

お茶くみのレディーが足でドアを開け
淋しいが一人暮らしも良いもんだ
腹時計リズム正しく時刻む
褒められることは何にもしてません
傾いた軒を支えた家族愛

倉吉市 山中康子

猫も杓子も桜さくらと恋こがれ
身代りもできず息子の花粉症
休らいは机上乱れて午後の雨
同病にふとめぐり合い声はずむ
薄味へわたしの舌は板ばさみ

鳥取市 春木圭一郎

背伸びしてイメージ少し変えてみる
背比べやった同期も定退す
背広ともさらば自由な風となる
背を見せるなんて私の辞書にない
背負い投げヤワラちゃんなら許せそう

鳥取市 福田登美

春だから歳を忘れた彩を着る
再会は幸せ彩の見栄を張る
虚飾捨て苦言をくれる友がいる
美しい嘘は黙って聞いておく
金婚の笑顔は過去を喋らない

鳥取市 倉益一 瑶

一瞬の夢を運んだ宝くじ

大海にポイと捨てたい泣きぼくろ

今日のわたし知っているのか月に雲

一歳半の家ににされてうれしがり

お馬鹿さんにしたたりされたりして夫婦

鳥取市 前田一枝

旅帰り早速日めくり今日にする

雨雲につつまみそうなビルが建つ

包装紙中身の粗品派手にする

ずる休み逢ってはならぬ人に会い

現代っ子仲人はさむ口が無い

鳥取市 富山 檳榔樹

価値観の差でもめ揺れる自尊心

ちっぽけな生き甲斐見つけ生きる快

梅雨の花 雨に叩かれ花芯見せ

赤い靴履いたパーティー炎えている

迷い事軌道修正して生きる

鳥取市 杉本孝男

従いて来る影愛おしく抱きしめる

リコールが平和な郷を裂きにくる

おでん屋という関所あり呼び込まれ

まっすぐに走る勢い止められぬ

ぬるま湯を抜けて男になる顔だ

鳥取市 美田 旋風

油断して春一番の風邪もらう

弱気だと甘い言葉へふとなびく

アラームをセット明日まできようなら

常連が投書の欄でよく喋る

手の内は見せず流れを見届ける

鳥取市 田賀 八千代

しょんぼりとすれば悪魔が寄ってくる

咲き終えた桜合掌したくなる

鈍行で咲けと桜に頼もうか

悪さして手にした金の軽いこと

笑顔とは裏腹五臓脈を打つ

鳥取市 武田 帆雀

皿のものの一切れ残す悪い癖

知らぬ字は飛ばし勉強しています

店卸してはない客が来んのです

掻き捨ての恥が拾ったお友だち

鼻紙をポイツと投げてストライク

鳥取市 岸本 宏章

東京へ行くと明日の絵が見える

生きている人への義理もある葬儀

人知れずみんな悩みを抱いて生き

パーティーの酒は本音を語らせぬ

急浮上したらあいにく船がいた

鳥取市 西村 黙光

真実の敵は心の汚泥物

人間不信みんなが敵に見えてくる

敵へ出す手紙に映える美辞麗句

敵の目をくらます老いの処生術

塩贈る敵が段々減つて来た

鳥取市 岸本 孝子

欲がなくわさびの抜けた顔になる

長い冬耐えてみんな待つ桜

忘れ物思ひ出させた春の風

春の陽を浴びてうれしい万歩計

裏道を歩くととれる肩の凝り

鳥取市 谷口 次男

絶叫がやがて蚊の鳴く声になり

手負い猪 火の粉恐れず突進す

マンションへ帰る都会のカラスたち

十円が切れた電話の薄情さ

同穴の貉や政治評論家

鳥取県 羽津川 公乃

金の無い気楽さ枕高く寝る

機密費は孫に貢いで悔いもなし

仏壇の供物減らぬも淋しかり

変身ごっこ好きな満月鎌の月

熊除けの鳴り物入りでわらび取り

鳥取県 権代 康女

すこやかな願いをこめる鯉のぼり

手話の人温い人柄もれてくる

老いるほど明るい色を着たくなる

バランスのとれた食事の愛があり

右手から手袋穴があいてくる

鳥取県 西川 和子

階段を凌ぐ手摺にすべり止め

褒めるからまた失敗をしてみよう

無心する前に何から褒めようか

場所慣れた祝辞に和む式次第

突然の不幸に言葉見つからぬ

鳥取県 乾 喜与志

春うらら杖に引かれて恙なし

むすめ婿に献上された散歩靴

頭から茶をそそがなか灌仏会

読経する声お灯明ゆらぎだし

温泉に毎日通うだけで好い

鳥取県 太田 幸枝

夫が居るただそれだけで幸せよ

黒わくの中で優しい顔になる

受け売りの話に尾ひれつけている

選ばれてこの世に生を受けたのか

よく光る眼鏡をかけて畏まる

鳥取県 吉田 孔美子

満月よ君を今宵の僕とす

月の砂漠でパラパラをおどりましよ

月満ちて五体正常よとメール

身辺のぼろに見切りをつけなはれ

もらいものすぐ食べすぐ着すぐ飽きる

鳥取県 奥谷 彩子

ふるさとの土の温もり知る裸足

民謡も民話も好きな土の橋

百選の水でさぶさぶ芋洗う

税金の重みにきしむ市場籠

土の恵み知り尽くしている父の鍬

鳥取県 土橋 はるお

びた一文も貸さぬ借れない主義でいる

火の用心たばこも止めた方がいい

世間には銭が有るふりしておこう

機密費をつまみ食いた席が空く

白旗を振って階段おりて来る

鳥取県 土橋 睦子

石楠花が手の届かない崖に咲く

心臓に悪い不足を聞かされる

咲き終えた桜に追肥してあげる

リモコンの催眠術にひっかかり

腰まげたわらびぜんまい過疎が好き

鳥取県 岩崎 みさ江

こぶし咲くのを待っていた春嵐

咲く花のひとつひとつに仏さま

花吹雪みんな詩人の貌になる

花びらを惜しんで畳む花むしろ

とんびの輪我が縄張りに異常なし

鳥取県 石谷 美恵子

耳底へ消えぬ寓話が一つある

叩くのも叩かれるのも嫌な肩

病院の付き添い長いながい夜

臆病な鰯群から出たがらぬ

兄弟で争うほどは無い遺産

鳥取県 上田 俊路

心筋の手術生還だけ祈る

風船にいのち拾われ老妻還る

生きるため集中治療室出され

天高く休耕田の草の丈

いらぬ木は一本もない母の庭

鳥取県 橋本 多哥由

幸運も金の成る木も動きだす

長寿願望一つの傷に揺れながら

女医さんが愛想よいので揺れてくる

ふる里に思いをはせる日本海

懸命にあちこちたより婿もらう

鳥取県 新家 完司

焼酎とチクワを提げてお花見た
春風がスカートめくりしてくれる
老眼鏡がすついでに大掃除
友達と比べてしまう頭と歯
喉飴をうじうじ舐める休肝日

鳥取県 さえき や え

この目覚めきつと仏の御加護だな
生きているあかし迷いがたえませぬ
強情なペンで妥協をしてくれぬ
命はぐくむ木だな涙のわく木だな
久しぶりごん太迎える五合めし

鳥取県 西原 艶子

その日から召されて姑は風になる
秋茄子のうまさ教えてくれた姑
姑送り悔いばかり浮く自己嫌悪
姑さんへきつと不作の嫁でした
忙しさに紛れ迷い子の御香典

鳥取県 石尾 かつ乃

散る花を惜しみ両手に弄ぶ
五月雨に蛙びよこびよこ踊り出す
思い切る事も修行として歩く
窓たたくしはしの別れ発車ベル
陽炎の中を泳いで来た子供

鳥取県 田村 きみ子

面白い話半分だけを聞く
手さぐりで生きているのによく転ぶ
生きてきた話をすれば腹が減る
年の差は言うまいみんな仲よしだ
言訳はよそうと決めている苦行

鳥取県 原 みさを

パソコンに指の固さを笑われる
足して引いて女の本音だけ残る
神さまがいて戦が終わらない
勝手口からそつと出てゆく前総理
介護法 父が小さくなつてゆく

西宮市 刈田 泰司

軽石とへちま懐かし里の風呂
軽い嘘重い荷物になりました
旅は良し生きた知識をこの足で
万歩計いらいらさせて立話
古希近い妻に行くところ多すぎる

西宮市 井上 松煙

部屋に花彩とりどりに若返る
新緑にせかされている衣替え
駅弁をスーパーで買い旅気分
昼寝する効能聞いて大いばり
死にざまを心配してる余命かな

西宮市 奥田 みつ子

あじさい忌 花は咲けども人は亡し

神様に見える時あり主治医殿

好きな本読めなくなつた哀しい目

春霞消えても心晴れぬまま

時々自分褒めねば生きられぬ

西宮市 山本 義子

夕焼けをふところ深く掬いとる

北帰行日本の良さを忘れずに

一歩さがり野次馬でいる面白さ

金いらぬ自尊心ならもっている

ひとり風呂今日のあくたが浮いている

西宮市 門谷 たず子

躓いてからは小石もよく見える

キャッチボールの愛がすこうしずつれてきた

その上を望めばこころ瘦せてくる

接点を見付けて丸く住んでます

無事平穏祈る小さな鈴を振る

尼崎市 奥山 美智子

カラフルな傘さす雨もまた楽し

約束を果たせず雨の日が続く

ひとときのときめき照らすシャンデリア

噂聞く他人事とは思えない

一輪の花の命のいとおしさ

尼崎市の場 十四郎

病床に伏して友情身にしみる

連れ添うて分かり始めた合縁奇縁

美人にはめっぽう縁のない男

子は宝目立たないけど列にいる

二浪春 親は焦って子はせかぬ

尼崎市 田辺 鹿太

忙中閑男がひとり花に酔う

狩人の眼で新聞を読んでいる

迷うたらあかんアಂತも歳やから

バブル期に踊ったことのある更地

ロマンスの欠片が浮いている港

伊丹市 桎谷 郁子

我が机癒しをくれる温みあり

机知る悲喜こもこもの青春譜

自画像を重ね塗りして美人とす

七回忌揺れる灯の中浮ぶ顔

雨粒をポツンと落とし雨の愛

伊丹市 小熊 江美

独り住み風の音にも気をつかう

友情があつて乗切る世の風

只今と言える家族が居てくれる

卒業はしたけど職の無い悩み

此の辺で卒業したい孫の守り

伊丹市 山崎 君子

川西市 米原 雪子

半開きはじらうようにチューリップ

雁よさよなら池にキラキラV字形

ウグイスも合いの手入れる選挙戦

追試合格 祖母の祈りの届く朝

同期会花ヒラヒラと丸い背な

芦屋市 黒田 能子

カラフルな鬼ばかりいる物語

大阪の外国人の大阪弁

丸椅子も並べ全員集合す

おにぎりをコンビニで買う子供達

子育ての心配してた頃が好き

神戸市 山口 美穂

同窓会タイムスリップ六十年

針山の待ち針指定席がある

通り抜け終って浪速の春もゆく

折紙の兜で五月を演出し

花吹雪犬よろこびの歩をはやめ

神戸市 池田 善守

正解はいつも一つと教えられ

先の事分らないから生きられる

一万円一年預けて利子一円

私の賞味期限は日々延ばす

妻の引くルールにのらぬものは悪

駅に来てエアコン止めて来たかしら
フォークダンス人生語るいろんな手
散歩コース変えて予期せぬ友と会い
パソコンに楽しみ一つ増やす意気
跳ねて行けばあちやんからのランドセル

川西市 松本 ただし

うつ伏せに寝る癖があり泣き黒子

天井のエビの尻尾は天を向き

一匹の鮎で終ってそれでよし

言行の不一致見ていた雀の子

カルチャーでビクビクさせる片仮名語

川西市 西内 朋月

宗教が来てうたたねを起こされる

日曜日ごろごろしてて日が暮れる

マフラーを頭に被る春の雪

駅前の居酒屋に寄る旅帰り

呑んべえの口実と言う花が咲き

三田市 久保田 千代

いい妻を演じなかなか寝つかれず

A型で気苦労絶えぬ日を送る

ふくらんだ話の芯が見つからず

期待せず己の分をわきまえる

不確かな記憶の先にある秘密

三田市 北野哲男

先生と呼ばばあちこち振り返る

旅誘うビラになかった杉花粉

初対面 病氣問ひ合い順を待つ

少子化で子供のままの親が増え

矢印のとおりに行けば友も居り

姫路市 古川奮水

土地柄を失いかけるビル破壊

はち切れる声で返事の一年生

世渡りが下手でも大勢友がいる

立ち話木陰を選ぶ五月晴れ

いかなごのくぎ煮が鯛に勝る日々

相生市 中塚礎石

少年へ一言涙脆くなる

身の程を知らずに飛んだ罰当たり

耳搔きをしきりに使う母は老い

大輪を後ろの方で見る作者

止まり木のコップはいつも違う夢

兵庫県 大谷幸次郎

花粉症の鼻にわさびが活を入れ

栄転に遠い過疎地の月仰ぐ

ひと様のお札数えて臙髒炎

ていねいな言葉で包む下心

大声で歌って胸を空にする

和歌山市 西山幸

副作用だけがたしかな生命なり

神様の作品あんなこんな顔

たいくつな主役のたいくつなせりふ

円満な話が好きな小豆飯

因果応報まだ悪汁を出しきれぬ

和歌山市 青枝鉄治

大人のするげんまん何故か不倫めく

喚問へ頭もたげてくる持病

傷心を集め予備校花ざかり

雷がほくそ笑んでるへそルック

値上げせず量を減らした焼き鳥屋

和歌山市 川上大輪

お喋りが少し過ぎます通話料

冷蔵庫の隅に残っていた余罪

風を掴まえて昔の話など

声が大きいくだけで頼りにされている

わが家からまだ出て行かぬ寒気団

和歌山市 山根めぐみ

竹の子が首をすくめる戻り寒

アンレまあクラスメートのアデランス

夢ぎゅっと握ってのびる露のとう

完璧を求めてチョンボばかりする

気にしないすぐに晴れるさ通り雨

和歌山市 榎原公子

愚口多くなつて慢心省みる

許されて来たのは私だったのか

九十の姑に負けてる農作業

新米の農婦に野次が飛んでくる

田舎万歳 小犬ころころ遊ばれる

和歌山市 山口三千子

酒 煙草 美食 老い先考えず

退職二年やつとあきらめつきました

止まつたら倒れるだろう夫婦独楽

不安抱きながらも明日の米を研ぐ

家の化粧セールスマンにねばられる

和歌山市 木本朱夏

赤ちゃんの爪もいろいろに春おぼろ

赤ちゃんのひとり遊びの目の動き

だるそうに猫の寝ている花曇り

探しものまだ見つからず桜散る

ケータイで別れ言葉は言い易し

和歌山市 細川稚代

なるようになれ どうせ独りの飯茶碗

桜満開お誘いのゴザあたたかい

町内の女性パワ―の花見酒

新世紀女の地図をぬりかえる

はよいかな真田ぼたんが待っている (真田幸村庵)

和歌山市 松原寿子

墮ちましよう優しい胸の深みなら

黒髪も微風へ愛を察知する

想いまだ砕けず背なを追うている

殻ひとつ脱いで心の闇を斬る

夢の続き真昼の海へ迷い込み

和歌山市 楠見章子

路地裏の花に見惚れて迷い込む

隙狙う忍者を胸に飼っている

シンフォニー奏でるキリリ花吹雪

花疲れ生気すつかり吸いとられ

激安の文字と転がる春の坂

和歌山市 福本英子

コーヒーは濃い目に春の月曜日

花の下みなケイタイを掛けながら

四月一日私の彼は行方不明

もう出番くることはない夫婦箸

春うらら棕櫚も負けじとごつい花

和歌山市 福井桂香

花散らしの雨もまたよし嵐山 (小雨の嵐山にて 2句)

欄干の風情が消えて渡月橋

花びらを敷いて浮世の顔になる

去年よりいとしさ勝る花の宿

万華鏡願ひひとつを弄ぶ

和歌山県 吉村 さち子

どつと春倅せ色の花を買う
どの真蘆も天下ご免の花の宴
体調が戻ると走りたいわたし
豊かさに馴れた孫らの自己主張
百歳の軒ときどき確かめる

和歌山県 田中 みね

特選牛焼くので窓を開け放つ
三姉妹と言ってもそこは姥姥
最後は二人仲良うせんでどうします
従いて来いと言うけど夫六十四
一難去ってまた一難へ立ち向かう

海南市 三宅 保州

一枚岩と限っていない反対派
気が狂ったように走っている車
机上論汗の匂いが欠けている
戒名はリズムつけると読みやすい
Vサイン大の男に似合わない

海南市 谷口 義男

こだわりを聞き流すのも和の温み
綽名聞き度忘れしてた名前湧く
痩せ我慢して居るなあと御見通し
のびのびと育ち親の苦など知らぬ
多数決納得出来ぬ少数派

和歌山県 中後 清史

妻や子が居るのにほんま阿呆やった
ライバルにだけは見せたくない涙
言い訳をするだけ影が薄くなる
ごり押しをして孤立する羽目になる
白髪染めながら自然美考える

箕面市 岩津 ようじ

醜男が大好きという美人ママ
重信房子のとっても感じいい娘
その不倫成功ほっとさすドラマ
この不況知るまい桜梅椿
やーさんのようなも混じる総裁選

豊中市 吉田 あずき

ガラス磨く春がきれいに見えるよう
お先にと小鳥が謳歌してる春
春うららひよいと亡夫を捜す癖
ルールブックわが手で書いて背いてる
ライバルのスマイル深読みしてしまう

豊中市 安藤 寿美子

春うららお寺まいりが好きになる
芝居のよう落慶法要花吹雪
ガラ空きの宝塚線午後一時
名簿から一行削除つらいこと
介護料引かれ年金しょぼくれる

豊中市 松岡久留美

ライバルの誘い素直に受けられず
唯一の友の人柄見習おう

身に余る話不安で受けられぬ

年取って一言多く疎まれる

ゆっくりとその日と思う仕舞風呂呂

豊中市 田中正坊

つぎつぎに大正琴の弦が切れ

生き残り友の追悼文を書く

毎日をゆううつにする花粉症

大阪にアメリカが来たUSJ

二時間も待ってジョーズ七分間

池田市 栗田久子

スナップのこの一瞬はまだ若い

目が合えば断われぬから下を向く

寄り添って生きているからいつも春

あじさいの青はわたしを裏切らぬ

うのはなの白い垣根に癒やされる

高槻市 傍島克治

口動き足が動かぬハイキング

親切も不思議がられる茶髪の子

世渡り上手本音建前使い分け

困った時はお互いやかかと借りに来る

仏壇をすすめた仏具屋先に逝く

高槻市 井上照子

孫娘もう大人だな彼という

毛を染める見栄だけでない気力だす

無意識で触れてプライド汚される

海の夢亡夫泳いでる音も聞く

雑草も愛し遠慮か鉢の隅

高槻市 江原秀夫

出納簿妻の吐息が赤く染め

テレビ消し向かう机に夢を追う

朝の温もりほつほつ気力沸いてくる

一筋に生きて霞んだ世間を見

色もよし団子も旨い花明り(宇治橋)

吹田市 石原靖巳

うす味が妻の愛とは知らなんだ

大望があるからこは折れておく

ミスしても怒鳴ってくれる人がない

夜逃げした男と出会う始発駅

サイクルを変えても不運つきまとう

吹田市 大谷篤子

切なくも軽い握手を交わすだけ

フルムーン私も赤い靴をはく

一泊にほどよいカバン買いにゆく

春と冬こもこもに來て桜咲く

荒れた地のすみれの花に意地を見る

吹田市 穴吹尚士

窓際で求人欄を盗み見る

リストラの気配漂う決算書

いろいろと出来ないわけを並べ立て

大金を握り疑い深くなる

ボロ家になってローンがやつと済み

茨木市 堀 良江

春風にほら笑ったよ鬼瓦

旅仲間家族のようなおつきあい

何度でも行きたい花の尾道へ

旅空もわが家の空も同じ雨

四月馬鹿今日一日は嘘言わず

茨木市 藤井正雄

逆転をされはしないかロスタイム

二丁目へ引っ越して来た組事務所

誘惑と一緒に詰めた招待券

居酒屋へ昼間叱った部下誘う

USJ妻が少女の声になる

守口市 結城君子

和菓子から連翹に移る立ち話

献立を教えてくれた春の風

声たてて笑い淋しさだけ残り

大家族の思い出話花祭

踏みつけて木の実正体あらわさず

枚方市 海老池 洋

真つ直ぐに向かい話せぬ深い訳

退社ベル夜のマスクに取り替える

空港の隅 出会いとは別れとは

割れるまで輝く僕もしゃぼん玉

時事吟を今日もぶつける日記帳

枚方市 宮川珠笑

介護ふとこぼすいつまで生きるねん

爺さんのお経狂わす孫並ぶ

孫の焼く目玉は黄味が皆笑う

御守りが救急箱に仕舞われる

孫がまだ私見守り風呂にいる

枚方市 寺川弘一

主義主張変えずに歩幅だけ変える

答えに困る質問をする孫が好き

腹の内見せて蝶の白い裏

ロープデコルテ青春のひとつのかたち

動かない人形の目に笑われる

枚方市 森本節子

風邪癒えて幻覚症状も消えてゆき

矢絣の乙女想わすニラの花

春うららお誘い電話リンリンリン

老犬になっていよいよ思考型

背のびして暮した昔を悔いている

寢屋川市 富山 ルイ子

寢屋川市 森 茜

孫一人増えたと友の花便り

花の雲犬もゆつくり散歩道

花曇り全快信じ友見舞う

桜花爛漫豊かな暮らし願いつつ

花明り かたちあるものすべて消え

寢屋川市 高田 博 泉

満開の桜へ次は通り抜け

百円でサッカースーツを買

春うらら二人で語る弁当もち

洗濯の合間に茶漬け流し込む

大吉を引いてデートのコース変え

寢屋川市 坂上 高 栄

二〇〇一年街は変らぬ風が吹き

保育器の中で未来を蹴り上げる

柔軟なアイディアマンの前頭葉

此の命拾いものですドナーカード

七転び八起きで建てる地鎮祭

寢屋川市 酒井 勇 太朗

子の門出ワインとピザで味気ない

虚無僧になりたい雑事多過ぎる

生きがいに始めた趣味が足かせに

同窓会 会いたい人は誰も居ず

古希越えて悲しいことが増え続け

留守電へまちがい電話した波紋

ほろ酔うて猫の尻尾になぶられる

石だたみ濡れてしっとり歩いてく

ほどの良い誘いに惑う春の宵

ひたたくりに会わない構えて出かけ

寢屋川市 平 松 かすみ

口喧嘩しても朝昼晩を炊く

お互いにもてなくなつて趣味一途

うちの娘が主役になっているビデオ

また騙されたお茶漬けのコマーシャル

クール便お裾分けするママチャリで

寢屋川市 太 田 とし子

オイとハイ固く結んだ丸結び

現役のわらし脱げない仁王さま

愚息でも傍に居るから眠られる

宿帳に夫婦と恐いことを書く

青テント励ますような花の枝

寢屋川市 北 岡 波留吉

朝露踏み八十路元気に野良仕事

場数踏んだお陰で今日の俺がある

女におぼれ出世街道踏み外す

こんな俺を信じ切ってる過ぎた妻

花束を持てば絵になる妻の顔

寝屋川市 岸野 あやめ

ああやれやれ勤め果たした霞草
することのない淋しさも楽隠居
お誘いのおかげで奈良の夕ざくら
セールの電話ああ言えばこう言われ
こばれ種 播いた種よりたくましい

交野市 森本 弘 風

飲み仲間揃うてザンゲ酒のこと
血圧と相談しつつ飲むお酒
欲しい物無いから買わぬデフレでも
無理矢理に古稀が迎えに来てくれる
むくむくとミドリが萌えて山燃える

八尾市 神原 まさと

散髪に行こうと誘う春の風
春風にシャツを一枚脱がされる
舞茸の効用聞いて鍋がふえ
税務署と聞くと慌てる癖がある
メールから生まれた恋はすぐ消える

八尾市 宮崎 シマ子

鏡よ鏡この老人はだれだろう
宅急便 夢を満たしてくれる箱
倅せは今年ももろたカーネーション
諸行無常 遍路の肩に散る桜
まだ生きる大きい冷蔵庫を買った

八尾市 長谷川 春 蘭

うそもまたほんとなるかも四月馬鹿
痛いほど膝に乗る子と留守居する
アルバムの中のその後知らぬ幸
チューリップの首うなだれて恋終る
幸せは母在りてこそ鯉のぼり

八尾市 吉村 一 風

おしゃべりの春を楽しむレモンティー
いのち盛る朝の野菜といい話
お調子もん拍手に乗ってしゃしゃり出る
真ごころは分るよ胸にじんとくる
損得を言うから返事困ってる

八尾市 生 嶋 ますみ

さよならがいつぱい落ちているホーム
幸せを競い合うよう布団干し
余生という空間好きに泳いでる
階段を下りる音にもある個性
あぶら虫死んだふりして生きのびた

八尾市 高橋 夕 花

川柳の手ほどき 文秋 智子さん
淋しくてかなしく合掌するばかり
私の弦がときどき故障する
地図にはなかった私の吹きだまり
マニキュアもルビーもいらぬ倅せだ

八尾市 宮西弥生

今日もまたひとりに馴れて日が沈む

若い日の涙わたしを強くした

新しい町にも馴れて深夜族

もう一度夢のつづきへ橋かける

灯がある日 父となり母となり

八尾市 内海幸生

嗚乎今日も生かされている陽が昇る

満開の花に埋もれていてひとり

励ましの友の電話を聞くうつろ

老木のさくらの精気真似ようよ

ひとつ覚え二つ忘れて老いすむ

八尾市 高杉千歩

骨壺の重さお骨の軽さかな

バスデーですね お赤飯供え

日記書く仏に話するように

横着なくらし丸干しで三日

ピン・ポンへ鍵あける癖直らない

八尾市 村上ミツ子

救急車はじめて家にやってくる

脳写真内出血は白い色

頭こわれた夫呼べども答えない

覚悟してそれでも奇跡信じよう

これからも夫を恋し続けます

羽曳野市 徳山みつこ

よもぎ摘み孫へ電話をしてみよう

春爛漫大根蕪も花をつけ

ボチボチと私の膝も反抗期

ハプニングあつて一日おもしろい

頬紅に元気をもらう病み上がり

羽曳野市 吉川寿美

丹念にこころの窓を拭いておく

バツカスとこの歎びを頷ち合う

二番手が好き風避けにはなるまいて

積み木つんで崩して終りのない手紙

傷あとを深くするのは他人の眼

羽曳野市 酒井一壺

大伽藍ハトから見ればただの屋根

電車からあの青い屋根僕の家

念願の瓦の屋根の家に住み

一徹なビルの谷間の鬼瓦

心配は自分一人になったとき

羽曳野市 西村りつえ

ローカル線桜絵巻を焼き付ける

人を恋いさくらの影で咲くミモザ

入園式不安もちらりつぶらな目

前向きな助言無視され春のうつ

意気込みも中途半端で季が移り

藤井寺市 鴨谷 瑠美子

願望にとどめた恋のいじらしさ

白い蝶連れて行つてよ花遍路

てのひらを眺め未来に行き止まる

お別れは嫌い中断してる恋

身は軽くフリルの傘でしようぶ園

藤井寺市 高田 美代子

考えてみようかフリーエージェント

致死量の酒を愛して病んでる

美しい錯覚だった流れ星

鬼の子かも知れぬと思うときがある

横顔の冷たい人が好きになり

藤井寺市 太田 扶美代

このままにしておきましよう野のすみれ

合格を待つてる僕のチューリップ

チラシずし母がいてもいなくても

桜満開 女々しい事はもう言わぬ

おめでたが続く人生今が華

藤井寺市 楠 昭子

前向きに歩こう赤い服も着て

走れ走れきのうの事は気にせずに

中の千本ちようと見頃で吉野山

トリックかも知れぬ桜が咲いて散り

うっかりと口が滑つてからの乱

東大阪市 安永 春

草萌えて土筆 蓬の野に遊ぶ

満開の桜 浄土の通り抜け

満開にさくらの精の舞い衣

さくら散り造幣局で銭に化け

人波をさけて花見の庭ざくら

大阪市 杉澤 汀

花の道かすかに寮歌きく散歩

散る花に同期の姿もうおぼろ

鴨発つてもとのアヒルの核家族

教科書のどれがほんとよお父さん

はよ飲まな泡がきえるぞ乾杯の

大阪市 渡部 さと美

花嵐なんて自転車なぎ倒し

連休中緑地に座るとこがない

九十六歳聞けば何でもよう食べる

ガンに克つテレビも記事も見るのは見た

あの羽振りまで中国にしてやられ

大阪市 鶴田 遠野

不器用な手だが温みはいつも持ち

葉桜がライトアップに燃えている

露天風呂身構えさせる月明り

ライバルに並ばれ隠す荒い息

あれこれと過去を穿る恋の酌

大阪市 長谷川 会 美

一緒に暮らしまひよかと老いの春
酔っぱらいふらふらと溝の縁
崖くずれ危険注意といわれても
食通はおそばの味を知っている
スーパ―の試食思わず買いました

大阪市 清 水利 武

連休へ狭い道路は車漬け
見た目より優しさのある茶髪の子
看板の首よく変る自民党
川柳の同僚と逢う通り抜け
無駄のない動きイチロー守備もさえ

大阪市 川久保 睦 子

点滴の父の冷える掌そつと撫で
試歩一步願ひ虚しく父が逝く
蒼天の広さへ父の舟が出る
看取るもの看取られるのも世の修行
大往生思い残しのない笑顔

大阪市 辻 川 慶 子

襲名披露それは厳しい芸の道 (三津五郎)
ひとときを桜さくらの輪の中に
胡蝶蘭 画廊華やぎ人待つ
薬師寺の歳月かけた壁画見る
朝掘りの竹の子土の香と貰い

大阪市 板 東 倫 子

見納めのようにしみじみ花賞でる
大リーグ日本男児ここにあり
酔うほどに美女の繰り言恨み節
人生の不良債券暗い過去
流刑の島に野生のトリカブト

大阪市 町 田 達 子

二面性持つ人間の多いこと
それなりの処世甘辛使い分け
一陣の風に桜は潔し
散る花に風情をエレキ音ひびく
ブラックで飲むコーヒーに名案が

大阪市 津 村 志 華 子

今日の幸つくづく思う終い風呂
いろいろの涙見て来た無人駅
つり橋は心も揺らす花の風
まだ元氣あしたへ夢をつないでる
のこり物ぐちをこぼさぬ母の皿

大阪市 寺 井 東 雲

一病で増やさぬように気を付ける
ギリギリに来る人何時もきまつて
編隊の前を飛ぶのはボスだろう
どうせなら美人の前に座りたい
足の裏押してもらえば寿命延び

大阪市 小林 周 信

朧月なぜかさよなら言えぬまま
咲き終えて葉桜さやか風みどり
断わりもなく銀行がまた消える
胸騒ぎ妻が口笛吹いている
ホームステイすっかり慣れたお味噌汁

大阪市 前 たもつ

マンションで老後を暮す仲間入り
高所恐怖 三階辺で妥協する
住みなれた家で最後の日記書く
菜園へ使いこなした鋤残す
一ヶ月居場所を探す 3DK

大阪市 田 中 節 子

心配をどこ吹く風の午前様
こぶしの花 闇にひと際光り出す
トンネルを抜け菜の花の黄に染まる
コップ酒君が好きなら合わせましょ
ピエロ古いバラ色の嘘散ってゆく

大阪市 中 田 あい子

座禅草思わず合掌して眺め
うっかりと本音こぼした四面楚歌
片付けてすっきりした部屋落着かず
遺産わけすませすっきりしたと友
鉢の花咲きこぼれてる露地の春

大阪市 川 端 一 歩

一回のいのち滾らす夢がある
ひと駅を歩けば知恵の輪が解ける
いざ戦 味方を多くしておこう
この川に蜚が戻る日はいつか
さりげなく主役は脇を讀めている

大阪市 西 出 楓 楽

一瞬の油断デビルの高笑い (三月十四日右足骨折)
小骨一本折れて軟禁される春
FAXと電話に頼る春ごもり
ショッピングの夢閉じ込めておくギブス
松葉杖上手になつて癒えはじめ

大阪市 鈴 木 トヨ子

撫で仏 欲が多くて悩ませる
玄関を飾ってくれるミニ桜
コーヒーマシンが肌に合う
大正生れいやと言う程辛さ知る
政治家の甘さが世相まで変える

大阪市 井 上 白 峰

程ほどを知らぬ男の勇み足
均等の海で個性が浮き沈み
輪の中に居て温情に気がつかず
辻褄を合わせて嘘を温める
都市砂漠バブル景気の夢の跡

大阪市 川原章久

春の匂い包んで店の桜餅

さんざめく花見の宴のスピーカー

時僅かな讃辞を惜しむ桜咲く

リストラの鬼にもあつた泣きぼくろ

道後から土産に貰うた花粉症

大阪市 津守柳伸

さわやかな風懷にディナーショー

霧囲氣に釣られのこのこ淋しがり

そばに居てグサイうるさいタバコの輪

類が友呼ぶ一泊の盛り上がり

屋久杉はくるな来るなと雨を呼ぶ

大阪市 小糸昭子

ダム一つ造る議論が白熱す

桜折るホモサピエンス許せない

展望台花花花を目で食べる

つつこみをばけてやりとりおばあちゃん

考えてブラックユーモア逃げられる

大阪市 安達はじめ

梅雨晴れ間心の窓はみんな開け

家中のメモで重たいカレンダー

やりとりがあつて親子の情が増す

温室の花は歳時記まごつかせ

はちきれる若さをなでる初夏の風

大阪市 松尾柳右子

あちこちに話花咲く同窓会

トタン板ジャズ奏でてる雨つづき

雨の日にとつて置いた針仕事

雨になり軽く済ませる市場籠

三歳児雨に唄うよ赤い傘

堺市 村上玄也

餐付けの匂い浪速に春の風

徳利をつまんだ指でつまむ耳

人だかり分けて入って買わされる

拝観料払い賽銭まであげる

不況解く方程式が見つからぬ

堺市 近藤豊子

さかあがり おかっぱふさふさゆれてます

雨の日の千代紙 花のようにあり

おりがみのびつくりばこにすむたぬき

年年歳歳ひとつおぼえの鶴を折り

合掌をして箸をとる隅のひと

堺市 志田千代

ふくよかで心配性でありにけり

心配無用 妻より長生きはしない

カレー残す心配事があるらしい

心配をしてはおこられている母

誘惑に負けてみたかったと思う

堺市 矢倉 五月

突然に膝が老化を訴える

積立てた倍ほど使い旅終える

前を行く夫のハミングちと音痴

退職後仕事のように日記つけ

懐かしい皿で料理の出る実家

堺市 和田 つづや

ささやかな夕餉も家族みな揃い

言い訳が滑らかすぎて怪しまれ

うわ言のように祝詞を暗記する

素うどんにすると七味が生きてくる

春風とスキップしてるスニーカー

堺市 神原 文

散りぎわの悪い男へ花が散る

桜前線荒れた列島朱に染める

芽立ち時 由なき微熱下がらない

恥じろうて命絶唱するぼたん

年重ねますます疑問増えてくる

堺市 柿花 紀美女

一流は時の流れに逆らわず

上天気老いにも合った仕事する

今日も無事日暮れ夕焼雲仰ぐ

成人式今日イヤリング揺れている

伸び伸びと寒気の中のミニスカート

高石市 浅野 房子

つまみ食いではない味見しています

寝ていても味にうるさい人でした

錯覚か記憶違いか月おぼろ

唐突に目まいが襲う花ぐもり

舐められた人のよいのもほどほどに

和泉市 中川 楓

職退いてよりの人柄 風光る

墓まいり心にすつと春の風

化粧品売場の嘘を信じたい

花粉症の声なやましい電話口

ハンバーグ顎の張らない美男美女

和泉市 岡井 やすお

リリースもどこまで続くやら自民

青テント大きな犬を飼っている

知事 理事長 土俵の下で押し相撲

ハネムーン危ない国へ行かぬ事

父の日に何が欲しいと子の電話

岸和田市 藪野 けい子

鹿肉を食べて三年命延び

舟から見る桜吹雪に風のいたずら

孫を抱き犬を相手に日なたぼこ

よく映る鏡に磨く笑いじわ

大安を祝うお金に羽根がつく

岸和田市 原 さよ子

無駄話 結構私の役に立ち
口ほどに日曜大工捗らず
野点の席へ琴の音快く響き
怠け癖知らないうちに板につき
傷心へ明日があるよと茜雲

岸和田市 宮野 みつ江

パステルのメカネに変えてどこも春
ベランダに春を呼び込む花の苗
あの人の弱気放っておけなくて
大仏に逢えた帰りの甘酒屋
山寺の心づくしのよもぎ餅

岸和田市 井伊 東吉

冷えも良し桜長持ちしてくれる
たこ焼が団子の代りする花見
努力せぬJAに吹くネギ嵐
サムライの活躍に湧く大リーグ
六月の山を越せるかタイガース

岸和田市 木村 正剛

ニアミスに胸撫でおろす嫁姑
銀行のピンチ救った僕の税
二重丸ひとつもらって欲がでる
妻の座を狙ってやるぞ定退後
ヒトゲノムたかだか蠅の二倍かな

岸和田市 高須賀 金太

癌細胞と闘っている高い熱
腹わたが引きちぎれそうエタノール
熱と痛みにも三度の飯は平らげる
思ってたより傷口は早く癒え
スタッフに感謝あるのみガンに克つ

岸和田市 池田 寿美子

名優をしのぶみやびに雪月花（歌右衛門さん）
ウクレレにあーいやになっちゃった青葉風
このままでいいのか風に問うてみる
生かされて転居に学ぶインパクト
ささやかなよろこび求め森へ行く

岸和田市 岩佐 ダン吉

流浪の日今も温めている日記
変り身の早さに距離をおいている
核ゼロで地球の疲れほぐしたい
何を着てもあのモデルなら似合いそう
飽食の列島明日が見えてくる

富田林市 藤田 泰子

すんなりと好きだと言えた四月馬鹿
長い目で見てあげよう何時か咲く
三年目不毛の土にも草の芽が
蝶々のようには急に变れない
私の終着駅は花の寺

富田林市 中崎深雪

戦への激しき怒りピカソの絵

ジブシーの悲しみのせてフラメンコ

神技としか思えないアルハンブラ

デラックスホテルなじめぬ安月給

イスラムの誇り気高きアルハンブラ

富田林市 大橋鐘造

いざと言ふときの白旗持っている

風と手を繋いで生きている鯉のぼり

世渡りが下手な男の玉の汗

錯覚の顔が映っている鏡

のほほんと夢を食べては生きている

富田林市 片岡智恵子

良心をちよこつと汚し楽になる

一筋縄でいかぬ背中をみてしまふ

すったもんだの話のものは同じ人

夫への合図がとんと通じない

ワンテンポ遅れコーヒー運ばれる

河内長野市 井上喜酔

迷うから菩薩に力借りに行く

年金は振り込み財布を握る妻

愛惜の思いを刻む古時計

老化した頭に昔浮いている

新弟子よ大きく育てチャンコ鍋

河内長野市 植村喜代

絡みつく欲に人間壊される

たまに出て体を軽くして帰る

春うらら隣近所はみんな留守

ペランダの岩湧山が今日見えず

考え方一つ変えたらまだ元気

泉佐野市 山本蛙城

遣伝子にやがては不老不死の世か

郭公を聞かせて誘う地下の店

店並ぶ哲学の道落ちつけず

総裁選シュプレヒコール労組めき

人脈の広さ慶弔忙しい

大阪府 榎山隆盛

花の宴 氷川きよしになり済ます

さくら散るたんびに一つ年を取る

少子化の風に逆らう鯉のぼり

ジュラシックパークで白亜紀に戻る

ライバルの影がびったし放れない

大阪府 澤田和重

ああ夫婦 話題が枯れてゆくこわさ

切り札があるので含み笑います

試着室ばくも脱皮をくり返す

過労死を怖れた頃が華だった

幸運の女神逃げ足はやすすぎる

大阪府 米澤 俣子

憎まれず憎まず過すむずかしさ
こだわり過ぎて足 前へ進まない
のんびりと出来る時間も金で買う
損ばかりしている馬鹿な自尊心
ひとつ覚えふたつ忘れてマイペース

京都市 都倉 求芽

旅に出るいつもの私は家に置き
水かきも翼もないが夢はある
気配りを紡ぐと玉虫色になる
心電図ウソ発見器より正確で
ひやめしにされて秋田こまちが怒ってる

京都市 高島 啓子

義理の母ゆえか心配ばかりする
衣食住そろいビタミン剤売れる
信心で造ってみたり壊したり
嫌煙権やや信仰に近くなる
孫の服掛けてるだけでなごむ部屋

京都市 山海 友熙

六月の蛙柳の下に住む
雨に逢う街で帽子を深被り
傘を持つ右手に軽い罪がある
土砂降りのお地藏様の泣きボクロ
樹の匂い青蓮院は雨の中

京都府 丹後屋 肇

看護婦に素直なウチのへそ曲り
点滴のベッドで自分史を刻む
手術室モニターにみる我が臓器
良性と告げられて足 宙を舞う
病友を置き去りにする退院日

京都府 稲葉 冬葉

駅の真っ正面にある嵯峨末生流
短命でした好きなこととしてはった
はんなりと暮せば思考力おちる
決り文句で借りにくるから憎めない
こまった困ったと困った顔でなし

亀岡市 井上 森生

ミツバチは気にも留めない花粉症
柔らかな筍 強い竹になる
変わろうと国を愛する人が増え
ウキウキのプラス思考を株価にも
お金にはならぬ慈愛が忘れられ

奈良市 米田 恭昌

不況風大樹の影も揺れ動く
鳶が鷹生むはずはない子の二浪
妻戻る日を心待つカップめん
春場所に座布団の舞うフィナーレ
エジプト展謎は謎生むピラミッド

奈良県 渡辺 富子

美わしの大和は緑主張する
 きらきらの哲学語る子の巢立ち
 ほんのりとエロスに酔わす伎芸天
 ほれ薬効いたか老父の赤いシャツ
 ゆっくりと枯淡の色に染む夫婦

大和郡山市 坊 農 柳 弘

朝シャンの抜け毛気になる衣替え
 垣根越し卯の花濡れて夏姿
 初月給ネクタイくれたやんちゃくれ
 夾竹桃やさしい母の顔で咲く
 街路樹の銀杏しっとり走り梅雨

橿原市 居 谷 真理子

もう恋に酔えなくなつて酒を飲む
 会議室みんな眼鏡をかけている
 念入りに花に水やる頑固者
 紅ひいて病人に嘘つきに行く
 お裁きは神に任せて茶漬け飯

香芝市 大 内 朝 子

ぶっちゃけた話のできる花の下
 凸凹をたがい底に合う夫婦
 娘の電話やさしい声で無心する
 姉妹をライバルにする他人さま
 好きだから大事に守る車間距離

弘前市 岡 本 花 匠

クロッカスの黄色に咲いて一年生
 子に託す願いに揺れる葱坊主
 なけなしの財布はたいてパンの耳
 運鈍根 曳く人生の尽きぬ夢

弘前市 櫻 庭 順 風

憧れを辿りに辿る河童橋
 先鋭な鉾 颯爽と天を突く
 びゅうーんと頭上を飛んだ死の恐怖
 仏恩の高さに感謝する揚羽

富士宮市 渥 美 弧 秀

吾が余生音楽と詩に生き延びる
 さり気ないひと言葉の心刺す
 お爺ちゃん肩をもむネと背へ回る
 初富士を借景にした東海道

富山市 島 ひ かる

川柳が戻りいきいきするサクラ
 バイオリズムいいのかじっとしておれぬ
 キレそうになると風景画を眺め
 星のこと息子とはなし夜が更ける

高知県 小 澤 幸 泉

定年の宴はなやぐように見え
 言えぬことあったそれでも生きてきた
 つらい職場をはじけるように語り出し
 しくじりも笑いとばしてギャル元気

唐津市 市丸晴翠

不器用な夫を置いて渡れない
曲折の世にも律儀に花は咲く
ラーメンの噂旅情をかき立てる
どこまでも平行線の愚痴を聞く

熊本県 岩切康子

チラシ見て夫が誘うお買物
為すべきを一つ減らして前進し
偏食や生い立ち語る凡夫婦
満開の桜眼の位置にぎり飯

岡山市 井上柳五郎

安定剤がわりの酒を飲んでます
蛇の道はへビアンテナを立てて待ち
苦勞せずやめたたばこと強い意志
戦友会枯木に花を咲かせ合う

竹原市 時広一路

マネキンの髯 笑顔は控えさす
笑顔しか見せぬモナリザだから好き
女偏いろいろ男偏いずこ
老いの坂所どころに椅子がいる

出雲市 岡あきら

鶯に声かけられてウォーキング
朝焼けの空僕だけの美術館
今日からの絆心も添えて注ぐ
口付けをも一度野暮なカメラ達

出雲市 富田蘭水

生き残り特攻桜が散りいそぐ
ふれ合った言葉が消えぬ花の下
花冷えが私の奢りたしなめる
片ことの孫とはしゃいで春惜しむ

松江市 川本 畔

読経が春の嵐を吸うて吐き
もう家のどこにも居ないお母さん
よかったか迷い続ける臘月
両の手で冷静に死を受け止めて

島根県 榊原秀子

海猫の恋 島にも春がやってきた
ホワイトデー分けて貰ったチョコレート
つくし摘むつくし料理をきいたから
不況風せめてひととき花に酔う

鳥取市 岩原喬水

内密をうかうか酒が喋らせる
美人ママ煩惱止まぬ足運ぶ
馴れ過ぎて空気のような妻になり
地顔です鏡は嘘を言いません

鳥取市 近藤佳子

点滴の落ちるたしかさ自信つく
母の雛母のまなざしそのままだ
春愁か雛もさみしい顔なまる
南十字星あこがれのまま逢う日なく

鳥取市 山本 益子

年月は勝手に進む空しいな
半分は信じたい嘘受け入れる
定年のスタート台は土いじり
別れ話一肌脱いでものとさや

鳥取市 夏目 健一

年寄りの冷水そつと薬飲む
金もなく力もないがベンがある
無口でもネタはぎつしり持っている
牛井が景気に活を入れている

鳥取市 上田 宣子

識り過ぎたカラスが山にひきこもる
かあかあカラス苦勞が声にでてしまふ
真実を拾うきざしは六十路まえ
片時も忘れられないなど嘘ね

鳥取市 徳田 ひろこ

ものぐさに居心地のいい籠の中
偶然の出会いも幾何学の模様
男尊を守り続けている砥の粉
どの角も庇いひとつの灯を護る

鳥取県 林 露杖

天心の月の真下の春愁か
錦絵にかかる景あり山桜
風吹かば燃えるわたしは火の女
エンが泣き北叟笑んでるドル・ユーロ

鳥取県 塔 寛子

カードには人生変える裏がある
いつ出そう切り札胸に年重ね
人間の続くいじめに地球哭く
効きすぎたわさび話の腰が折れ

鳥取県 山本 正光

脳味噌の賞味期限がすぎている
仁王様笑い顔だとなお怖い
忌が巡る妻に涼しい風の盆
性懲りもなく晩酌を重ねてる

鳥取県 黒田 くに子

働ける場所があるから気まま言う
つかまらぬ虹追いかけてばかり居る
笹舟もしずかに夢へこぎだした
遺産ゼロ兄妹みんな仲良しだ

鳥取県 国森 武子

あの人と挨拶すれば気がなごむ
母逝って少しわかったつつましき
春休み孫トランプの腕をあげ
トランプに負けて嬉しい春休み

米子市 中村 金祥

明日の風見抜き予定の日を変える
ふわふわと浮いてた君に追い越され
くしゃみする地球に飲ます葉ない
単身赴任終える予定日指を折る

大和高田市 岸 本 豊平次

整理して何時もの場所に見当らず

痛む膝忘れたような予定組む

孫の靴三十二纏頼もしい

お国自慢に出来る総理に出てほしい

滋賀県

中 宗 明

根気よいリハビリ効果笑顔増す

朝風呂でその日の予定練りあげる

下手くそな演歌も風呂でうまくでき

筋通し主張貫く硬骨漢

西宮市

秋 元 てる

仏壇も胸張る息子の広い家

合格証は仏前 孫はもうゲーム

けじめとは止める事かと孫の論

よもぎ萌え畏友の病軽からず

西宮市

亀 岡 哲 子

花に雪つばめどこまで来たろうか

つくしんぼ母ははしゃいで春の唄

減塩醬油どぼぼかけて元氣なり

子のお古着ておしゃれだと褒められる

西宮市

牧 洲 富喜子

手紙とはかく書くものぞ菜の花忌

馬酔木ほろほろまだきめかねている一事

雨の日のスプレーしっかりかけて出る

そろそろと申し合わせてさくら閣

西宮市 緒 方 美津子

けんかする孫と寝てます小の字で

この先は静かに生きよう独楽の芯

バージロード引っぱられてるお父さん

日帰りで行った明日は雨らしい

尼崎市 内 田 美也子

両横へ孫座らせて桜の下

さわぐだけ騒いで桜忘れられ

老化とはいとも哀しき物忘れ

肉親の情け恋しやケアハウス

尼崎市 松 下 比ろ志

暫くでしたと彼岸会の墓洗う

草も木もみどりの芽吹く四月馬鹿

忘れごと成る程増えた古希である

百円ショップの笑みは小さなもののばかり

池田市 藤 井 計 光

過去を捨て生きて行けそな釜ヶ崎

使命感の欠如世の中暗くする

爆笑のやすきよ凌ぐ卵いず

犬猫も人に負けじと花粉症

池田市 岡 本 吉太郎

国会が面白くなり株下がる

ゲームには夢中にさせる魔物すむ

金もらい戻せばよいと言う思想

株をして常連になると財失う

豊中市 湯浅馬洗

子が減って運動場が静か過ぎ

親と子の不安と期待春四月

自由校区名門校の命延び

焼け跡で聞いた歌です口ずさむ(並木路子氏を悼む)

豊中市 井上直次

分別収集ストレスいれる袋ない

寸志には少しばかり見栄包み

肩書が重くて眠り浅くなり

アラームがまた鳴り出したティータイム

豊中市 岸田知香子

酒のツケ自業自得の救急車

飲んだツケ顔の傷跡残る悔い

資格とりナースに挑む若桜

花便り雪便り聞きUSJ

吹田市 野下之男

揺り籃で赤子の夢は海になる

一輪の薔薇も気品を忘れない

独り居の気持が判る膝の猫

不景気の特効薬に鉦太鼓

吹田市 瀬戸まさよ

焼き肉の匂いに泣いている桜

老父母に青豆スープ春の膳

食卓の筍うれしああ四月

家事手抜きパソコンというおもちゃあり

茨木市 島元ふみ

今年も命戴きました桜咲く

昔なら思いもよらぬ老いの紅

ほやほやの定年混じる春四月

年金が貯まるようでは呆けますね

枚方市 安達忠央

心配が吹き飛ばされた呱呱の声

心配がやまほどあつて忙しい

巡礼の白装束でツアーゆく

花吹雪咲く花よりも美しい

枚方市 鈴木政子

箱庭の水仙拗ねたか背が伸びず

競うようにクレール車立って田圃消え

寒尻り凜として咲く白木蓮

来客にマスクをつけてドア開け

枚方市 二宮山久

二〇〇一年西国参りの那智の滝

糖尿病知って飲みほすコップ酒

美人より笑顔の妻の高いびき

里帰り娘のお腹の子を案ず

寝屋川市 柴田英壬子

天の声へ受話器をかたく握りしめ

バレンタイン密かにつつませた秘密

花びらを踏んでリハビリ杖たよる

やがて六月七十路のバラ開く

大阪市 清水絹子

聖天さんの帰りの石段軽くなり
一人もいいな七時の床の周五郎
二三分寄せて独りの拭き掃除
数字に弱くはやりのメカになおよい

大阪市 奥村五月

親戚も帰り仏と差し向かい
母の味恋しくなつて路地の店
江戸前と言つて輸入のまぐろ寿司
庄助と同じ暮らしの定年後

堺市 黒田真砂

バラバラにまいても芽を出す春の花
通院に毎日出逢う春の花
不況の故ボナナス大分へるらしい
老いてなお夢を明日へ画きつづけ

守口市 井上桂作

よく笑う妻につられて笑う癖
七十になつても夢のくじを買い
遅ればせ紅梅咲いてほつとする
力士らも着膨れて行くなにわ場所

東大阪市 北村賢子

咲き誇る桜浄土へ誘う風
つよがつて生きた親父がいじらしい
落日の真つ赤私の恋ごころ
赤ちようちんが一寸いっぱいやれと言つ

四条畷市 吉岡修

乾杯の役で禁酒が腰くだけ
年頃の孫がいるつていい薬
生きて来たまんまの顔に嘘はない
絵馬 瓦 写経 線香 ここも金

大東市 児玉蛙

孫が描く空の青さは孫のもの
見ぬ振りをするのもやはり愛だろう
最初から知らんと言えば正直者
立ち話 時効の話 舞い上がり

交野市 山川日出子

古い筆永の字習う古稀の春
姥桜 花見もすんで古稀も散る
てんとんしゃん母の指輪と琴の会
日本中韓国チャイナ台湾製

羽曳野市 安芸田泰子

出不精に庭の桜ヘデッキチェアー
ジョギングの息整える花の下
孫入学老いの心も軽くなる
友情は携帯だけで繋げてる

松原市 小池しげお

身のほどを知つて笑つておく暮らし
貰つてたつもり借りてたことになり
赤字決算 税務署にねぎらわれ
出口から入つたようなことになる

(西岡洛醉氏の句は80ページに掲載してあります)

自選集

橘 高 薫 風

のらくろを読み返しおり建国忌
光太郎 智恵子が来たら砂丘晴
一時間月の出飽かず見る波と
写経三昧 十年われながら美人
来た道に戻る思いに年を取り

板 尾 岳 人

百年の孤独飲んでる縄のれん
百年の孤独を飲んで旅途中
百年の孤独が棚でよく喋る
百年の孤独が届くやれ嬉し
百年の孤独を飲むと友が来る

小 林 由 多 香

華やかな門出後ずさりはできぬ
おみくじの吉神様もお許しだ
老いの知恵熱意ほどには捗らぬ
辛いのが取り柄でわさびファンを持っ
すき間風夫婦で目張りして止める

西 田 柳 宏 子

咄嗟には訳も判らぬ震度六
医療ミス続く誤注射 誤投薬
お役所の発表だから騙される
先生が風邪とか医者の不養生
エリートと認められてる地獄道

榎 本 吐 来

横文字とカナ文字威張る新世紀
イチローがジャパンを掲げる米リーグ
悪舌と啖呵が絡む首相選
嫌だけど無くてはならぬものに雨
何もすることがないので吸う煙草

堀 端 三 男

形勢好転迷うことなく打って出る
下敷きの通り写経書き終る
億の土地あわだち草の花ざかり
花いちもんめ次の総理は誰かいな
時効になった軽い罪ならたとある

藤 村 女

愚痴捨てた窓から空が澄んで見え
父母の影四季の節目にいてくれる
字典くるほとほと老いを知らされる
晩年の亡母に似て来て母恋し
母の味たっぷり見せて茄子の彩

舟木与根一

亡き友に出会って羅漢寺を出る
駆け足で記念写真について行く
ロボットに他意なし冷めた血が流れ
急行の止まらぬ駅で大志抱く
田や畑で菜っ葉背のびするデフレ

川島諷云児

鈍感と笑われようがまっしぐら
生殺与奪妻に委ねている余生
空回りばかりしている自尊心
匿名の手紙真意がつかめない
追い風を素直に受ける下り坂

西村早苗

鳴き砂の音聞きながら腕組んで
相づちを打つそよ風といひ話
ぼたん散るきれいな夢を見ただろう
模様替え季節めぐって初夏の部屋
無念無想この寺ほうき目が清く

阿萬萬的

喋り過ぎ君の尻尾が見えてます
価値観の相違と娘にしてやられ
言い勝ってしみじみ孤独知る夜道
年のことも考え妥協の策を練る
とぼとぼと歩けば野良犬ついて来た

石川侃流洞

知らぬ知らぬ何か隠して目が揺れる
交番の隣 空巢にしてやられ
国境を知らぬ倅せ渡り鳥
栄転へ単身赴任という痛手
花吹雪の中へ仕合せ霊柩車

木村あきら

一陽来福 今年こそ今年こそ
付け髭を除けてのんびり生きてゆく
紅少し引いて女の顔にする
虎丸の夕陽 神話を語りかけ
流れ来て石丸うなりまるうなり

工藤吟笑

生きている倅せ今日も陽が昇る(九十一翁)
大海は雑魚も鯨も同居する
北風に耳を澄ませば亡妻の声
湯船から溢れ出してる今日の幸
医者の手に縋りトボトボ九十坂

八十田洞庵

さびしくて自作自演のドラマ書く
待ちぼうけ自嘲の背を笑われる
いいひとを演じ続けてきた出合い
騒音に森の逃げ口見失う
社が乱れ三猿主義を通して

正本水客

肩の力ぬけば世間がみえてくる
口下手を理由に男にげている
万策がつきた様子と思われず
口ぐせの聞かれぬ淋しさ口にする
無い袖は振れぬと女強気なり

両川洋々

人生は軽い骨壺なお軽い
サバイバル序列の中で君を抜く
どうせなら美女の膝枕で死のう
領収書要らぬお金に出合いたい
短気な僕をなだめ静かに陽が沈む

二宗吟平

梅の里花に酔うてる杯の群れ
わが歳を忘れ壇上詩を吟ず
ボンボリの勲章つけて笑む桜
花瓶からチョイとお先に桜笑み
町中が子や孫ばかり友がない

野村太茂津

静寂に気付く茶筌の音ばかり
プライドを保つアンテナ立ててある
鼻先にいつも獲物をぶら下げる
存在価値は土瓶の蓋であればよい
座ったら挺でも立たぬおじいちゃん

小西雄々

振り向けばちらほら波に浮ぶ悔い
いくつかの火の輪くぐって逢いに来た
人間不信すずめ代々おしえられ
葬儀屋の耳臨終の方へ向く
稼いでも騙し絵ばかり火を孕む

八木千代

こうして越えた坂これまでもこれから
藤若葉 坂の傾斜も苦にならぬ
休憩は水の匂いのする場所
ここは峠 水一杓の有難き
そして坂また祈りつつ下りてゆく

波多野五楽庵

沈丁花 寡黙な人と旅に出る
踏切りでシヨボツと濡れる涙雨
採血をじつと見ていた紫陽花忌
退けぎわを考えている瞬きだ
てふてふも男もいない風の町

河井庸佑

駆け引きのうまい男へ身構える
肩書がこんな人に変えていく
普茶料理コースに入れて寺詣で
順風を受け逆風も忘れない
立役をきらり光らす渋い脇

土橋 螢

いのちみつめて散り際を惜しむ花
初恋の女的笑顔をまなうらに
筍のうまい味噌汁もう一杯
キスをするのにちようどよい背の高さ
春惜しむ尽くし足りないことばかり

藤井 明 朗

みどりを吸入したく爽涼の山の宿
娘ら去んで幸せな余韻抱いている
待つ事久し笑顔の出る暮し
健康を過信二十一世紀へ突入す
教育改革急務国民の愛の良識

宮口 笛 生

花活ける妻に余裕の時がある
三分の一の減反無茶をいう
高い農機具揃えて安い米作り
筍が屋敷の隅に藪があり
雨降りの暇で柳誌を読みふける

野田 素身 郎

花便りそこは行けない車椅子
犯人が分かりチャンネル切換える
空地の広さに合わせて遊ぶ子供達
止まり木の政論どっちも酔っている
三度目の入院奇跡待つばかり

恒松 町 紅

一刻は憂き忘れよと花が咲く
老人の癖でやたらと気にかかり
道変えたお陰思わぬ人に逢い
桜土手先祖の知恵が咲いて散る
出しやばりを老眼鏡に叱られる

玉置 重 人

傘寿にはなっても靴は光らせる
句読点もう傘寿まだ傘寿です
傘寿にもなつて傘寿の気がしない
騙し舟待ちこがれてる四月馬鹿
負の遺産ゴミの分別させられる

斉藤 効

晩酌を止めてミールを見届ける
百円ショップで衝動買いをする
発掘の栗が深める考古学
出稼ぎが帰り村中灯が点り
独楽の縄しつかり縋うて子に渡す

月原 宵 明

転勤の子が居るあたり虹の橋
長命のお通夜に笑い声頻り
輪の中で見られたくない目の動き
日向ぼこ次々欠伸移される
故郷の社に小さい自分の名

(心筋梗塞にて入院)

森 下 愛 論

運不運決めつけられぬ医の力
白き部屋疼き忘れて風が抜け
合掌の指から抜ける思考ゼロ
煩惱を剥がして春の風を入れ
酒タバコ止めて生きてく血を温め

遠 山 可 住

梅 辛夷 桜 農機具試運転
百円の店が手ぶらで出られない
豊かさてこんなでしたか一人老い
一本の藁で妻たり夫たり
バーゲンで買うてバザーへ持って行き

芳 地 狸 村

七〇〇年踏まれ生きてる石畳(ヴェネツィア 5句)
ゴンドラに酔ってベニスの良さを知り
入りこんだ水の都のまよい路
カーニバルの仮装に燃えるサン・マルコ
旅三日出会っためしに舌つづみ

越 智 一 水

春宵や妻はたしなむほどに飲み
春や春とび立つ孫へ目を細め
鶯が昨年の枝で鳴いてくれ
不景気に月が丸くてにくらしい
嫁ぐ娘が嫁ってきますと軽く言い

黒 川 紫 香

骨もろくなっても爪はまだ伸びる
ひとりだけ横向く奴がある写真
飾らない笑顔を見せる表彰台
みんなから愛されている片えくぼ
裸婦像を飾って祖父はまだ若い

竹 内 紫 鏑

電蓄は兄の手づくり 鳴るバッハ
来客の耳 回転のムラを告げ
聴きなのおすレコード 未知を既知にする
音盤は焼けたが歌の世につなぐ
家族みな照れ屋で声を録ってない

田 口 虹 汀

明治生れに温故知新と言う師匠
卒寿過ぎると怒りを移す事は稀れ
白寿までまだ四五年はあるゆとり
嫁に出す母より父は泣き虫で
六人が皆娘でいい老後

河 内 天 笑

ぶなの樹の根っここのまわりから春に
葉桜の頃に初恋散りにけり
鶴丸柿か菁風柿か花をつけ
なめくじが堀よじ登る朝の雨
百日草切ない思い出がひとつ

水煙抄

板尾 岳人 選

秋田県 秋野 宏

スーパーの列で噂も籠に入れ
骨のない男に贈るわさび漬け
生きざまを丸出しにした試練の手
人許すときは大器の水になる
生きている風だ毎日変化する

新潟県 高野 不二

国債の利子も下がって来た日本
食うだけの年金があるだけの事
見えすいた嘘 大臣が言っている
胃が丈夫だから苦しいダイエット
宇宙旅 誰が何しに行くだろう

静岡県 中西 雅

花吹雪宇野千代さんの裾模様
うつむいた片栗の花みる鏡
家事あれこれ私の手から逃げてゆく
携帯のとどいてほしい虹の里
新築をはめて鬼門が気にかかる

岐阜市 平野 あずま

裏町に僕の好みを知る酒場
かたつむりローンの苦勞知らぬ家
温室の花は知らない四季の歌
自分史の別冊にある正誤表
他愛ない噂に踊る影法師

富山市 松見 たえ

先頭を走る勇氣を持つ加減
票読みに探り入れてる懐手
リサイクル出来そう愛を積み直す
勘の冴え知って磨いた立志伝
先頭が見えない列に従いて見る

横浜市 荒井 宏和

良い事があつたか手話もよく弾み
背伸びした虚栄に透ける未成熟
チャンス待つ間に老化する後頭部
ふるさとを想い出させる子守唄
早春のツアー熟女を目覚めさせ

横浜市 田中笑子

億シヨンの家も花見の中に入れ
お洒落して出たいが花粉攻めてくる
数値でてまとも好物減らされる
立て板に水ではつらい老いた耳
短縮語 笑顔で聞いたふりをする

横浜市 芦田鈴美

隠してもほつべに書いたつまみ食い
お願いと言えば金ならないと言う
キスしても落ちない紅をそっとつけ
開花予報流れて春が動き出し
一行で済み平穩な日記帳

横浜市 巖田かず枝

お見舞いに笑い話を持って行く
リサイクルすれば百まで可能かも
故郷の味がお隣から届き
出来ませんなんて言えない歳になり
ねずみ年働き者と煽てられ

横浜市 川島良子

生きるため仮面脱いだり被ったり
介護する若い力を信じよう
黙認という逃げ道もありました
良妻賢母わたしのことじゃないらしい
あの人が来るというからお洒落する

横浜市 近藤道子

トゲぬきの地蔵で温い会話聞く
気づかないふりして彼をやりすごす
健康なおしゃべり盛って大皿に
よく進む時計でいつも駆けられ
運不運今日一日を省みる

横浜市 三村八重子

ツーカーの笑いこぼれて花吹雪
春の風ウツを払って朝の紅
電子辞書引いた知識はすぐに消え
埋めるより削って丸くする 齡
ごたごたも生きてる証手を合わす

大阪市 尾崎黄紅

下駄箱で拗ねているのは老いの靴
無期限の出世払いが過ぎていく
マスクして銀行にきて小さくいる
回り道します若さが残ってる
切取り線もう一日を待ってみよ

大阪市 小泉ひさ乃

仏とも春を分け合う庭の花
今更に夫婦で生きる有難さ
輪の中はみんな味方と気を許す
くちなしへ亡母の記憶がよみがえる
四面楚歌真つすぐ生きて腑に落ちず

河内長野市 大西文次

ふだんならどうもなかった胸騒ぎ
忘れっぽい男を待っているネオン
お茶たてる指でたこ焼つまみ食い
弱り目にたたり目不況花粉症
紋付に首差し替えた肖像画

河内長野市 柏本靖子

花のある町のポストへ愛を入れ
ふる里とおんなじ風に出逢った日
母さんの普段着しゃぼんの匂いする
わたくしを美人と言うている鏡
もつれ糸ほぐす役目はいつも祖母

高槻市 左右田泰雄

飾っても貧しい心光らない
もうそろそろ いやまだまだとお年頃
十パーセントなのに降られた雨男
写経の手一行とばす気のゆるみ
借りて来た猫もおどろく低姿勢

大阪市 熊代菜月

お腹にも清掃中の札をかけ
自販機に嫌われている新硬貨
お仕事が恋人ですと負け惜しみ
ひとごとでなくなつて来た勘違い
うらはらの心に鍵をかけました

東大阪市 笠井欣子

凡夫婦会話もなしに日が暮れる
茶畑の一隅父の飲む玉露
泪つば乾く間もない母だった
息子には心美人の妻が来る
渋滞があつて見られた花畑

羽曳野市 森田四三郎

年金と言う助っ人に助けられ
突風に押されふらつく万歩計
激辛カレーで弱った悩に喝を入れ
保険満期 嬉し淋しい歳となり
剪定のように企業は人を斬り

和泉市 横山捷也

味噌汁の旨さこの場は妻に折れ
年金で似たりよったり明日の夢
春風を確かめ母を誘う旅
肩書きを外して暖簾軽くなる
ぎこちない笑顔本音を見破られ

八尾市 平川幸枝

古稀までをのらりくらりと歩が進む
再会のそれから先が進まない
鬼の絵に添えて思いのメッセージ
風を起し五百羅漢の絵の手紙
ほめられて嬉しい誤解聞き流す

吹田市 木下 敏子

たんばの踏まれて今日の丸い花

ばあちゃんの夢も詰め込むランドセル

嫁さんの真心包むあんこ餅

太い指引退しらぬ歟握る

好きなことさせて貰って老いられぬ

富田林市 山原 昭水

月の砂漠うたった頃は母がいた

鷹になれば雀のように騒がない

久しぶり美人に逢えた京都駅

努力という二字が心の宝物

居酒屋を出て満天の星をみる

大阪狭山市 矢野 梓

お帰りと故郷の桜咲いている

ここだけの話が春の風に乗る

二目目で我が家気になる主婦の旅

逆効果知っていないがらつい叱る

生き方に合わせてくれる古い友

吹田市 後藤 志津香

花便り私の旅情かきたてる

忙しいうちは花だとおだてられ

引き出しのダイヤの指輪亡母の声

どちらからともなく握る法善寺

春の陽をしつかり握り墓参り

吹田市 須磨 活恵

仲直りきつかけくれた花の苗

冗談の中ほどにある小さい棘

春風にのつてうわさが先ばしる

花筏 遠い記憶の人をのせ

抜け切れぬ煩惱写経くり返す

東大阪市 田中 美弥子

点々と情けに蹟く亡父の地図

ゆりかごに夢いっぱい未来地図

七曲り越えて陽が射す夫婦坂

ははに似た老女へ耳が寄ってゆく

時差ボケがパツと目覚めるパリの風

神戸市 両川 無限

耐えて来たこぶし広げるハブニング

欠点をズバリと叱る母がいる

リモコンは便利だ妻がまた太り

はつきりと手の鳴る方へついてゆく

大変だ中立守る武器がいる

綾部市 藤田 芳郎

働いた無骨の指を水が漏る

食足りて五臓六腑が満たされぬ

風向きを読めば昨日が無駄になる

背もたれに火縄の焦げている匂い

2にならぬ1をこつこつ足している

京都市 勝山 美千代

会釈から温もり貰う路地の朝
婚期無視 旅の話で明け暮れる
健脚と自慢のとたん躓いて
長電話またやりました鍋焦がし
独り言猫が相づち打ってくれ

篠山市 谷田 多美子

雑音のない一日の広い部屋
感謝する心を今日もありがとう
笈摺に亡姉の女の紅を引く
老いの手にまとわりついて毛糸玉
古のれん元氣な孫が奥にいる

岡山県 国米 さくゑ

温もりの大地へ春の木を植える
再びの舞う日を希望冬蛭
散り際の乱ことさらに母を恋う
新入学 隣の席にいた天使
輪転機汚職ニュースを刷り疲れ

岡山市 大森 純子

人生をポテンヒットでつないでる
得点にならない犠打に疲れ気味
新庄が今日のわたしのビタミン剤
お賽銭アンチ巨人の神さまに
筋のないドラマ野球も人生も

岡山市 藤原 一平

手の鳴った方へ歩けば妻がいる
いざという時の仮面は持っている
過去問えば海より深い父母の恩
君となら乗れると思う縄電車
この胸に消せない傷が一つある

鳥取県 澤 裕子

一日の暮らしに税が付きまとう
エプロンのボツケに主張ためている
相席が縁でドラマの幕が開く
老いてなお達者な耳をなげく母
ポイ捨てを子の澄んだ目に裁かれる

鳥取県 蔵本 悦子

なめるほど春だ花見だ賃上げだ
なるほどなおまえも恋がしたからう
ちょうどいい高さでほんと君がいる
夕やけが時々胸に会いに来る
通販で二度恋出来る服を買う

鳥取県 小谷 孝美

母であり人妻であり女です
丸い顔DNAに逆らえぬ
しょぼくれた心アイロンかけ直す
土くさいモンペが母の一張羅
ルール違反してる愛だが止められぬ

鳥取県 小谷 はるみ

権力を右手に乗せてから転ぶ
破られたページに重い罪がある
私の過去をリコールして欲しい
風評が流れて気付くまで女
大空があればどこでも生きられる

鳥取県 鳥羽 直市

一杯の水がところを落ちつける
腹の虫おさえて丸く生きてゆく
たまご酒呑んで風邪など寄せつけぬ
退職しやつと人間らしくなる
固いことというまい世間狭くする

鳥取県 平井 栄翁

再会の舌には丸い赤ワイン
結び目の口が開かぬ片思い
打楽器の真似したように酔いつぶれ
ハンガーに今日の肩乗せ明日を待つ
ふる里へ錦を飾る糸を織る

倉吉市 大下 智子

無農薬野菜も虫もよく育つ
日に三度育ち盛りにせかされる
健康をつぎつぎ願うテレシヨップ
よくばったわさびに泣いたにぎり寿司
元氣かと丸い背中になった母

鳥根県 福岡 博利

桜前線三段とびでやってきた
深呼吸それから山へ妻とゆく
達筆に春を見ましたわらべ唄
俺のことみんな知ってる戦友が居る
二人いてサロンプラス貼る春の午後

米子市 足立 由美子

懸命に生きる薬を飲んでいる
家も私も修理費ばかり増えてきた
心臓も脳も弱音をはきだした
筍が本音吐くまで皮をむく
ひまそうな人と時々すれ違う

出雲市 伊藤 玲子

あるがまま沙羅双樹へと流れよう
ゆつくりと流れあなたの舟になる
うかうかを論すか春の雪が降る
両脚を撫でれば小さくなった母
古本屋僕の青春棚にある

出雲市 川島 和歌子

蛇口から命の泉もらう音
逃げ道を開けて追い出す思い遣り
躓いて人の情けが身に沁みる
花曇り桜前線競い咲く
吉報へ母はともあれお赤飯

松江市 松浦 登志子

あなたとの約束がある春が来た
風に乗りとぎれとぎれに来るうわさ
鮎ひとつくれた少女と停留所
白椿まさかまさかの落ちる音
エンジンがかかってからの長い時

松江市 津川 紫晃

面会に笑い袋を持って行く
僕の靴方向音痴また迷う
一本の4Bにある果たし合い
花粉症予報で春の幕が開く
栄転と左遷見守りさくら咲く

高知県 桑名 孝雄

黄昏の愚痴は哀れだから言わぬ
嗚呼無惨男の城が燃えている
人畜無害放っておこう泣き上戸
用心はしてます酒は二合まで
美人には僕は至って不用心

高知県 近森 巧

夫婦箸折れてシナリオ狂い出し
裸体美を台なしにしたエレキバン
桃植えて米寿に稔る秋を待ち
手も足も出ない達磨が起き上がり
リサイクル効かぬわが家の粗大ごみ

高知県 小川 てるみ

ちっけな心を海に笑われる
情報の海でおぼれている野心
どの部屋も灯をつける寂しがり
コンビニへ行けばなんとかなる暮らし
逢いたくて落花の中をくぐり抜け

愛媛県 黒田 茂代

ぶくぶくぶくどこまで底のない不況
初彼岸母の形見の帯締めて
大笑いよりも微笑の花でいる
入浴剤変えて温泉巡りする
蛇行するゆとりを小川から学ぶ

香川県 原 賢

美しく老いてみごとに咲くさくら
精いっぱい競って咲いて散るさくら
口止めの封印はがれ風に舞う
八起き目へ炎える火種を胸に抱く
愛ひとつ日記帳が小さすぎ

今治市 塩路 よしみ

趣味一つ余生大事に茜雲
自分史に愛の割符が燃えつづけ
言い過ぎを修正液に頼もうか
草の実がはぜる私も女です
幸せにどっぷりつかり詩がない

札幌市 三浦 強 一

ベットショップお前もほくも売れ残り

耳底にソーラン節の祖父の海

ボスと目が合い手を上げた多数決

札幌の四季に絵になる時計台

野田市 那賀島 雅子

堺越しの桜が誘う昼の酒

頬寄せて何の話かエトランゼ

散る桜浴びて童女になっている

霜柱融けてキラキラねぎ坊主

町田市 土田 今日子

ロボットにされて戦士の深い疵

ケイタイをアリバイだけの為を持ち

くじ運を信じ過ぎてて売れ残り

体力にまだ余裕ある選択肢

日立市 加藤 権 悟

大空を幟に風の応援歌

職人の釘が妥協を許さない

晩酌に妻の料理をほめてやり

銀行の監視カメラにコンニチハ

川口市 原 沢 かね子

新緑が削り取られて増す人口

便利さが財布を軽くする時代

長生きを目指したばこと縁が切れ

いつ観てもドラマは広い家に住み

武蔵野市 亀井 円 女

八十路でも夢はあります翔びもする

昨日も今日もそしてあしたも有難う

いい彼女選んだ孫の目も確か

八十路今 目と目阿吽の間柄

藤沢市 妹尾 安子

爆音に慣れるしかない基地の町

担任をかばう大きなランドセル

少年よ何を急いで背伸びする

怒らすと火を吐く妻の仕事ぶり

八王子市 井上 京一郎

円周率ばつさり尻尾ちょん切られ

ターンすることがいのちの砂時計

視聴率メジャーリーグに乗っ取られ

今やもうファッションとなる不精髭

東京都 清原 悦子

聞き役の耳がやさしくなっていく

回覧の末尾に噂ついていく

少々の誤字許されるEメール

つまづいた傷癒される旅の宿

東京都 井上 つよし

盃の月を砕いて一気飲み

旅日記自作自演のドラマあり

泣き所抑えた後は泳がせる

古本屋親爺元気に鼻眼鏡

横浜市 秋 元和 可

風の道たどつて逢えた沈丁花
何気ない言葉にあつた副作用
花が散る座つてばかり居られない
何度でも優しくさせるありがとう

横浜市 平 達也

まず窓をあけて感謝の朝日浴び
賞味期限切れた同志が味深く
歩けたら行き度いテレビ旨い店
故郷の苗木に偲ぶ狭い庭

横浜市 生 坂 サト子

身綺麗にして桜観の列に居る
新聞社努力大きな文字誇張
口約束後で揉めそな胸騒ぎ
花曇りなりの色香を愛でてやり

横浜市 吉 田 裕 峰

手が触れて四十年の夫婦独楽
クラス会時効話でいぶり出す
親娘だな腕のホクロが同じ場所
人混みを避けて小枝に花見ござ

横浜市 福 田 由美子

午前様 妻の寝顔が帰り待つ
教科書をかえてもできる頭の差
頭と手 戸惑っている無洗米
桜散り心をこめた掃き掃除

横浜市 長 島 亜希子

旅プラン開花予想の日に合わせ
送迎をしてもらう幸されぬ幸
なんだかんだ言つても貴方頼りです
コンマ一の利率で預金先を替え

横浜市 保 田 絹 子

あの方にどこか似ている磨崖仏
石仏の御座す臼杵黄砂舞う
点滴に耐える話は美味ばかり
母さんのお膝に消えるちんぷい

横浜市 石 原 三 郎

冗談も図星は胸に突き刺さる
雛祭だから一合だけにされ
控え目が逃がした恋の二つ三つ
達者とは介護を受けぬことどころか

富山市 沢 江 和 代

桜咲く桜散る嗚呼日本人
隅っこで咲くのは花の意志と見る
小説に向かぬわたしの点と線
手も足も武器になる爪塗り替える

京都府 前 上 英 一

雨三日言葉忘れてしまひそう
またしても予定はみ出す好奇心
大海へ河口の稚魚の武者震い
雨の日にひもとく本を積んでおく

京都市 山 本 磔

誰も買わない首をいささかもて余す

窮極の笑いは般若の面だらう

煩惱の果てにいつもの立呑み屋

表札は紆余曲折を知っている

京都市 清 水 英 旺

やせたいの夢断てぬまま菓子つまむ

襖ごしお嫁候補のはずむ声

バーミヤン大仏の慈悲永遠に

名曲を生む五線譜の大字宙

兵庫県 広 瀬 房 江

石投げた私忘れず吠えたてる

塞き止めたうわさの波に溺れそう

体内の閥所が軋む花の冷え

ちぐはぐのコンビだけれどフルムーン

兵庫県 安 達 厚

今はもう只ただ妻について行く

ほめといてやんわり叱る母の知恵

本当のことより強い誉め言葉

咲くまでが華だと花に言いきかす

神戸市 木 村 忠 義

鳥たちが気持ちよく飛ぶ今日の朝

ノータイの暮らしボタンはしています

アルバムで僕の青春引き寄せる

悩みごと心の奥に聞いてみる

神戸市 山 口 光 久

夜桜の妖精僕を離さない

散り際を桜に学ぶことにする

相棒がいつの間にかやら恋敵

居酒屋にみんなの憂さが飛び交って

姫路市 北 条 てる代

羅針盤狂うて着地見付からず

過ぎ去ればあれもこれもと夢の中

アルバムへ古傷紡ぎ冬を編む

噛みしめた言葉に奥歯痛み出す

倉敷市 家 守 政 子

灰皿が欠伸をしてる応接間

生も死も粗大ゴミには金がある

ゴミ捨てと花粉になやむ過疎の村

一枝を活けて花見の酒を盛る

竹原市 正 畑 半 寛

あの山の顔は誰かにそっくりだ

風薫る山がゆっくり立ち上がる

滑らかに霞んだ山が母になる

ふるさとの富士はこころのよりどころ

府中市 馬 場 利 子

風の向きで変る噂の種の数

お洒落して歩いてみたい春の道

花満開解けない謎がとけて来る

野の風に後押しされて生きのびる

北九州市 岡田幸生

一行で足る職歴に自負がある
その内という約束にある脆さ
七年目愛の鎖に錆が浮く
破産倒産いきなり雑魚の首が飛ぶ

唐津市 岩崎 實

数えても数えてふえぬ札かぞえ
車椅子押して日展見て回り
特選と受賞の作を丹念に
居眠りの電車にかすむ春の海

唐津市 坂本 兵八郎

機密費で晩酌前の縄のれん
一線を画し親父の座を護る
涙など見せてたまるか振り向かず
喉元を過ぎれば虫が動き出す

串間市 山内 滝

内示後に人事課長の雲隠れ
異動先雑草生えてる頑張ろう
異動先虎視眈々と名刺来る
大物のやっこ異動で祝い酒

宇部市 高山 清子

和の為に引いた一歩で寝つかれず
薄れゆく絆濃くする花見酒
生酔いが筋の通った意見吐く
ピカピカの背中で揺れるランドセル

鳥取県 下田 茂登子

老人がボーイ捨てになる新世紀
前置きが長くて先が見えて来ぬ
元の鞘納まるはずはないけれど
そよ風も吹いてくれたら杖になる

鳥取県 山下 節子

失敗のない子の前途案じてる
ボーイ捨ての缶に命を奪われる
自分だけ秘めた予定日抱いている
口こみの話 尾がつき鱈もつく

鳥取県 鳥羽 玲子

前に行く老いにそろそろ歩を合わせ
自分史の終章ゆとり持つて書く
拡大鏡運命線の秘を探る
荒れた海どこへ消えたか風いでいる

鳥取県 橋谷 静江

人柄が一生身分を保証する
露のとう食して春を噛みしめる
寿の一字へ見栄をたんと入れ
良い祖母になろうと財布空になる

鳥取県 岡村 孝明

難問も酒でまとめる世のならい
甘い汁舐めた報いで狭く生き
木の医者が木肌さすって悩み聞く
雪が融け命の水が旅に出る

鳥取県 河本 晴子

桜舞う大往生の旅らしく

迷い箸食欲のない時もする

染めたくはないし白髪は気になるし

少年に挨拶されて不思議がり

鳥取県 山岡 久枝

毎日がゲームのような老い二人

前列の席に座って肩がこり

何も彼も便利になつて金がいる

慰めのぐんと伸びだす小判の芽

鳥取市 録 沢 風花

まだ若いつもりシルバー席譲る

振り出しはみんな素直な桃だった

ガラス張りの地球に見える不発弾

どう煮ても食えない人の舵をとる

鳥取市 田村 邦昭

暗記した単語に苦勞語らせる

厚着して心の揺れを包んでる

視野狭く展望台の世話になり

水貰う花は咲く日を予約する

鳥取市 福島 庸二

都会での暮らしで自然垢が抜け

鼻づまりわさびを効かせ風通す

算数に弱く数字に強い人

姿見の中の私に見つめられ

鳥取市 加藤 茶人

ハンドルを握るとジキルからハイド

血が憎い遺産で揉めている家裁

お父さんからオヤジに変わる反抗期

男には夢もロマンもコップ酒

鳥取市 横田 春名

純金と信じた指輪幸続く

花吹雪夫としばし老い語る

予定日の空白欄がふえていく

老いてこそ愛の蓄をそっと抱く

鳥取市 福永 ひかり

元号の四つを生きた長い旅

神ならぬ身の知る由もない別れ

白衣性高血圧と言われてる

わたくしの預金世間のはした金

米子市 猪森 スミエ

一本釣り豊かな海と乾杯だ

豊かさに溺れてやがて渦の中

蛇の目傘下駄もカラコロ唄いだす

相合の傘を覗いて通り雨

鳥根県 武島 ちよえ

組板は今日も朝から妻の風

手の届く所に七つ道具あり

成り行きをじっと見ている鬼瓦

やけくそになるなと理性が窘める

島根県 持田 多輝子

世話女房八方美人でてんでこ舞い
血税を民にかまわぬ無駄遣い
リストラで明日の運は風任せ
知っていて知らぬ振りする他人の目

島根県 多々納 テル子

波しぶき男の出船海へ散る
春うらら一人の城でベンをもつ
老いの春しばんだ袋詰め替える
名画みる額縁のない大自然

出雲市 加藤 スズコ

雪に耐え見事球根花盛り
模様替えさつばり春の風を呼ぶ
蛇口から今日一日を組み立てる
茶の香り心も解ける笑い声

松江市 三島 淞丘

割れそうな夫婦茶碗をそつと拭く
迷いつつ切った一枝梅やまれる
老人だ高齢者だと手帳くる
高級品無いが旨いぞ男味

松江市 福岡 芳枝

不器用な言葉の真意胸を打つ
理不尽な神の試練と力んでる
切り株で番茶と憩う山仕事
ご破算にできない感情 女の業

和歌山市 武本 碧

充電をして来た客が良く喋る
バーゲンへ女 女の顔忘れ
言葉より女涙が先に立ち
利子が利子生んだ幻追っている

和歌山市 松尾 和香

夕焼けこやけ石けりやめて帰ろうか
石ころもよけて通れと言って来る
笑い声大きく弾む露天風呂
振り向けば家の流れに添うて生き

和歌山市 上地 登美代

忘却へ空を見てると手を振れる
試されてまた試されてぶつ切れる
浅はかな私を責める自己嫌悪
握手した白い手袋信じたい

和歌山市 根田 美子

おままごとママはお仕事パパ子守
みそ汁の味まで競う嫁姑
惜しいなあ百年前の美人です
梅の香と戯れ父は風となる

田辺市 大峠 可動

月天心 我がところにも母が在り
紅椿活けてストレス炎にくべた
花の下蝶を帰して灯を殺す
春愁や途方にくれたエピソード

和歌山県 村中悦男

生きていくあれもこれも先送り
小悪魔が両方において老夫婦
ふきのとう春の知らせの顔をして
子育ての設計常に未完成

高知市 澤村哲史

順調に陽気拾って脱ぐコート
良妻の指が放さぬ鍵の束
津軽三味諸行無常へ膝を抱く
惚れました桜前線旅姿

高知県 百田幸

ひとり言本音をちよつと覗かせる
嫌なこと嫌とはつきり言う若さ
飽食へ主婦廃業を言いわたす
お祝辞へ野次をとばした新世紀

愛媛県 安野案山子

お遍路の鈴が涼風くれる初夏
満開の花に浮かれてコップ酒
友の訃へ諸行無常の風が吹く
セールスがストレス溜めている靴

愛媛県 花岡順子

幸せは虹を抱いてるシャボン玉
言い訳が上手になった寂しい日
かくれんぼ外に出られぬ日が続き
虐待のニュース人間やめようか

今治市 渡邊伊津志

ゆつくりと声包み込むミサの壁
一瞬の至福求めている祈り
推し測る我が物指しの頼りなさ
農業は感動健康経営者

今治市 野村清美

ただの石磨くと光ること学び
容赦なく脇芽は夢を摘み取られ
嫌われる毛虫華麗な春の夢
真心を記念切手に込めて貼る

松山市 高橋宏臣

今日流す涙明日の虹になれ
余韻だけ残して消えた虹の橋
美しく生きたし今日の舞い扇
崖のふちここぞと映える山路菊

奈良市 乾春雄

ダイエット財布が先にやせて行く
真珠婚妻は背中では返事する
病んでなお女は髪を梳いている
きっぱりと諦めさせるゼロの数

生駒市 飛永ふりこ

夜桜は魔性の顔が潜んでる
艶やかさ競い合ってる八重樫
春風をスカーフにしてショッピング
春の色着ると靴までウキウキと

尼崎市 河津 正治

悪友と呼ばれ互いに意気が合ひ
行間の鼓動はいつも自己弁護
ポケットの百円玉が拗ねている
点滴が起さる歩けと姦しい

尼崎市 軸丸 勝巳

マル優はお返ししたいゼロ金利
桜花君も老いしか色淡く
人間も動物なんだおどり食い
短いが語録残して退く総理

大阪市 大川 道子

二千札財布の中で置き去りに
血税を湯水の如く遣われる
斬新と言ったがほめた訳じゃない
子のために金は残さぬことにする

大阪市 榎本 日の出

押しつけが嫌いやる気はあるという
定年後妻の度胸が前に出る
贈りもの歳相応が気に召さず
パソコンもインターネットもない暮し

大阪市 岩崎 公誠

金と欲もつれた話ほぐせない
居留守して昼寝むさぼる夢世界
皺がふえ生きた年輪刻む顔
恍惚の記念写真は辞退する

大阪市 中澤 伽羅

遠いけどいつものパンを買いに行く
カタログをじっくり眺めティータイム
湯どうふで溶けるくらいわだかまり
古希近くようやく自分らしく生き

大阪市 榎本 舞夢

味噌汁もようやく家の味になり
いかなごを炊いて幸せかみしめる
宝籤当りましたと四月バカ
美しく咲いてほしいと水をやる

大阪市 中村 忠敬

福耳の僕が金策駆けまわる
よく振った尻尾不況でちょん切られ
鍋底がやたらと広いこの不況
階段でミニはバックを後ろ楯

大阪市 三浦 千津子

気負わずに生きて心の幅広げ
リストラに春は名のみの重い靴
雲流れ私確かに老いて行く
降りしきる雪が見知らぬ街にする

大阪市 星野 きらり

おみくじが凶と出た日は奮起する
スケジュールうまくこなして心足る
羨ましツンドラへ行く夫婦鳥
クローンよりロボットがいい人づくり

大阪市 伴 洋子

悪気などあろうはずない信じよう
恨みには思わぬけれど線を引く
潰すのが本心だとは露知らず
終止符を打ってプライド守りきる

堺市 斎藤 さくら

豆御飯母に電話で知恵を借り
片付けの下手な所は父に似る
バラの花春には春の顔で咲く
ふんわりと財布が風に乗って春

羽曳野市 永田 章司

満開の桜が見せる散る美学
花粉症欠勤理由一つ増え

お花見で下戸が震える戻り寒
不祥事が所かまわず出る役所

八尾市 山本 宏至

夜桜に言葉いらない二人連れ
はけもせずぼっくりあの世行く望み
節目には迷わず違う生きた金
説教のおまけのついたお小遣い

八尾市 奥田 明

死は怖いくせにポックリ死を望み
こっそりと咲いておどかさずボケの花
海女の目にアワビは海の宝物

脳味噌のたらん夫婦で仲がよい

柏原市 永浜 加津子

諦めてまた諦めてこころ空
惜別の背なに一入花吹雪
春四月 鈍行でよい事始め
満開の花に散り時教えられ

泉佐野市 稲葉 洋

朝の経 義歯もカチカチ鳴っている
訳あって軽い仕草で交わす札
解せぬ事あって寝返りうつ夜中
文才は無いが書こうか雑草記

岸和田市 不破 仁緑

会者定離桜ゆっくり顔を出す
喜びの字が便箋で踊ってる
言い分がまだ有りそうな以下余白
堀されてちよつと覗いて見たくなり

岸和田市 亀井 皎月

雑学があつて老残保たれる
医者の言う少しならとは如何程か
故里の風に悩みが癒される
終焉の秘話は遺言して置こう

和泉市 小坂 凡英

インハイへ投げ込む愛を言えぬまま
いそいそと妻が着飾る孫の式
常連が手を振って声高し
無党派へ狙って投げる球が無い

河内長野市 木太久 正一

老夫婦仲よく庭で日向ぼこ
新しい入歯自然に歌が出る
夢のよう定額郵貯満期利子
世の憂さを晴らす桜は無心なり

河内長野市 水谷 正子

弁当は手作りがよい花の下
一枚のハガキに辞書を六度引き
真剣に暗算しての回り寿司
夏祭浴衣はやはり藍がいい

河内長野市 杉谷 カズエ

押入れが嫌がつている羽ぶとん
植木鉢ずらして蟻をあわてさす
一息でとてもローソク消せません
長生きをひがます本音ちらと聞く

東大阪市 今岡 貞人

早咲きの梅から凍の字が香る
マジシャンの指が地球を裏返す
大空に今日も抱かれている命
長寿日本骨董品ではすまされぬ

豊中市 みき わきみ

日の丸が好きで祝日待ちかねる
社会にはもう役立たぬ歳となり
中高年の粹からはみ出た八十路
地下鉄の延長俺には間に合わぬ

寝屋川市 岡本 勲

反抗心まだ生きてます六十路坂
植え替えもつぎ木もできぬ歳になり
おばあちゃんいつも人形と話してる
夫婦喧嘩位で刺激にはならぬ

吹田市 太田 昭

風香り仁王も浮かれ花見席
命日に母の好んだ花を摘む
声がする方に引かれる国訛り
亡母の顔月の丸みや偲ぶ草

吹田市 木村 無禄

煩惱が続いています南無阿弥陀
我が身には神在わしますヒトゲノム
銀行にあるさ金ならサケ茶漬
保険料払って介護信じよう

高槻市 生田 義一

脱ぎ捨てた仮面に涙光つてる
朝ドラの椿の宿に夢つづく
誕生日己が自前の祝い膳
老いてなお心ときめく旅の朝

大阪府 前田 忠子

ストレスを流す暇なく桜散る
雑草と格闘いまだ勝ち目なし
足腰が弱りますます口達者
感謝感謝ストレス溜めぬすべもある

岡山県 白 岩 たづ子

進学期うれしい出費春の風

すつきりと部屋片づけて客を待つ

幾山河こえた夫婦のしわの数

岡山県 土 居 ひでの

紅少し足して待つて花あかり

しなやかに春を愛でてるさくら草

ダイケアー花と向き合う私語続く

倉敷市 撰 喜 子

噴水に街の喧騒避けて古稀

不況などこの国かな花の下

花の下みんな善人うまい酒

岡山市 清 水 金太郎

若づくり後ろ姿で歳を知り

外国で作り日本を困らせる

国政も肴になつて花見酒

府中市 岩 本 雅 代

春爛漫紐は固いか発泡酒

学歴がどうあれ不況で職がない

お付き合いほどほどで良い時もある

竹原市 福 島 万 年

よく食べる妻の元気にありがとう

程よくてちびた歯ブラシすてられず

老母老妻過去を忘れて花を見る

兵庫県 岩 本 美緒子

老いてなお芽吹き欲しい殻を抱く

得心の髪はグレーに染めてます

言い訳を攫った風と話してる

兵庫県 山 本 泰 子

面白そうやってみようか英会話

好奇心だけが元気で困ります

歳忘れ履いたヒールで痛む膝

兵庫県 黒 崎 美紗子

晴れだった嬉し楽しのバスの旅

飛沫とび皆が歓声川下り

満開を映す池面の鯉見事

兵庫県 徳 平 毬 子

君の声一言あつて春が来る

陰と陽コンピを組んでルビー婚

花吹雪誰方の元へ飛ぶのやら

宝塚市 飯 西 ミサヲ

自分の名何度書いたか八十歳

口だけは達者ですとも言えぬまま

山路来て思い出しますあなたの句

西宮市 坪 井 孝 一

青春の門は手探り綱渡り

うらみ言書くのは2B消せるから

うしろ指造花のバラは耐え切れず

川西市 井本 清山

奈良県 江波 正純

少しずつ今も進んでいる老化
百円でちよつとすてきなサングラス
自分だけ死ぬ気はしない新世紀

伊丹市 延寿庵 野 鶴

タクト振る平凡な風妻の風
達人の腕へ活気を呼ぶ老舗
相談の視野にはいつも母の声

篠山市 倉垣 恵美

病窓へ蚊とんぼ今日もラブコール
安眠を妨害するは何だろう
へそ曲げて此の世の何を恨もうぞ

姫路市 服部 一典

玄関に火よし水よし貼つてある
下手の横好き歌詞だけは合う音痴
ロボットに似て来る人間冷たすぎ

尼崎市 尾宮 弘治

バーゲンで奪ったコート派手過ぎる
茶髪せぬ真面目に親が迷います
リストラの鞭が鳴ります棒グラフ

尼崎市 桑原 東園

横顔に嘘とはつきり書いてある
喪主席で胸の時計を止めたまま
僕の城机の上に夢溢れ

砂吐かぬアサリの意地を知る夕餉
いこじさをほぐしてくれる変化球
砂利道がなくて散歩が味気ない

川崎市 塩沢 ひで

般若湯少し入って長説教
陽だまりを背に一列の花だより
路地からの褒め言葉待つ花自慢

川崎市 小林 久美子

かかる世に梅や桜が咲きこぼれ
住む町の花とみどりを考える
深刻な話ジョークにそらされる

秋田県 湊 修水

波に浮く小島の松の男振り
松島の天気も書いて絵の日記
一泊の保養 額の皺のぼす

青森県 福士 トキ

雪の壁溶けて隣の笑い顔
重ね着を一枚二枚脱いで春
留守番が仏壇とお茶飲んでます

横浜市 豊田 羊子

満開の桜ピカピカ ランドセル
通りゃんせ無味乾燥の信号機
脳血栓チカチカチカと頭痛する

横浜市 金森徳三

年金の味方デフレかインフレか
平成の孫も炬燵がお気に入り
居ながらに世界の味を食べている

横浜市 鈴江純子

騒しさお許しあれと主婦の旅
一病が友を増やしてくれました
窓割って隣のけんか飛んでくる

横浜市 布山嘉信

鯉の餌失敬の鴨悪びれず
花散らす嵐も春のおくりもの
枕辺にリュック水筒早寝する

横浜市 山梨雅子

名門のスポーツ企業切り捨てる
世界地図旅のコースに丸をつけ
ダイケアー口紅さして老いを生き

和歌山県 森下順子

発想を変えてみたくて旅に出る
縁あってバック旅行に紛れ込む
体調はいいが血圧赤信号

和歌山県 中村君枝

清姫に会いたし桜の咲く頃に
愛に飢え情に飢えてる世の乱れ
愛敬も一筋縄でいかぬ妻

海南市 堂上泰子

三猿の教訓捨てる国際化
春霞無限に夢が湧いてくる
分水嶺に鳴く鶯の音の自由

和歌山市 土屋起世子

嫁やめて軌道修正する女
作句だけ私にのこる遺産わけ
向きあつてここが一番終の家

和歌山市 今一步

ハリウッド大阪へ来て儲けます
何糞からばつばつ行こか歳になり
桜満開早くお来しと呼んでいる

和歌山市 前岡健三郎

約束の過疎に文化の道通る
川汚れ昔話の好きな船
ユニバーサル民間機にもコマーシャル

和歌山市 吉田比佐子

薄味に慣れて元気で喜寿祝う
勤められ預金通帳数が増え
嫁姑口を控えて波静か

和歌山市 芝あつむ

天国はいい処らしい夢の妻
下積みで陽の目がみえてもう停年
怠け癖指がボタンを敬遠す

奈良市 田 中 賢 治

妻の留守おでんおでんで耐えている

ご当地も緑ヶ丘で売る手立て

外資系保険銀行蜜求め

奈良県 古手川 光

卒業記念に植えた桜に会に行き

嗅覚で春の息吹を感じとり

忘れたい過去がしつこくついてくる

静岡市 増 田 扶 美

すねる児を祖父は晩器とつれて出る

一時を幼児にかえりいちご狩り

開発が静かな村をかけめぐる

三重県 尾 崎 勤

体だけ純国産の脱衣場

太鼓ドンドン寂しい人は寄つといで

安くても電車で行けぬ牛井屋

愛媛県 宮 本 末 子

鯉のぼり尾が触れたがる命綱

考えるためにかぶつてきた帽子

千の手で千手観音月を呼ぶ

香川県 伊 勢 八重子

年金が素通りして行く春財布

したい事まだまだ多い下り坂

此の色が似合うとセーター娘が選び

香川県 松 村 輝 夫

ご先祖に無事を祈つて墓守る

前向きに生きる亀なら手旗振る

振り向けば断崖にして厄明ける

南国市 小 原 圭 二

招かれた同窓会は寄付集め

田植機がやや不揃いに植えた苗

若者に任す度量のない政治

今治市 中 村 好 恵

新薬で平均寿命少し延び

春の陽に負けぬ明るい色を着る

下戸ひとり連れて花見の運転手

松山市 山之内 八重美

頑固さを優しく包むこつもある

虹を見てそれから狂うスケジュール

温泉は始発電車の顔馴染み

日高市 根 岸 方 子

初めての襟裾は亡母に当ててやり

パソコンに頭の堅さ指摘され

パソコンの五十音さえ四苦八苦

鳥取県 西 垣 美知子

こだわりを何処か捨てたら胃が軽い

生きざまを頑固な父の背に学び

視野に母手さぐり老後考える

鳥取県 西 沖 彰 雄

懸命に生きた余生だ無駄にせぬ
火のように燃えるものありまだ七十
本音にて歩めば強い向かい風

鳥取県 岡 嶋 金子

古人言う彼岸過ぎてても七雪か
孫笑顔老後の金も少しいる
すこし株上り下りに猫の目よ

鳥取県 竹 森 富久江

親ゆずり良心やんわりと生きる
よろこびを一緒に包む二人連れ
潤滑油たつぷり塗った和む家

鳥取県 松 川 行 男

花見には甘党だつて席をとる
愛よりも占い勝つか春の乱
いや待てよ三十路は春のど真ん中

鳥取市 西 尾 敬之介

高熱に三途の川が見えかくれ
点滴のテンポゆるめてひと眠り
流しびな晴れ着競わす祖母と母

鳥取市 永 原 昌 鼓

ポイ捨てが地球をゴミの星にする
いいえとは言えない義理が絡みつ
建て前を怖れ本音は首出さず

鳥取市 谷 岡 清 子

満開の桜がせかす花だんご
里の香の露のとうに母が浮く
夢を見た働き蜂が泣く金利

鳥取市 山 口 千代子

人前に寡婦が仁義の意地を張り
忍耐の詰めた袋がはじけそう
夫婦です いざと言ふ時肩を持つ

鳥取市 宮 脇 道 子

年金が安定剤で旅と花
残されて女まるまる丸くなる
政治家の皮の厚さにただあきれ

鳥取市 山 宮 愛 恵

百円の鏡で映す老いの倅
タイマーを頼りひとりのティータイム
夜桜へ千の想いが去来する

鳥取市 河 田 のり代

チラホラと舞う花びらも団子食べ
アベックへしょんぼり地藏澄ましとる
よろしくと面倒避けて世を泳ぐ

鳥取市 近 藤 秋 星

何と言つても春は桜よ鶯よ
幸せは今年の桜にも出会
春たけなわ猫も亭主も出たつきり

鳥取市 田中 瞳子

安来市 原 煩惱児

ジープンをはくと組みたくなる脚だ

春野菜膳に山盛り血もさらさ

物忘れひどい忘れた事忘れ

鳥取市 岡田 信恵

咲く一念折れ枝さえも花をつけ

どの枝も夢に向かつて天をむき

春の雪桜ふるえて耐えている

倉吉市 牧田 みち子

フリージアどこか拗ねてるように咲き

一言が乱反射して走りだす

孫二人まさかの茶髪帰省する

倉吉市 西脇 日出子

雑草の強きにふれて母思う

一目の事で負けだす羽目になり

朝食の声かけられる今日の幸

倉吉市 牧田 賀寿恵

杉花粉よく散りました泣きました

心身がねじれて医者のはしごする

黒マント広げてカラス浮かれてる

米子市 小塩 智加恵

春ですぬ出番が巡る派手な服

チャンネルを回すと巨人負けている

右手から気合を受ける左足

故郷の詩が聞こえる無人駅
老妻とお茶一服や利休の忌
俺のコピー女房に恋をするだろか

益田市 岡田 たけを

花見酒飲みたい飲めぬ血糖値

嬉しくて笑顔向ければ妻も笑み

眠ったまま死ねたら楽でよいだろう

松江市 小川 注湖

再会にネクタイだけが知っている

子を叱る若夫婦見てうれしい気

マンションの灯のない部屋に帰ります

出雲市 梅 ミツエ

朝日受け花は喜び歌ってる

玉の露おはよと声をかけてやる

朝霧の景色の中に人がいる

島根県 毛利 幸

花びらに命伝える桜守

時計止めタイムスリップしてみたい

雪見酒炬燵で開花予想する

島根県 菅田 かつ子

花ざかり酔いつぶれてる赤い鬼

それなりの顔がとっても暖かい

何回も聞いたと息子に叱られた

島根県 松本聖子

幸せはこれほどのこと万年青の実

ありし日の夫の笑顔に泣き笑い

どの部屋の時計の針が正しいの

大阪市 内海綾乃

おおきにと心やすらぐ礼言葉

向かい風全速力でベダル踏み

憂さ晴し行きたいけれど遠い里

大阪市 平井露芳

俺の目の青いうちはと言うのか

脳の錯落すオイルが見付からず

エベレストわざわざごみを捨てに行き

大阪市 中井正秀

人生を三手先読む将棋好き

野良猫も多勢おれば留守番に

リハビリに歩けと医者言うている

大阪市 伊藤博仁

逃げ道を開けてじっくり意見する

これからは遺影にかわる母の笑み

飲助に打出の徳利ほしいもの

大阪市 中村叡子

引きこまれ宮尾登美子に夜が白む

これだけの高さ蹴く足となり

お向かいの犬が吾が家のお留守番

大阪市 津守なぎさ

気がねなく饅頭もらう血糖値

ささやかな贅へ一人の湯が溢れ

定年の相手疲れるへボ将棋

大阪府 小栢こずえ

遅霜に出かけた新芽首折られ

うぐいすに春を告げられ農婦する

恋猫の声で始まる春の音

大阪府 東文江

若き日の苦勞忘れて老いしずか

ちらほらとつばみほころぶ雪柳

老いの坂まだまだ夢を抱きつづけ

大阪府 藤井郁代

ゆったりと流れる時間楽しんで

雨上がり紫陽花元気で下さいな

野苺を採ってはしゃいだ初夏の頃

大阪府 桑田ゆきの

趣味一つ増やしてボケの防止とも

人生をゲームで過ごす楽天家

花の下軍歌で締める父の席

大阪府 野田栄呼

穏やかにゆとりの余生さとりつつ

花作り愛の眼ざし母譲り

今世紀 主夫交替が根付くかも

枚方市 二宮 紫鳳

花飾り童女のおつむに蝶の客
里帰り娘の好物をいそいそと
ジョギングのシューズがみつける春の音

枚方市 大昇 隆 広

人人人いても温さがしほむ街
悪意無き人と思えるまでの鬱
帰省してパパだけ唸る里の味

大東市 井上 すみれ

御堂筋春を再びよんでいる
ふきのとう待ってましたと水をやる
誕生日派手を買うとは言うものの

高槻市 乙倉 武史

ニイハオと安い野菜が押し寄せる
今のところ元気ですわと笑つとく
ダメ虎の豹変期待旗をふる

高槻市 大崎 侑子

向かい席大口開けて紅をぬる
真白のドレス新婦の過去問わず
花見酒早朝場所とり社の仕事

高槻市 西谷 治三郎

人間に無くてよかったバーコード
頼られていた日もあった粗大ゴミ
また元の話に戻るご返盃

高槻市 執行 稲子

シルバーの席憚らず白い杖
空の旅座って恐い症候群
女系家族いつかはきつと兜買う

八尾市 高橋 明子

あちこちと痛み堪えて生きている
大阪城右に左に川下り
入歯して食事のつらさ身に沁みる

八尾市 鷺見 章

水仙を活けて一人のカップめん
湯上がりの肌にやさしい春の風
梅開花テレビで知った季節感

八尾市 中島 春江

きれいだが蝶に無視されてる造花
金のなる木買うてお金が出て行き
ロボット犬面白くって後に鬱

八尾市 田中 トシエ

雨女傘を返して借りて来る
見舞客話の種が切れるまで
子供減る記事の重たく兜折る

大阪市 中川 千都子

夕焼けに染まりゆつくり帰る道
出迎える猫にただいま今日も無事
いかなごがくの字しの字に炊きあがり

吹田市 早川 棲世

今もなお資本は敵の論で記事
敗戦と破綻それでも昭和富み
旅にぎやか老いた夫は家にいる

吹田市 二宮 栄子

古里の川に記憶が見えかくれ
一日を無言の日あり一人住む
過去の夢つづき追つてゐる揚羽蝶

堺市 荻野 象山

セーラー服の色は褪せない幼窓
夢のない国に治らぬ不況風邪
やがて来る介護の風に揺れる恋



(つづき)

和泉市 西岡 洛醉

コンピニを訪ねる孤独それも良し
B面を妻に隠した日の焦り
受け流す愚痴妻だから嫁だから
お茶漬に妻と二人の昼が済み

堺市 大橋 錦

ランドセル背負って弾む孫の足
だんだんと歳が隠せぬ写真です
出不精を誘い出された孫の指

堺市 渡辺 さだを

先客の猫をけとばす春ごたつ
周航歌港は女を泣かすところ
証券マン親父のようだと世辞をいう

羽曳野市 山本 たけし

蓬摘む自然の恵み春の風
廃船も絵になる海辺夕茜
不況風五代目必死守る店

泉佐野市 備後 三代子

子を抱くように白菜もらい受け
傍目には理解しにくい老いの錆
障子締め人待つ思いつのらせて

泉佐野市 大工 静子

悩み事朝の仏壇独り言
通り抜け禁止の場所を知らぬふり
よく見える針穴だけど通せない

摂津市 望月 遊美

美化しても国の大罪隠せない
反戦者顔はおだやか品の有り
明治から生きて平成住みにくい

愛染帖

波多野五楽庵選

米子市 政岡日枝子

笛が泣くようにじんじん花冷えや
母の桜がいつぱい散つてた一周忌
戻り冬 桜もひともし直せず

和歌山市 木本 朱夏

モノクロの膝を抱えたまま春に
空の果て見んとて雲雀揚るなり

和歌山市 西山 幸

よく笑いよく泣きいつも病んでいる
前触れの静かな風が恐ろしい

和歌山市 川上 大輪

ため息を沈めてグラス重くなる
手のひらに昨日の風がまだ残り

尼崎市 内田美也子

横道に逸れた話を持て余す
長入院 義理の見舞は遠ざかり

弘前市 高橋 岳水

一錠が掌に重き朝軽ろき朝
魂と触れるわたしの花紀行

鳥取市 徳田ひろこ

手のひらの荒野いのちの話する

息をつく暇なく波のくる節目

松原市 玉置 重人

春の風電池交換したくなる
沸点をすこし疑う鼻ピアス

川崎市 和泉あかり

子の街へつづく道路を掃いている
ものぐさをたつぷり入れた願いごと

弘前市 斉藤 嘉

口笛が上手になって変声期
恩師逝く花の移ろいだとしても

米子市 林 瑞枝

朱に染まる椿の丘にある童話
ウィットに富む筈にかたつむり

伊丹市 櫻谷 郁子

さくらさくら余白幾度飾るやら
影武者にバトンタッチをして眠る

吹田市 山本希久子

悪妻と思う乳房が柔かい

堺市 和田つづや

きつかけはあの一匹が吠えたから
犬掻きの日記の灰がこれだけか

鳥取県 岩崎みさ江

桜満開ちつとも老いぬ姿して

鳥取県 西原 艶子

ラストダンスに冗談は通じない

東京都 播本 充子

むっくりと音がしそうな父のやぶ

米子市 木村富美子

西宮市 門谷たず子
度の合わぬメガネも一度拭いてみる

綾部市 藤田 芳郎
輪の外で嗚呼という字を見せよう

鳥取県 小西 雄々
火葬場で一会の風の海を見た

弘前市 高瀬 霜石
随分と長いおまけを生きている

尼崎市 長浜 澄子
脱皮しようか白木蓮の匂う道

和歌山市 福井 桂香
完璧という曲者が眠らせぬ

松原市 小池しげお
金平糖あの先生が好きでした

海南市 三宅 保州
影のない人は信用できません

竹原市 正畑 半覚
父がすき父の歩んだ道が好き

和歌山市 古久保和子
頰杖をついてじわじわ石になる

大阪市 前 たもつ
リストラのまだまだ続く白い闇

和歌山市 松尾 和香
後悔は流れに乗って行ったきり

鳥取県 植田 一京
目薬をさして情報読みわけ

尼崎市 春城武庫坊
花の下方向音痴の自転車

八尾市 山本 宏至
嬉しさに尻尾振りたいたい時がある

豊中市 田中 正坊
名を知らんから雑草と言っておく

米子市 青戸 田鶴
私をゆする多くの闇の声

弘前市 櫻庭 順風
句読点つけそこねては生きている

和歌山市 上地登美代
甘い誘いに乗ったお金のシャボン玉

八尾市 宮崎シマ子
表情を盗まれそうで目をつむる

大和高田市 鍛原 千里
沸点の迷い大きなやけどする

愛媛県 花岡 順子
気紛れな春のバズルが埋まらない

和歌山市 山口三千子
かげろうを追って躓く事ばかり

横浜市 鈴江 純子
観覧車背中の羽根が伸びてくる

唐津市 田口 虹汀
人生いろいろ一期一会がひとゲーム

藤井寺市 高田美代子
のし付けて返す言葉を溜めてある

和歌山市 福本 英子
残雪つづくコロボツクルの孤独癖

西宮市 西口いわゑ
期待されすぎて蓄が開かない

岡山県 矢内寿恵子
不定愁訴書く鉛筆がまた折れる

高知県 桑名 孝雄
花道はないが六方踏んでみる

札幌市 三浦 強一
アルバムを繰ると詫びたい人ばかり

松江市 川本 畔
気がかりをきれいに吞んだ湖の青

泉佐野市 稲葉 洋
純白の気品が持っている一途

西宮市 牧淵富喜子
身の隅にいつか蒔きたい種ぶくろ

京都府 丹後屋 肇
花吹雪浴びてくしゃみが止まらない

岸和田市 宮野みつ江
生きるにも死ぬにも邪魔をする弱気

竹原市 福島 万年
菜の花の中にハンカチ置き忘れ

鳥取市 録沢 風花
返済が終った頃に雨が漏る

京都市 都倉 求芽
刃こぼれの男に弱い紅椿

枚方市 海老池 洋
心配をしだせばきりのない積み木

吹田市 石原 靖巳
脇役が過剰演技をして困る

西宮市 奥田みつ子
卒業式 返せぬ恩がまた増える

大阪市 津守 柳伸
やるだけはやった宴の輪がぬくい

海南市 谷口 義男
啖呵切る裏で逃げ道考える

富田林市 大橋 鐘造
重箱の隅をつついて不安

八尾市 吉村 一風
ひと呼吸おくと拳もとけてくる

宇都市 平田 実男
尻尾振るだけが取柄で課長補佐

鳥取県 土橋 登
枯れてゆく背骨を棒のようにして

鳥取県 岸本 孝子
苦勞した過去は語らぬ丸い背

枚方市 寺川 弘一
反抗をまるく治める四捨五入

横浜市 吉田 裕峰
肩書を取ってシニアへ仲間入り

横浜市 田中 笑子
人のふり見ても直せぬ裏おもて

尼崎市 春城 年代
生きて来た証あちこち積んで置く

砂川市 大橋 政良
古い義理縄の形でからみつく

横浜市 保田 絹子
ごめんなさい反芻しつつ言い出せぬ

鳥取市 田村 邦昭
美しい夢みるだけの明日でいい

松江市 津川 紫晃
主役にはなれぬハープのよい匂い

和泉市 西岡 洛醉
ちつぽけな贅沢メルシャンワイン抜く

愛知県 早川 盛夫
広島過ぎてボクの居場所が見当らぬ

和泉市 横山 捷也
本題に入るといつも逃げる人

横浜市 菱田 満秋
闘病に勝つて小皺が増えていく

尼崎市 田辺 鹿太
人ごみで自分の彩を見失う

富田林市 片岡智恵子
生きるための嘘ひとつのみふたつのみ

鳥取県 西沖 彰雄
裏切らぬ味方は妻と影法師

東大阪市 北村 賢子
片方になってせつない飯茶碗

羽曳野市 永田 章司
手術跡冬の寒さの終り告げ

横浜市 三村八重子
仰向けの空もろともに桜抱く

富田林市 中井 アキ
風船がパチンと割れる妻の乱

唐津市 久保 正剣
きつちりと気配りをして嫌われる

弘前市 一戸 ツネ
紙コップつぶした指が焦げてくる

米子市 鷺見 正子
三歳が女の意地を持っている

寝屋川市 籠島 恵子
いい事を思い出しては生きている

堺市 矢倉 五月
家庭内別居したいが部屋がない

奈良県 渡辺 富子
オーバーな作り笑いで群の中

弘前市 宮崎ヒサ子
妹の脳室僅かずつ閉じる

黒石市 相馬 一花
裏声と地声で娑婆を遊泳す

高槻市 乙倉 武史
美人ではないが飽きない目鼻立ち

和歌山県 楠見 章子
どっこいしよふぬけた影が背をまるめ

藤井寺市 太田扶美代
切れ味が少うし落ちてきたよう

池田市 栗田 久子
都合よく忘れて罪を許します

鳥取県 さえきやえ
ペンと辞書つれて自分をさがす旅

横浜市 清水 潮華
相槌の気楽はとうに見透かされ

四条畠市 吉岡 修
氏素性隠せぬ顔でこの通り

香川県 木村あきら
箸濡れて今日の倅せかみしめる

大阪府 澤田 和重
吊り橋を渡って笑顔とり戻す

横浜市 金森 徳三
二人では広いが同居には狭い

東京都 後藤 早智
庭園にむかしむかしの山桜

出雲市 石倉美佐子
一線も越せずさりとて散りもせず

米子市 澤田 千春
チューリップ踏まれたままの顔で咲く

羽曳野市 吉川 寿美
肩パッド女 女にあるいくさ

和歌山県 中後 清史
一滴も零さぬ友で馴染めない

倉吉市 米田 幸子
自画像も画廊にちゃんと収まった

鳥取県 石谷美恵子
気の重い代理の席へ浅く掛け

大阪市 奥村 五月
マンションに住めば恋しい裏長屋

鳥取県 田村きみ子
目を閉じて木のささやきを聞く

富田林市 藤田 泰子
散歩道ボチにはボチの地図がある

寝屋川市 平松かすみ
わたくしのボケが噂にならぬよう

倉吉市 山中 康子
惜しまれる人が飛び立つ向こう岸

吹田市 早川 棲世
デパートへ帰路に寄る気でいる葬儀

倉敷市 井上 富子
親方と呼ぶには尻が青すぎる

鳥取県 林 露枝
先のことあまり思わぬことにした

鳥取県 土橋はるお
僕んちに金の成る木は育たない

今治市 塩路よしみ
いつの間にかあなたの彩に染む女

川柳太平記 (277)

川柳の群像

佐藤正敏

東野大八

佐藤正敏（本名そのま） 大正2年7月6日東京生まれ。平成12年10月5日死去。天眞院徳翁正道居士（享年88歳）。

彼と筆者はほぼ同年とみてよい。言いたいことをスバズバ放言する性格は筆者そのもので、よくウマが合い、よく飲みよく高歌放吟したものである。

「お前さんは、東映映画の大川社長とウリ二つだから映画好きのおれはたまらないよ」と、よく酒席でそう言つて彼の肩を叩いたものだ。

『川柳公論』の顧問になったのが昭和50年、大正五年頃から川柳を始め、『川柳紅座』『川柳芥子粒』などの同人で活躍、『川柳研究』の三太郎親分につき、先生没後は同誌の幹事長になったが、たった一冊きりのおれの句集『ひとり道』の序文を三太郎先生に書いて頂

いたときは嬉しかったな。もう」というのが口癖だったが、この句集は千部しかなくて手に入るのにみんな往生していた。その一冊を買った当方は出水で流出、未だに惜しいことをしたとホゾを噛んでいる。彼の長女佐藤いづみさんから親戚に進呈済みのその一冊をコピーして貰ったが、今どきの川柳作品よりも遙かに高踏な秀作が多いのに眼をみはる想いである。

一冊きりの彼の句集の跋は、彼らしく面白く書いているが、長くなるので以下主要部分を抄録する。彼の本音がよく出ている。

「昭和五年頃、楽天坊と称する投書屋が誕生した。私である。川柳に限らずめったやたらにただ活字になるのが嬉しくて作りまくった。雅号も夢山、悌明、夏輔とか目まぐるしく気が変わる度に変えた。そのうち中村山門

主宰の『川柳紅座』から「貴兄は天才だから云々」と言われ、ニキビ華やかだったし、私は有頂天になって意気揚々と同人に加わった。同年輩の竹泉明児というライバルと出会い、おぼろげながら川柳を自分の心の表白の具と考えだした。

その証に、私は『紅座』が解体して、商業的な性格を持つ『川柳倶楽部』に変貌した時、頑固に同人を辞退している。斯くして理由は解らぬまま清水米花の『芥子粒』に籍を置いていた。同年輩の鈴木夢一坊（後に小寒郎）角本天地人（後に犇郎）河西白鳥等のライバルに出合うことになった。（中略）

句会をよく歩いた。面白かったし抜けることが得意だったものだから、句会がち合ったりするとカケ持ちもやつてのけた。

『川柳研究』の前身『国民川柳会』でも、前記の明児や内山虎の子（現舞将）等とそれこそ生命がけでシノギを削り合ったものだ。また「鹿の子」という回覧ノートを作り、自分達の気ままな川柳をものした。私の、この頃が搖籃時代であつたような気がする。「ナイーブ吟社」を若手達と作ったのもこの頃。

戦争に入つて中国大陸の奥地に追いやられたが句は書いた。書いても書いても部隊の所在が知れると破り棄てられたが、この頃不意に來た『川研』の嬉しさは今も忘れない。

帰還してからの私は、間もなく関口六佳史から再建する『川柳研究』を手伝えといわれそれに微力を尽くすことになった。

三太郎先生からのお声がかりもなく、不肖の弟子となったが、更にその後創刊した『芥子粒』も手伝った。私は不思議にも山門氏や米花氏、三太郎先生にも句の上で何等掣肘らしきものは受けなかった。勝手気ままに作句を続けた。だが次第に不安を覚えたが、本能的に三太郎先生の無言の選句に心の支えを得るようになっていく自分に気づいた

えんえんとこの跋文は続くのだが、句集発刊についてこんなことを後文に書いている。

「実は昭和八、九年頃からひそかに何度も自分の句集を出そうと考え、ノート六冊、活字になった句を加え一万句を越えていたので嫌悪感を交えながら選句をはじめ出した。随つてこの句集は、世に問うとか、大方の批判を仰ぐとかいう大それたものではない」

右は昭和40年6月の記録である。さて彼の『ひとり道』千部は出来上がった。序文の三太郎師匠の筆はさすが名文だが、以下抄録。

「自分と句によって格闘するということは或意味では自分を削ることである。生命が句に移乗することである。これは句づくりが下手では到底できない。と言つて、上手のそれ

だけでは尚更不可能である。いや却つて上手が災いする。初心に還つて、しかも万貫の重きを背負つて歩む―それは愉しい悲劇ですらある。そして結局は孤独に終わる。へこの道をゆくこといよいよ深ければ、われはいよいよ孤独なり」と私が常に言うのは、このことである。

この句集の句材は狭い。然し深い。つめたいうで温かく、温かいがきびしい。しかも、自分を削るに微塵の用捨がない。それを淡々と書き込んだところを、諸賢はしつかりつかみとつてほしい。さだめし彼は本懐と思ひ感謝することであらう。(以下略)

この三太郎の序文は、初めの部分をかなり削りつてゐる。江戸川柳観が出てゐるからである。然し、この句集と関係がないので省略した。本稿に掲げた抄文は、いわば三太郎の壮年期における川柳観をよく描き出していると思われる。一九六五年六月という本文の註記がよくそれを示していると思う(東京・中野・川添―蒼々亭なる但し書きも懐かしいものである)。

とにかく佐藤正敏の『ひとり道』は千部で足らず、後に復刻版が出ている程だ。この句集の初めの部「心影抄」から十句抜粋しておこう。

取柄なき身に触れ酒量怖くなり 正敏

真夜中に酒さめ果てていた孤独 〃

痴れてなおこのうつろさも消せぬ酒 〃

単純に生きられる顔ガムを噛み 〃

過信身に返り今更なる思い 〃

夜の底に犬も孤独で吠えるすべ 〃

夢の中の自分の悪が小気味よし 〃

夜十する妻こんな世をどう思う 〃

酔いきれぬものも惨めなものど知り 〃

空間に別な自分がさらされる 〃

これら十句のほか、職掌柄による職工十年 〃

の句の列や、くらしの句、病母、手形、風、 〃

亡母の句列の他、凡庸抄の長文の句列が 〃

この句集のすべてのようで、ざっと千七百句 〃

が収録されている。若き日の酒徒正敏大人の 〃

風貌が余すところなく語り継がれている。 〃

最後に『川柳研究』句集第五集(平成12年) 〃

の彼の遺作(近作)のうちから拝借しておく。 〃

成り行きに任せておれぬ血が騒ぐ 正敏

塾居して以来錆びつく思考力 〃

無理に無理重ねただけの身を喰う 〃

すぐ先に立つ今更という思い 〃

満たされぬものなく老いの深ひまま 〃

何もかも過ぎたことだとして懺然 〃

誹風柳多留二四篇研究 30

大野 秀二・小栗 清吾
粕谷 長生・橋本 秀信
山田 昭夫・伊吹 和男

清 博美・佐藤 要人

234 寝たふりのしぞんどこのか上ハせつり

大野 上草履は、吉原の遊女が廊下を歩くに履く履物。何枚も重ねた丈の高い草履で、享保以降の風習により、遊女の姿勢を鷹揚にし、八文字道中の練習にもなり、遣手新造との足音区別もできる上、忍び歩きを防げるというところから考案され、引き続き使用されたものらしい。(川柳大辞典)

吉原に登様して、部屋で遊女の来るのを首を長くして待っている。遊女の履く上草履の音がしたので、寝た振りをしたところ、部屋の前を通り過ぎて行ってしまった。別の遊女であつたらしい。せつかくの寝た振りも無駄であつた。振られ客が遊女を待つ句。

寝たふりをのぞいてどつか又うせる

清・佐藤 賛

235 まよふまい物かひつしと並んでる

大野 ひつしとは、「ひしと」に同じ。ひしと＝すきまのないさま。びつしりと。(小学館古語大辞典)

吉原の張見世に遊女がびつしりと並んでおり、いづれが菖蒲かきつばたで、どの遊女を揚げようか迷っている様を詠んだ句。

目うつりがするはつずらりとならび

清・佐藤 賛

二〇二〇

236 高なわ返ハ釈尊の御弟子なり

大野 芝増上寺の僧侶、品川通いの句。高輪までは僧侶の姿であるが、高輪まで来ると衣を外して、医者に化けて品川まで通う。

高輪が即ち化ける所なり

朝帰リ高輪からは出家なり

清・佐藤 賛

237 大黒ハ五かいの内のひとりなり

大野 大黒は僧侶の妻。梵妻。大黒天は、元來厨(くりや)にまつられた神であるところから、寺院の飯たき女をいい、また、私娼や妻をもいうようになったという。また、世をばかつて厨だけについて、世間に出さないからともいい、大黒天の甲子祭りから子(寝)祭とのしゃれからともいう。五戒は仏語。在家の人の守るべき五種の戒。すなわち、不殺生戒、不偷盜戒、不邪淫戒、不妄語戒、不飲酒戒。(日国)

大黒すなわち僧侶の妻は五戒のうち不邪淫戒の一人である。浄土宗以外の僧侶は妻帯を禁じられていた。が実際は大黒と称し妻を持つたり、女を囲ったりした。

大ごとと呼のハしやかもしらぬちあ

五戒より和尚やつかいたもつてる

二二三八

修三16

四二八

末一13

三二五八

橋本 礎解の浄土宗とあるのは、浄土真宗
(一向宗)の誤り。

粕谷 大黒天は本来は崇拜すべき神なのに、
寺院の女に大黒と渾名が付いたばつかりに五
戒に入ってしまった皮肉を匂にしたものと思
う。

清 ささいな事にこだわるともりはないが、
粕谷説は原句「大こくハ五かいのうちの壺つ
なり」(天六松3)の方の解。それを「一人
なり」と洒落て改作したので、句意がわかり
にくくなった。礎稿でいいのではないか。

佐藤 同右。

238 小判のはしと中をちをあるき煮ル

大野 中落は、魚を三枚におろしたときの中
骨の部分。あら煮などに用いる。歩きは、江
戸時代、村の庄屋に所属した用務者。もっぱ
ら村の内外の連絡事務を受け持った。(以上
「日国」)

村の歩きが小判を食うように高い初鰯の端
と中落ち、つまり頭と背骨の部分と一緒に煮
ている。初鰯は高いので歩きなどには手に入
らないものであるが、刺身で食べた残りの頭
や中落ちを分けてもらったのであろう。

清・佐藤 賛。

239 納豆へちりにはしき所化が付キ

大野 納豆は、寺方から檀家へ配った歳暮ま
たは年玉の品。一般の町家で年玉に貝杓子を
持ち歩いたように、合羽籠に入れて運び回し、
これを配ったものである。所化は、僧侶の弟
子の称。所化は能化に対しての称で仏弟子の
ことである。いわゆる納所坊主である。(以
上「川柳大辞典」)

お寺で納豆を年玉に配るわけであるが、檀
家をよく知っている納所坊主を連れていくこ
とを詠んだ句。

わきの僧納豆箱を持てかけ

一五二九

合羽かこあけて納豆壺つ出し

安四松3

清・佐藤 賛。

240 仮りに女とあらハれてめしをたき

大野 大日如来の化身だという佐久間家の下
女のお竹を詠んだ句。大日如来が下女となっ
て現われたので、飯も炊いたであらう。

知らぬが仏竹くこきつかり

四七五

大日如来の尻を水くミつめり

初11

おたけどのとうだとほんぶ尻をぶち一五二六

お竹大日如来の記事は「武江年表」「寛永
年間記事」に記載されています。

小栗 賛「仮りにあらわれ」は謡曲によく出
る語。

かりに女郎とあらハるうけいど也 二三四

仮りに娘とあらハれて式分しよしめ

傍四34

橋本 賛。「仮に現れ」は、「檜垣」「江口」
「寝覚」「杜若」「玉葛」等に……と「謡曲と
古川柳」にある。

清・佐藤 賛。

241 よくのかわ張さけそふなばッア出る

大野 欲の皮は、欲の強いことを皮にたとえ
ていう語。多く「欲の皮が張る(つつばる)」
の形で用いられる。(「日国」)

欲の皮が張り裂けそうな婆あというのは、
当然吉原の遣手婆である。三会目に一分の祝
儀を貰いに、客の前に出てくる。

三会目まつもるともにばッあいる 安九鶴2

小栗 賛。「皮が張り裂けそう」は肥満もか
けているか。

清・佐藤 賛。

尚香のむ

西出楓楽選

花談義もう友達になりました

ポトリ落ちたのは笑い過ぎた椿

棘抜いて跡にポツガリ穴があく

テープルにみかん置いてるだけの幸

ゆきずりのひとへ一瞬響く鈴

春が逝く本音を書いてまた消して

B型を意識し過ぎる癖がある

ハーブティーわたしの闇が溶けてくる

美しい話は深く立ち入らぬ

水たまり跳べなくなつてダイエット

時計まだ止まったままで一周忌

欠伸しています十年バスポート

休肝日にはたのしいことを考える

ルビを打つように昨日を振りかえる

計算をする善意があだになる

ゆずりたい財布に誰も手を上げぬ

人間のエゴに問われるパンの耳

落しものして大掃除してしまふ

ファッションを選んで春へ飛ぶ支度

香川県 池内かおり

藤井寺市 高田美代子

米子市 森脇 麗

芦屋市 黒田 能子

香芝市 大内 朝子

和歌山市 西山 幸

藤井寺市 太田扶美代

富田林市 中井 アキ

川崎市 和泉あかり

藤沢市 妹尾 安子

横浜市 川島 良子

寝屋川市 岸野あやめ

尼崎市 春城 年代

寝屋川市 籠島 恵子

鳥取市 岸本 孝子

米子市 鷺見 正子

岡山県 矢内寿恵子

寝屋川市 森 茜

三田市 久保田千代

ささやかな脱皮 美容院のががみ
残り時間惜しんで今日の糸紡ぐ
亡き父と交信したい臘月

深読みをしすぎて橋が渡れない
真っ直ぐに歩くと影が言っている

忘却の糸のもつれはそのまま
お洒落にも努力忍耐いると言う

老いふたり錆びた鎖の色もよし
鼻っ柱ほどでなかつた妻の骨

釘煮作る誰彼の顔浮かべつつ
花の下クレオパトラか楊貴妃か

不揃いの種それぞれの主張持つ
いい話だからみんなにお裾分け

悪女かも知れぬ握手の手がぬくい
私にルーージュ引かせる便り来る

潮時と鬼がわたしをけしかける
花便り杉の花粉もついて来た

安直に妥協はしない紙コップ
一斉に春立ち上がる時刻表

シミいっぱいつけて白紙に戻される
瀬戸ぎわの美学大事にする桜

急ぎの用か挨拶もなく近くことは
この胸にぶつかつて来い反抗期

淋しさは言われない崩れそうだから
先の無い母へ済まない嘘一つ

青空が私を外へさそい出す

米子市 白根 ふみ

熊本市 永田 俊子

横浜市 山下 省子

八尾市 宮崎シマ子

大阪市 神夏磯典子

横浜市 秋元 和可

大和高田市 鍛原 千里

富田林市 片岡智恵子

東京都 播本 充子

西宮市 奥田みつ子

和歌山市 福井 桂香

岡山県 福原 悦子

愛媛県 花岡 順子

大阪市 川久保睦子

岸和田市 宮野みつ江

横浜市 保田 絹子

鳥取県 石谷美恵子

尼崎市 長浜 澄子

和歌山市 木本 朱夏

堺市 志田 千代

米子市 政岡日枝子

松江市 川本 畔

富田林市 藤田 泰子

鳥取県 岩崎みさ江

倉敷市 小野 克枝

米子市 青戸 田鶴

有りがとう周囲の空気円うする
 空の青にも染まらぬ鳥の自己主張
 かきつばた心に銀の雨が降る
 ど忘れを脳の特技と言うけれど
 意地捨ててみたらみんなが暖かい
 生と死のテーマへ初夏の陽を当てる
 おとなしい人の話が染みしてくる
 記念樹が咲いた帰っていらつしやい
 昼下がりコーヒー館の淑女たり
 一本気な桜は咲いて散りました
 ひとり住み愛想笑いを忘れてる
 甘い夢みていた頃の写真帳
 亡母の絵を抱いては来た道をゆく
 お陰様でお陰様でと老母元氣
 ひと呼吸入れた返事に諭される
 誉めごろしされて桜のほんのりと
 薄化粧好きな鏡で亡母に逢う
 今日もまた火花散らせる棒グラフ
 弱虫も泣き虫もいて妥協する
 観劇へ着る服少し派手をよる
 悶々と悩む子の夢花あかり
 Eメール打つ指恋を知りはじめ
 現実に戻れば雷雨烈しかり
 糟糠の妻がマグマを抱いている
 生きている自覚裸足で土に立つ
 自画像の絵筆は若さ主張する

和歌山	吉村さち子	和歌山	上地登美代
出雲	石倉英佐子	大阪	町田 達子
大阪	板東 倫子	吹田	山本希久子
大阪	渡部さと美	大阪	矢倉 五月
堺市	西口いわゑ	西宮	後藤 早智
西宮	高杉 千歩	八尾	井上 富子
倉敷	門谷たず子	西宮	田中美弥子
東大阪	宮本かりん	堺市	楠見 章子
和歌山	福本 英子	和歌山	田村きみ子
鳥取	土橋 睦子	鳥取	喜子
倉敷	撰 喜子	西宮	牧渕富喜子
羽曳野	徳山みつこ	羽曳野	吉川 寿美
鳥取	伊藤 寿美	鳥取	田賀八千代
鳥取	渡辺 富子	奈良	

アイディアを商品にした知恵袋
 自分史に破り捨てたいページあり
 桜餅携へ亡母へ逢いに行く
 三日月の船から夢がぶら下がる
 独り芝居もう馴れましたシクラメン
 赤薔薇の誘いにのらぬ白薔薇
 地震見舞 紙面借りたい友の数
 どん底に落ちて笑う強かさ
 カタログのようなつり書を見比べる
 この歳でまだ現役の小商い
 継ぎ接ぎの薄墨桜しかと生き
 花便り途端に雪が降る不思議
 節目かな西から東から揺すり

横浜	田中 笑子
長岡京	谷垣 幸代
鳥取	西原 艶子
和歌山	武本 碧
出雲	園山多賀子
大阪	星野きらり
大阪	津守 柳伸
和歌山	松尾 和香
大阪	本間満津子
川崎	小林久美子
羽曳野	西村りつえ
米子	小塩智加恵
鳥取	徳田ひろこ

かおりさんの句―一軒一軒の家の前に植木鉢が、所狭しと並
 んでいる街並みが目に浮んでくる。春を待ちかねた鉢は、家の
 人の丹精に応え力一杯咲き誇っている。水遣りの時、通りがかり
 の人にほめられすつかり打ち解け、種を差し上げる約束まで
 出来上がる。人情がまだ寂れていないことを感じさせる、心温
 まる句である。美代子さんの句―着想の斬新さをいただいた。
 このように想像すると、いささか取り澄ました風情の椿が、ぐ
 っと親しく感じられる。麗さんの句―気掛りなことが解決した
 あとの、安堵感と虚脱感が簡潔に詠まれている。解決を切に望
 んでいたのに、こんなはずではなかったと、拍子抜けしている
 自分に気付いた戸惑いも共に表現されている。能子さんの句―
 お母さんを中心にした堅実な家庭のたたずまいが伝わる。幸せ
 とは栄耀栄華ではなく、テーブルにみかんがある程度の、ささ
 やかなもので十分なことを認識させられた。

秀句鑑賞

同人吟 小池 しげお

— 5月号から —

川柳塔社の編集部長さんから、さて早速でございすが、川柳塔六月号に同人吟の秀句鑑賞をお願いしたく、と頼まれました。

頼まれ甲斐のある鑑賞文にしたいと苦勞しました。

四月の川柳塔本社句会のおはなしの中で、近頃の川柳では三要素のユーモアが少なくなつたと、古川柳の滑稽味を説明されて、なる程なあと思ひました。今回の秀句鑑賞には、そのユーモアのある句を主に拾つてみたいと思ひました。私なりの鑑賞です。お許し下さい。

春一番洗濯物を二度洗う

清水 潮華

句の構成として、一と二があり内容が素直で面白い。うれしい春、楽しい洗濯、風が吹いてホコリが飛んできたのか、も一度洗濯をした、何とほほえましい。

愛嬌が足りなくなつたお父ちゃん

驚見 正子

私のようなお父ちゃんになつてしまったの

ですね。しかし本人はとても頑張つています。見えないだけで、見て貰いたくないだけで、隙のある人に配っているティッシュ

川上 大輪

今までは手も出していないのに、にこつとしてくれました。年を取つてからは、隙がなくなつたのか、くれ方が少なくなりました。

隙のある人が面白いなあ。

放つておいても枯れない花と思うたに

舟渡 杏花

さすがペテラン、とても秀吟。どんな生物も放つて置くとあきまへん。しかし放つておき方があるですね、特に花は。

代筆で知る病状がなまなまし

菱田 満秋

本人よりも代筆の方は主観と客観が入り、詳細になつた便り、内容がよく分かります。きつと良くなれることでしょう。

御仏飯高々と盛るうれしい日

細川 稚代

以前、川柳塔誌、初歩教室の先生であつた

吉岡美房さんの大ファンであつた稚代さんの句。何時も心やすくして貰ひ有難く思つています。たまに電話をしたり、して戴いたり、つい長い電話になつてごめんなさい。うれしい日の中で、特に仏飯を高く盛つたうれしい日、稚代さんの動作や顔もつかべて、にたつとしています。私は今後も稚代ファンになる事でしょう。

新しいうちは雑巾らしくない

三宅 保州

新学期が始まるので、「おばあちゃん雑巾できた」と孫がいつも取りに来てゐる。安い旅行で貰つた安いタオルで、妻が作るの喜びばれている雑巾。雑巾色にならないと雑巾でない。雑巾色になつても、ふきんは洗つてから漂白剤につけて、また洗つてふきんにしています。雑巾で拭くところをふきんで拭くと叱られますよ。軽みがあつて、重みがあつて、ユーモアがあつて、私の好きな川柳です。

ころろ平らかにんげんに会わない日
今死ぬと都合の悪いことがある

新家 完司

こういう心境の川柳が作りたいですね。何時も完司さんの句を見て、感心と得心を一人にしています。大したものですよ。

お土産にダイヤをくれた人がいる

高田 美代子

私の妻は四月生れ、ダイヤモンドは誕生石で、死ぬまでずっと妻で居てはしかなかったので、安物や言うて、保証書もつけて渡したことがありました。今でもつまらない夫ですが。

この句もの凄く面白い、飛びつきました。もし私へのお土産なら、やっぱり酒かな。

針金がこんがらがって捨ててある

桑原 道夫

こんがらがってが、とても愉快。

不倫でも愛はやっぱり愛である

阿部 進

そうである。一生懸命である。

欠点を晒し兎は楽になり

福井 桂香

兎と兎のはなしは、小さい時からよく聞かされました。やっぱり兎は偉いと思つていましたが、近頃いや兎は悪者やと言つてもあります。相手を兎にしたのが売名的だとか、しかしこの話は兎と兎でなければならぬ。

この句、兎は楽になりて頂戴しました。

ひよつとして恋しているよお婆ちゃん

山門 幸夫

タミ奥さんはお元氣ですか。軍人歴のある幸夫さんが作られたこの秀吟、頭が下がります。

す。もつともつと恋をして下さいませよ。

退職をしてもあだ名で呼んでくれ

仁部 四郎

あだ名とは有難いもの。自分ではつけてないがその中に聞えてきて、誰がつけたか知らないが、うまい事つけたもんだなあと感心しています。そのあだ名が転機を迎えてもまだ通用するなんて、この上もない仕合せ。

失恋に泣くのは男かも知れぬ

安平次 弘道

昔、失恋するのは女で、失恋さすのは男と相場が決まっていました。私は恋に遠い男で、そんな事には関係ありませんが、近頃は戸主も亭主も、男もだらしなくなりましてね。

酒も煙草も女も父を越えられず

小島 蘭幸

父を越えられずで、蘭幸さんの男前の顔がうかんできましてね。それが酒と、煙草と、女とあつたから。

それが越えられずで分かりました。追い越しましたねえ。

四月十六日、八重桜と共に、皇居にもコウノトリが来て、皇太子妃雅子さんのご懐妊の発表があり、十二月上旬にはご出産の由、日本国民として大へん嬉しいことです。アメリカでは、イチロー、新庄が打つし、佐々木、

野茂の好投と、うれしい事が続きます。一方株は下がつて景気は下向き。しかし、もつちよつとすれば良くなると誰かが言うて居りますので、引続き辛抱することにしました。

動くものあり春はすぐそこに

岩本 笑子

動くものありに、深さと幅があつて、何とも楽しくなりました。この調子、この調子。

わたくしにエールを送るのも私

佐藤 治代

わたしは私、ひとはひと、でも私もひとの中で暮し、ひとの中で私も暮さねばなりません。もつれ糸といつて春には編み上げる

吉岡 きみえ

もつ編み上がりしましたか。ゆつくりと見事に編み上げて下さい。もつれ糸といつて。

七癖があつて人間らしくなる

橋本 多哥由

そうですか、いやそうですね。男らしく、人間らしく、その七癖に拍手。

私は蛸が好物、たこ焼大好き。蛸の手はどれか、みんな足ではないらしく、ゴツンと頭を叩いてやると、痛テエと頭にもつて行く足が手だと言つて、うまい事考えたなあと感じました。ユーモアのある句も含めての秀句鑑賞とします。失礼いたしました。

線 小

み邦周遠哲庸東輝章典次大昌一鐘弘洛さち子柳保純みつ
ね昭信野男佑吉夫司子男輪鼓壺造一酔弘州子

線引きをされて冷たい世間の目
一線に立てば火の粉も飛ぶ覚悟
線取りが上手になつた自己主張
切り取り線に向うにきつとある花野
延命装置に切り取り線がある
心電図医者に読まれて困る線
線の細い男ころんではかりい
ＩＴに悲鳴あげてる頭脳線
地平線にとときどき見える母の笑み
パージンロード一線守つた胸を張り
蕾のときに合格の線をひく
直線で君を見ている恋している
あの手この手まだ伏線が引いてある
五線譜がゆれて演歌のこぶし冴え
常識の線で包んだのし袋
五線譜もはみだす父の祝い船
仕切り線越えす同居の灯が丸い
一線を引かれて男うろたえる
線太くみえてデリケートな男
直線に生きた証の父の靴
一線を越えようとする影法師
傍線を辿る青春のページ

— 92 —

人間を線引きしては分けたがる
落ちこぼれ境界線を越えて咲き
吃水線男ごころを駆り立てる
ラインダンスの脚を見ているかぶりつき

黄信号中途はんば線一本

線引きの下手なところも親ゆずり
当落の線でいいこと言うてはる
一線をこえてから知る女の苦

線引きははつきりしたが情がない
線香の煙にむせぶ思がある

一線を越えてならない義理がある
どんぐりの声が一直線に来る

一本の線にこだわる設計図

自己主張点より線が強すぎる

会社からの道筋にある引込み線

佳

お役所の線は決して曲らない
当落の線上深いお辞儀する

両方の顔立つ線を模索する

脱線も時には人気でる授業
大空を二つに割った飛行雲

人

伏線について引き込まれて行くドラマ

10センチ幅で見事な駐車場

地

父が描く子が描く線が交わらず

天

本当の貌を画いてる太い線

それから

宮崎ヒサ子選



それからは同じ時刻のバスに乗る
それからの事は笑顔に書いてある
拝啓と書いてそれから吸う煙草

それからの風はまともに吹いて来ぬ
それからは時々背伸びして暮らす

それからのことは任せる子の進路
輪を抜けた蟻の居場所を風に聞く

それからと先を促す聞き上手

それからの人工弁のしたたかさ

それからの事に君と生きてゆく
それからの事には触れぬ老いの意地

自画像の乱れたおんな貝になる

それから早寝早起き守り抜く
それから虫一匹が殺せない

疑問符が消えてそれから手を繋ぐ
競り勝つてそれからどつと玉の汗

線引きをされてそれから蚊帳の外
人生の色それから素晴らしい

それから触れたら火傷してしまう
大震災以降は過敏になる地震

それからの舌がもつれてくる本音

羽生えて時々空を翔んでます

それからは知人ぞ知る闇の中
ほめられてそれから敵が多くなる
逆転の敗訴に策を練る六法

それからの一部始終は浪花節

それからと優しく問えば兄の本音
それから縁が優しくしてくる

和解してそれから酒がうまくなる
それからの苦労は言わぬ母の手よ

捨て石のそれは知らぬまま
それからのことは聞かない思い遣り

結び目が解けてそれから青い空
八起き目のそれから人が好きになる

売られゆく牛それからのこと知らず
舌先で切られた傷の後遺症

佳

それからの生き方変えた癌告知
それからをさすとす手紙の重い筆

父母逝つてそれから故郷遠くなり
それからの私は風によく靡く

働いてただ働いて紙おむつ

人

神様もそれから先はみてくれぬ

振り出しに戻りそれから考える

地

靴を履くそれから先は月に聞く

天

それからは爪を短く切っておく

俊路

英風

旋花

一実

兵八郎

シマ子

政勝

栄子

庸佑

健一

岳水

俊子

章司

悦男

ますみ

大輪

風樹

由一

寿美

高瀬霜石

初歩教室

題 — さらり

吐 ^は 田 ^だ 公 ^{きん} 一 ^{いち}

前月号でも述べましたが、同人や同人ではないが古くから初歩教室にご投句いただいた方で相当に上達され、同人と変わらぬ句をお創りになる方々についてはご遠慮下さるようお願いいたしました。

最近初めて川柳をなさる方が増えたせいか初歩教室へのご投句も増え、そのわりには紙面はそのままの二頁ですので、初めての方へのアドバイスも思うようにならず、その上、佳句には同人や古い方の句を採用するようになると、新人の方々の張り合いが削がれるようで、こうした点からも申し訳ないが、前述のような方々のご投句のご遠慮をお願いしたわけで、何卒ご諒承下さい。

添削句

○年ですぬ名医はさらり言つてのけ 昌 鼓
敢て名医と詠まれたことにひっかかりを。

▽年ですぬさらり聴診器を外し

○答弁もさらりとかわす森首相 錦

本来さらりとかわせるような答弁なら、首相の人氣は落ちないのだが――

▽答弁もさらりといかぬ森首相

○お花見に本心見せずさらり注ぎ 清

この場合お花見は無意味(冗句)

▽本心を見せずさらりと世辞を酌ぐ

○初心者ば臆面もなくさらりと言う 敬之介

できるだけリズムを大切に(特に下五は)

▽末席がさらりと苦言出す勇氣

○手術しますかさらりと医者は言うけれど 春江

推敲不足。さらりと医者のは言うけれど

▽切りまひよか外科医はさらり言つてのけ

○貴女だけの噂さらりと聞きながし 三郎

上六の思い込みが判然としなない。

▽貴女との噂さらりと聞き流す

○悲しみはさらりと流す振りをする 半 覚

下五で句が死んでしまった。

▽悲しみをさらりと流す春の小川

○借り入れをさらりと言われ否応なし 園 節 子

下六の表現がまずい。立場を変えてみると

▽借金を友にさらりと断われ

○荒波を染めてさらりと落つ夕日 輝 夫

情景詩は川柳としてはなかなか感動を呼ば

ない。

▽荒波へさらりと捨てた老いの愚痴

○先生がさらりと言うが良く見てる 三喜夫

説明句と言える。下五が冗長

▽先生がさらりと告知初期のガン

○云いにくいことをさらりと云つてのけ 泰 雄

さらりと言つてのけは、辞書の引用例にも

出ている関係からか類想句が多かった。

▽言いにくいことをさらりとすまし顔

○変化球投げてさらりと交わされる ふりこ

原句では野球と解せられ、説明句となる。

▽好きな娘がさらりと躲す変化球

○相打ちもさらりと躲す敵であり 賢

理屈をいうと相打ちは同時の動作であるから躲すことにはならない。

▽相打ちにならずさらりと躲す敵

○大物はさらりと抜けて知らぬ振り 孝 明

下五は推敲不足。言葉探しはむずかしい。

▽大物はさらりと抜ける法の綱

○痛いところさらりと言つて突いてくる 智加恵

言つてを省き、思わぬ人物を登場させば、

▽痛いところさらり新人突いてくる

○懐かしきさらりと肩に触れてみる (奥) 玲 子

抽象的。懐かしい相手を具体的に詠むと、

▽初恋の肩にさらりと触れてみる

○ふるさとをさらりと捨てる度胸なし さだを

下五に代えて現代の過疎化を詠めば

▽ふるさとをさらりと捨てる若い人

○坂道もさりと走る電動車 恒雄

原句は説明句。オリンピックの坂道を連想すれば――

▽シドニーのアップダウンもさりと駆け

○五月病さりと捨てて藤の花 栄呼

理屈で言えば五月病は出社拒否などで、自力ではさりと捨てられないのが実状。捨てさす藤の花で他力的になる。

▽五月病さりと捨てさす藤の花

○瀬戸際でさりと変わり世を渡る (無名)

いい句だが、無名が惜しかった。

○難問をさりと解いて見直され ゆきの

○難問をさりと解いて株をあげ 侑子

難問を解くのはこの外にも多数。

○水の精石肌さりと蟬しぐれ あつむ

水の精とは作りすぎ。人間を詠むと

▽新緑をさりと溶かす絵の具皿 欣子

○いつもだと苦情さりと受け流す 雪印を想い出すと

▽品質苦情さりと流して社はピンチ

○嫌なことさりと忘れカラオケに 郁代

上下を入れ替えてみると川柳らしくなる。

▽カラオケでさりと飛ばす嫌なこと

○名門校入学したと聞かされる 仙雅子

・・・さ・り・か・ら・や・や・遊・離・し・て・い・る・よ・う

▽名門へさりと入学した自慢

○小腹すきさりと茶漬春の夜 益子

説明句。茶漬けはあつさり(さりと)としているので詠み込まなくても

▽老夫婦茶漬の味がしみじみと

○争いも娘に負けてお茶にする きらり

説明句。親としての心情を詠むとすれば

▽娘に負けてさりとお茶で仲直り

○負けてんかさりと値切る浪花娘 四三郎

負けてんか・値切る・は同義語

▽どこでもさりと値切る浪花・娘

○好きですとさりと云ってかつさらい 万年

○好きだよとさりと云って横を向く 章司

下五の表現の差異だけが、どちらかと言

えば軍配は万年さんの方に――

○職歴はさりとバイトの面接日 方子

読み手に分り難い句

▽職歴を問えばさりとフリーター

○戦友がさりと流す負け戦 圭二

思い込みのはげしい句。意味が分りかねる。

▽あつさりと負けを認めぬ囲碁敵

○言質もさりと身かわす口達者 四八重子

身かわすの表現に無理があつたよ。

▽言質をさりとかわす口達者

佳句

他人事と思えばさりと離婚だね 裕峰

横顔を捉えさりとクロッキ― 絹子

神でない医師が余命をさりと言い 好勝

友の死でさりと止めた煙草 一典

セクハラをさりと躲してからお灸 洋子

○お忍びへさりとと言えぬ妻の喉 喜代子

好きやけど小指が触れただけの恋 賢治

恋心さりと流す紅椿 像山

キスひとつ鬱がさりと流される 和香

想い出の女さりと笹の舟 純子

愚痴一つさりと流す日向ぼ 無緑

根に持たずさりと流す嫁姑 ゆきの

悩みごとさりと忘れ董つた 円女

嫌なことさりと流す耳をもち 謙次

わだかまりさりと流せる里の川 菜月

バツイチをさりとドライに生きている 純

湯煙にストレスさりと捨ててくる てるみ

○ガングロもさりとスーツ入社式 トキ

思いきり泣けば明日はきつと暗れ 幸枝

○古手紙燃やしてさりと過去を断つ 鈴美

追伸へさりと本音をにじませる 英旺

欲望の砂はさりと掌から落ち 君江

(人間の深層を突く) トシエ

義理人情さりとドライな若い嫁 宏子

(現代諷刺)

私の句

着メロで愛をさりと云ってくる

水煙抄

秀句鑑賞

—5月号から

安平次 弘道

決断の早さを異が待ち受ける

鈴江 純子

決断が早いと言うことはそれなりに良いことではあるが、早ければ良いと言うものでもない。この句のように早々と決断をしたのは良いが、そこに異が待っていたのでは何のために早く決断をしたのかわからない。急いで仕事をしそんじるとはこのことか。「—を異が待ち受ける」とはお見事。

方言で喋ると空気あつたかい

湊 修水

最近では方言で喋られる方が少なくなつたようである。しかし、まだ東北の方は多いようである。方言で喋ると言うことは方言のわかるもの同士だからである。方言で話せば回りの空気までがあつたかを感じるのである。修水さんも秋田県とあるからその点よくわかるのではなからうか。

病院に病人何と多きこと

木村 無緑

実は私ことで恐縮ですが、年末に三週間脳梗塞で入院した。その時に思ったのは、なんと病院には病人が多いと言ふことである。言われてみれば当り前のことであるが、病気になつて始めてわかる句である。

羞恥心 人間以外みな裸

山本 磔

人間は羞恥心があるから街中を裸で堂々と歩く訳にはゆかない。言われてみればその通りである。しかし、犬や猫などが裸とは氣づかなかつた。「人間以外みな裸」とは川柳でなければ思いつかない表現だと感心した。

真ん中へ座つて鬼が叱られる

延寿庵 野 鷲

一家の主人が真ん中に座つてゐるのは当り前のことで、叱られるなんて不思議である。しかも叱られたのが鬼だから余計不思議である。だが待てよ、女性上位の世の中、今ではありがちなことかも。定年後の主人がみえるようである。

美人かと男はすぐに聞きたがる

川島 良子

男は幾つになつても美人が好きである。この句は男性の心理をよく表している。

氣を抜くとルーズな風が忍び寄る

岡川 無限

人間誰でも緊張している時はルーズな風など忍び寄ることは考えられないが、緊張ばかりもしておられない。だからこそ氣を抜くことになるのだ。ルーズな風が忍び寄るとは言い得て妙である。

溜まり水替えて人事が活気づき

岡村 孝明

人事とはなかなかむつかしいものだそう。AとBを替える位なら問題はないが、活気づく程の人事異動をするには大幅な移動が必要である。溜つた水を替えるような人事こそ必要である。活氣ある人事を期待したい。

寄り道をして来た人に味がある

武島 ちよえ

真面目一方の人から見れば寄り道ぐらしいた人に味があるとは思えないかも知れないが、やはり人間味のある人が多いようである。人生多少他のこともやつて見ることも必要である。

趣味の会 オレンジ色で出かけよう

菅田 かつ子

オレンジ色の服で出かけるとは大したものである。なかに趣味の会だからこそオレンジ色が似合うのです。頑張つて下さい。

大坂商人と懷徳堂

井上桂作

一般に江戸時代における大坂の商家は、その殆どが個人企業の状態を採っていた。元禄宝永期を過ぎると、不況のため経営環境は益々厳しくなり、管理体制は強化されるようになる。

三井・鴻池・住友のような大商家では、家族的結社による同族企業から番頭経営の管理体制が行なわれ、より近代的な所有と経営の分離へと変わっていった。行商から店舗商業と移行した近江商人のような、共同企業形態もみられる。

天下の台所として、商品の流通が広範囲にわたって拡大した大坂は、商業都市としてまた工業都市としても発展した。周辺の境市や京都を加えると人口百万を越え、一大消費市場でもあった。

工業制手工場の町として発展した大坂では江戸に比して半世紀ほど、その根付けが遅

れ、町人学問所の懷徳堂が創建されるのは、享保九年であった。

当時鴻池を中心とする大坂の両替商たちは幕藩体制の下、次第に活気を失っていく社会経済的事情により、商業の円滑な運営には人間的向上が不可欠であることを悟り、自分達の勉強機関を創設してその運営にあたることになった。現在御堂筋に面した日本生命ビルの南壁の碑文の一部を抄出すると、この地は徳川時代の学校として名高い懷徳堂の跡である。享保十一年の開校から、明治二年の閉鎖まで百四十年間、大坂文教の中心地であった。

江戸より少し遅れて大坂では朱子学の諸説を行ない衆望の厚かったのが三宅石庵であった。懷徳堂の初代学主となった石庵の壁書きによれば「学問に携わる者は、社会的身分や財力にかかわらず人倫学殖の序を越え、尊重して互いに譲り合うこと」とのべられている。

この懷徳堂に学んだ数多い町人思想家の中で、不世出の思想家と言われたのが富永仲基である。彼は「出定後語」「翁の文」などの著書を残して、わずか三十二歳でこの世を去った。

もう一人の町人思想家山片蟠桃は、両替商升家の別家を継ぎ當々家業に出精し、主家をも再興する。彼は大坂商人らしい実証的合理主義を堅持し、コペルニクスの地動説を支持

する天文学の研究者でもあり、日本古来の神話の批判や無神論を唱えた。

江戸時代も後期にはいり、当時衰退期にあった幕藩体制の立て直し、特に経済的に不安の多かった東北諸藩の経済再建に尽力した。

仙台藩の経済再建には、彼特有の投資方法によって財政の破綻を救った。この他にも懷徳堂で倫理・経済を学んだ大坂の商人学者達は、現在で言えば「管財人」によく似た役割を果たしていた。

蟠桃の「夢の代」の書がなつて後十年を経過した大坂で、徳川政権打倒の狼煙を挙げた大塩平八郎の乱が起き、旧市内の中樞部は戦火をうける。この焼け跡に建てられた適塾は、蘭学を教へ日本の近代化に貢献した多くの人材を育てたことで知られている。

千九百九十二年に出されたデット・ナジタ氏の「懷徳堂」はアメリカで、しかもニューヨークヒストリーとして書かれたものである。日本近代思想史の見直しを促すような労作が、外国で次々と刊行されている。

大坂の商人達が懷徳堂のような学問所を生み出したのはなにか。それは教育重視の大坂商人の風潮に支えられて始まったもので、大坂の躍進を支え、さらに日本の大躍進を支えることになった。その功績は誠に大きい。

鳥取県鹿野町句碑紹介

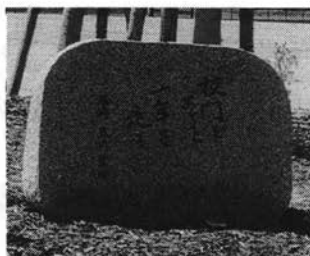
第17回国民文化祭会場準備すすむ

◎句石&句木設置のいきさつについて

平成14年の秋に、鹿野小学校で国民文化祭の川柳大会を開催するにあたり、機運を盛り上げるものを何かできないものかと考えた。

幸いなことに、会場となる小学校を統合校として建築中であり、また、周辺道路も新設中であつた。

その上、鹿野町には「川柳塔鹿野みか月」という県下でも名を知られた団体が存在する。「みか月」会員の指導により、町内の小・中学生も川柳を楽しみ、一昨年の



校門を出ると一年生走る
黒川 紫香



三日月があんなに光るのも勇氣
橘高 薫風



萩の道さくらのみちも友だちだ
森中恵美子



雪達磨春を迎えに行ったきり
土橋 螢

国民文化祭きふ・では、一般の部、小・中学生の部において「文部大臣奨励賞」を独占し、また、昨年の同ひろしま大会では、小・中学生の部で、「広島県知事賞」、一般の部で「第15回国民文化祭広島県実行委員会会長賞」、「(社)全日本川柳協会賞」を受賞し、川柳の町「鹿野」の印象を全国にアピールした。

これを何とか町づくりに活かしたいと考え、鹿野町にゆかりのある川柳作家および日本一に輝いた町内作家の句石6基と町内作家の句木36本を、平成13年4月完成の

新校舎前周辺道の歩道に設置したものである。

◎句石の句と作者（敬称略）

▼「校門を出ると一年生走る」 尼崎市 黒川 紫香

▼「三日月があんなに光るのも勇氣」 豊中市 橘高 薫風

▼「萩の道さくらのみちも友だちだ」 摂津市 森中恵美子

※NHK学園全国作品コンクール最優秀賞

▼「雪達磨春を迎えに行つたきり」 鹿野町 土橋 螢

※第14回国民文化祭ぎふ・文部大臣奨励賞

▼「花になり実になり踊り抜く系譜」 鹿野町 中原 諷人

※第14回国民文化祭ぎふ・文部大臣奨励賞

▼「鮎もまた傷つきながら川のぼる」 鹿野町 乾 優香

鹿野町教育委員会 福西 繁子（国文祭担当室長）記



花になり実になり踊り抜く系譜
中原 諷人



鮎もまた傷つきながら川のぼる
乾 優香

プレ夢フェスタとつとり

文芸祭川柳大会・第25回鳥取県川柳大会

第22回川柳塔鹿野みか月川柳大会作品募集要項

趣旨 平成14年の夢フェスタとつとり（第17回国民文化祭

日時 平成13年10月21日（日）午前10時30分締切

当日投句「峠」 泉比呂史選・「庭」 梶原サナエ選

「走る」 川上大輪選・「夕焼け」 竹治ちかし選

「読む」 山田止水選・「鏡」 八木 千代選

参加料 事前投句者10000円・投句してない方20000円

会場 鹿野小学校体育館（鹿野町鹿野）

主催 鳥取県・県教育委員会・第17回国民文化祭実行委

員会・鹿野町・県川柳作家協会・みか月他

事前投句応募規定

①各題2句ずつ未発表作品

②応募用紙（請求は事務局へ）に住所、氏名、電話、大会

及び前夜祭への参加の有無明記

③締切 平成13年8月31日（金）当日消印有効

④応募料 一般10000円、小、中、高校生無料

振込先口座番号 013301129645

⑤表彰 鳥取県川柳作家協会宛

⑥事前投句の題と選者

「安心」 橘高 薫風 選

「うれしい」 森中恵美子 選

TEL 085718412299・08571231170



山地マツエさんを偲ぶ

木村 あきら

七十二歳の生涯は余りにも名残り惜しい事でございます。ご主人一人を残しての旅立ち
は淋しい限りでございます。
故人様のご冥福を心よりお祈り申しあげま
して追悼の言葉と致します。

法名 澤妙香信女

合掌

私が大内町の「あぐら川柳会」に入会した時が、その会の古参会員であられた山地さんとの初めての出逢いでした。マツエさんは当時、案山子川柳社他各地柳社に加盟され、多方面で活躍をされていて、良き先輩に恵まれ喜んでいました。

半年程経って私から、川柳塔（当時西尾主幹）の作風がわれわれの作風によく馴染むと思われるので、おっぱい吟社へ入会を誘いました所、平成四年十二月に会員として参加されました。故松村迷観子前会長に次いで句歴の古い先輩であり、なかなかの勉強家故に時々は当吟社の課題吟の選者をお願いして居りました。当吟社の指導的立場の先人を失くした事は大きな損失でございます。

山地さんのご出身地は、白鳥町与田山（工藤吟笑さんの近所）で、俳人の故山地春樹さんの孫娘さんです。祖父の血をひいてか根っからの風流人でした。

若かりし頃大阪に定住して居られたそうですが、第二次大戦で大阪が空襲に会いまして郷里に近い大内町三本松へＵターンされてその後、三本松の現住所付近で化粧品店を経営して居られました。老後はその店も閉店し、ご主人義春さんと二人暮らしでした（娘さんご夫婦や孫さんは大川郡志度町在住）。

マツエさんは暇に任せて、川柳塔社、案山子川柳社、長野すみさか川柳社、志度町玉浦川柳会、高槻川柳サークル卯の花、あぐら川柳会、川柳塔おっぱい吟社、白鳥川柳会の八団体の他に俳句もよくし、大内俳句会に籍を置き、多芸多能の才人でした。

本年初頭に体調を少し崩され、半月程家で養生されていましたが、先般県立白鳥病院に入院されたと承り、早速病院へ見舞いに出向きました折は、元氣そうなお顔でした。ご快癒も近いものと信じて居りましたから突然の訃報に只々驚き入るばかりです。

山地マツエさんの遺された句から
竹踏んでヤル氣満々百までも
大根もサンマも乗ってるローカル線
十二月猫も女も走ってる
家屋敷呑んで閻魔に逢いにゆく
栄光の陰で支えた母の汗
四季の風どれにも妥協して生きる
組板のくぼみにたまる妻のウツ
追い風を味方に目線高くする
学歴は言うまいヤリクリうまい嫁
急いだからあかん隣が飛んでくる
年金が机に化けた新学期
退化する脳光らせて句を作る
赤い糸もつれて愛が届かない
いらだちを流す蛇口を全開す
おふくろの味煮ふくめる落し蓋
散骨の海が優しい彩になる
冷凍庫湯揚げ一枚眠らせる
味噌汁が嫌い悪妻かも知れぬ
目をつぶる術も覚えて同居する



村上剛治さんを偲んで

吉村 一風

村上剛治さんは四月十日、急に倒れられ徳州会病院へ緊急入院され意識不明のまま四月十七日に安らかに息を引きとられました。倒れられて一週間、家族の方と一言もお話することもなく、奥さんもただただ病院で無言の看病をするのみでした。

倒れる直前ミツ子夫人に、それも点字で作句の後、『なんか調子が悪い、ひよつとしたら脳出血かも知れん』と言われ、それが予告でもされたように脳内出血でした。残念と言う他なく本当に淋しい限りです。

これから益々有望で川柳界に必要な努力の人を、どうして天は召されたのですか。神さまに少し腹立ちをも覚えしました。

お元気だったころの作品に

バイバイと笑って最後眠りたい

お迎えが来たらあいよといく横り

何と人生達観というか、見通しておられた感が致します。

剛治さんが初めて川柳を勉強されたのは、『盲人文芸サークル水仙』で宮崎シマ子さんの紹介で当会『川柳クラブわたの花』へ平成四年十一月に入会され、今日に至っております。

剛治さんは昭和12年11月18日生れ、大学時代の途中に病におかれ失明の憂き目に会われました。何をされても研究熱心で、一時歴史の研究にも秀でておられ、高安山等の研究もされておられたようです。

川柳投句も本社、八尾その他あちこちに投句をよくされましたが、いつも数多く入選されて有名でした。ご遠慮されておられましたのが、平成十年一月に川柳塔社同人に推薦を受けられました。

ミツ子夫人は、ずっと剛治さんの句の代筆をしておられましたが、お二人そろって上達され、皆を驚かせました。

人生のどこばこ道を楽しもう

白い杖情けの海に帆をあげる

君といる時間がいつも生きている

食べてチョンだから毎日がんばれる

いつも人生淡々と過ごされ、『わたの花』の昼食会等、毎回出席し、ひと口だけのビールで楽しく口数少なく皆と会話され、『生きていく』という実感を別な意味でみんなに与えてくれていました。

車間距離ほどよくあけてよい夫婦道草があつてくらしに艶が出る
無駄話しながら探る儲け口

なごやかな顔で話をされ、唄も聞くのがお好きで、忘年会等には必ず出席されて、にこにこ拍手をされておられました。

澄み切った空へ煩惱溶けてゆく
ごちそうを前にスビーチ負けている

笑いてもユーモアも時々口からぱつと出る。
およそ屈託のない笑顔が印象的でした。

よせばいいのに火の粉浴びてる義侠心
追い風をうまく捉えて帆を上げる
上手に舟の舵をとって天でほは笑みながら
楽しんで下さい。ご冥福をお祈りします。

剛治さん天で笑えばみな笑顔 一風

西尾 栞 七回忌川柳大会

五月五日 八尾グランドホテル

早朝から栞先生の御遺徳を偲ぶ川柳人が、結社を超えて全国から八尾市へ参集された。

ゴールデンウィークの最中、予想を遙かに上回る270名もの参加者の熱気に、会場正面に飾られた栞先生の遺影の笑顔が益々大きく見えた。

栞先生の「旅枕雨にあれば雨の詩」「和顔愛語元旦の心しる」等の書が掛けられた会場は、西尾家の温泉で有名なホテルということもあり早々に投句して、温泉を楽しむ参加者も見られた。

また一隅に栞先生の蔵書が「ご自由にどうぞ」と並べられ、川柳人俳人の個人句集をはじめ、夏目漱石の珍しい復刻版や、奥野信太郎の随筆集などに先生の素顔の一面をかいま見た気がする。

山本希久子、鶴田遠野の司会進行により、まず板尾岳人理事長の開会の言葉、続いて河内天笑主幹が「五月五日は天気になれ、天気

になれと祈っていたが、天気になった。栞先生は運の良い方だ」と挨拶された。

西尾家からご長男の舜介氏がどこか遠い空の向こうから親父が見てくれているような気がする。「この連休の忙しいのにワァーこんなに来てくれるはって、おおきに、おおきに」



会 場 風 景

と栞先生の口ぶりをそっくりに思い出を語られた参会者をほろりとさせた。

祝電披露のあと、社団法人日本川柳協会事務局長・本田智彦氏、番傘主幹の磯野いさむ氏の来賓のご挨拶を戴き、橘高薫風名誉主幹が「西尾栞先生を偲ぶ」と題してお話をされた。薫風名誉主幹のお話の間、美與子夫人は目を瞑られて栞先生の思い出に耽っておられるようであった。

なお本大会は本社五月句会を兼ねており、月間賞カップは天笑主幹選「あわてる」天位の安藤寿美子さんに輝いた。

最後に今回の大会には西尾家からゴールデンウィークのご多忙なか、多大なご協力をいただいた。

参加者に粗供養として先生の「人恋し人煩わし波の音」の句の入ったラジオ才時計、本社から西尾栞句集『和顔愛語』（B6判131頁）が贈られた。

おはなし

西尾 栗先生を偲ぶ

和顔愛語

橘 高 薫 風



先生の遺影とご遺族

皆さん、こんにちは。橘高薫風でございます。こんなに沢山の方にお出で頂き、二百七十名だと聞きました。こんなに盛会にして頂いて、栗先生、どう思っているのでしょうか。「川柳塔」の若い子供達が、しっかりやってくれているなど見て下さっているでしょうか。私が入院加療中に初めて西宮の病院で、指

導をして頂いて以来四十年、先生に師事した訳でございます。

皆さん方のお手もとの西尾栗句集『和顔愛語』の第一頁に「和顔愛語元旦の心しる」ですが、この句は路郎先生の「凡聖一如元旦の心しる」を上五、四字熟語を変えられて「和顔愛語」と、ご自身の自画像としての句を据えられたと思います。私なら「愛染不動」とするなと思つたことがあります。皆さんも自分なら上五にどのような四字熟語を据えるか、一句試みられても一興かと思ひます。

今、栗先生を偲ぶのに、先生の告別式の時にお見送りの言葉として読み上げた弔辞を、もう一度ご披露したいと思ひます。

栗 先生、先生とお会いして四十年、何度そうお呼びしたことでしょう。それも今日が最後になってしまいました。

十四日の朝、病室に駆けつけました時、酸素吸入器を口から外して「薫風さんだっか」と声に出して慈眼を私に向けて下さいました。が、四十年変わらぬ優しい目とお声でした。私達川柳塔の仲間、麻生路郎先生を厳しい父のように、栗先生を母のようにお慕ひし、川柳を楽しんで参りました。

先生は常に、いかに激動する時世でも変わらないものは天地万物の美しさ、四季の移り

変りの美しさであり、また人の世の情け、親子、兄弟、夫婦、友情の美しさである。深い自然愛、人間愛こそ川柳の真髄であると教えて下さいました。私はいつか先生に「先生の人生で悔いのないことがございますか」とぶしつけな質問をしたことがあります。

「一所懸命親孝行をしたことですか」という言葉が即座に返ってきたのです。この言葉こそ路郎先生の「人間陶治の詩である」という語録の、栗先生の実践であり、和の精神もこの優しさに由来すると感じたことです。

平成元年十一月、私たち仲間は高野山霊園に「川柳塔碑」を建てました。栗先生の雄渾な揮毫の裏には「俱会」一処、川柳塔同人並びに川柳愛好家は死して尚陶治で呼びあい永遠に川柳を語り合う絆を以て此処に愉しく眠る」という言葉が刻まれています。先生の愛は、この世限りでない和の真骨頂を語っています。

旅好きの先生は絶えず旅を楽しまれ、ご夫妻の旅に私もよくお伴をさせて頂きました。

先生が最後の旅立ちをされたあと、奥さんのさびしさを、今度は私たち川柳塔の仲間が励まし慰め、健康でいつまでも川柳を楽しんで頂けるよう、親孝行をする番が参りました。

栗先生、安らかに眠り下さい。

傘いらぬ旅へ卯の花くたし哉

平成七年五月十七日 橘高 薫風

最後に先生の多くの句の中で、私の特別好きな三句を申し上げて終ることにしたいと思います。

張り替えた障子の中に母います

母刀自というのがふさわしいご母堂さんのたまたまです。お正月を迎えるためのさらの障子の、少し冷たい身の引き締まる空気に、小さくなられたけれど背筋をしゃんとした母者が座っておられる。栗先生にとってはこの世で一番温かいお方なのです。

虞や虞や汝を如何せん四十八

四面楚歌で有名な中国の項羽と劉邦との争覇の大詰め、負けを覚悟して項羽は陣中に最後の宴を張り詩を作りました。

「拔山蓋世の歌」で

力は山を抜き 氣は世を蓋つ
時利あらず 難逝かず

虞の死に場所の跡に花が咲いたのが虞美人草と言われている有名な話ですが、栗先生の恋の句、四十八歳にして美人に逢うて持て余し気味にされたのかそう述べ懷されております。

懸崖へ猫の尾がある良い日

絵も川柳も究極は写生かと私は七十五歳でまた一つ教えられました。川柳はうがちと信念を持っていました、やはりこの句にそつ

気付かせて貰ったのです。明治時代に正岡子規が写生を強調されておられるけれども、根本的な写生ということは、うがちという川柳の一つの方式を超えて広いものを持っていると思うわけでございます。

栗先生は晩年の十年近くのうちに喜寿金婚叙勲記念、川柳塔誌寿七百五十号と八百号等記念句会を大盛会にして頂き、今日もなおこのようなパワーを川柳塔社に与えて頂いております。心からお礼を申し上げます。

先生は、昭和四十五年七月七日発行の句集『水鶏笛』にすでに

八十五点という人生でありしよな

という句を載せておられます。これは還暦こそこの年配にいらつしやった頃の句なのですが、ご自身を評価されて八十五点とは本当に羨ましい次第で、そのお人柄が、和顔愛語につながつたに違いありません。

ここで少し先生のユニークな側面をもつ一つご紹介したいと思います。それは十二、三年前、つくば科学博がありました時、栗先生が行かれましてポストカブセルという、郵便局に葉書を出して、十年年あとのお正月に届くように出されたのをご紹介致します。

八尾市八尾木2-135 西尾美奥子様

万博にて 栗



西尾家所蔵の川柳の軸

あなたは十六年後どんなにしておられるか
ただいま科学博に来てあなたの十六年後を
想像しています。丁度八十八歳の米寿です。
ご幸福を祈ります。栗（会場は爆笑と拍手）
それだけでしたらひよつとした私にも出
来ると思うのですが、栗先生はその上に住所
は同じで宛名が、西尾 巖様（栗先生の本名）
十六年後は私は九十二歳、まだ生きている
だろうか。生きているとしたら面白い。つく
ば博見学記念にここに書いておく。西尾 栗
という一通も出しておられたのです。

川柳大会

兼題「羅漢」

仁部四郎選

師の影を羅漢で偲ぶ七回忌
羅漢さんに似た師を偲ぶ七回忌
連休に行き場所の無い羅漢さま
風みどり五百羅漢の私語を聞く
雨蛙の遊び相手もする羅漢
倒れそうになっても羅漢耐えている
わらべ唄羅漢も踊り輪にはいる
歳月を風と遊んでいる羅漢
いたずらのお神酒羅漢に笑顔出る
何よりも演歌が好きなき羅漢
足し算をもつすることもない羅漢
凡人になりたし羅漢の春の夢
言わ猿か口欠けている羅漢さん
職安を出てパチンコへ行く羅漢
リストラの一番先にいる羅漢
朧夜に考え事をする羅漢
キューピッドの役は苦手な羅漢さん
すこしみだらな風にも半眼の羅漢
病床の友へ羅漢の手を伸べる
二度童子羅漢になった父を見る
連休をバジャマで過す羅漢たち

はじめ
ルイ子
英子
正雄
尚和子
寿子
郁子
欣之
まこと
道夫
夕花
利昭
由一
幹斉
瑠美子
まさこ
紀乃
隆盛
正子
民



風景受付

ワンカップ召されらんも花疲れ
冬には冬の樹氷をはおる雪羅漢
羅漢さんも少し浮かれた花の下
春眠の羅漢くすぐる猫の髭
無防備な顔ばかりだな苔羅漢
過疎の村羅漢は苔の化粧して
好きな羅漢見つけケタイ呼んでいる
逃げかくれしない羅漢の太い首
桜の下で総大将になる羅漢
羅漢さんどれも私の顔に見え
父に似た羅漢はやはり隅っこに
無理やりに羅漢に似せる亡夫の顔

かおり
順風
玲子
朝子
正美
見清
勇太郎
玉恵
妻子
蛙
樹千代
満寿蔵

姑が居た五百羅漢の真ん中に
戦死した友が羅漢の中にいる
五百羅漢の肩のまるさに亡父がいる
あの人の面影探す羅漢さん
無欲にもなれず羅漢にひざまずく
わたくしもほえみ返す羅漢さま
五百羅漢みんな馴染める顔で居る
羅漢かも知れぬモアイに手を合わす
にこにこ昔話をする羅漢
拝む手に微笑みかえす羅漢さん
羅漢さんにとらめっこして逃げてくる
喜怒哀楽五百羅漢が演じ切る
百態の羅漢に一つだけ祈る
壁に貼る羅漢に自問自答する
僕に似た羅漢がベソをかいている
亡父に似た羅漢に不孝詫びておく
羅漢百体面影ひとつ追いつけ
羅漢みな昨日の我のような顔
血の中に夜叉と羅漢が同居する
まっすぐな勇気を羅漢から貰う
修業すれば僕は羅漢になれますか
最後までつくれぬままに出す羅漢
救われたのだからか羅漢彫り終えて
羅漢さんおいでおいでをしてくれる
羅漢さんにらめっこして元氣でる
羅漢さんがわらって来て立ち止まる

かすみ
武庫坊
秋雄
会美
潤和子
賢子
笛生
猪太郎
冬虹
宏至
茜
潔
國治
冬葉
完司
憲太郎
寿恵子
緑良
八寿子
鎮彦
金太
三千子
恵子
忠央
舞夢
半銭

迷つて答が羅漢の貌にある
淋しくなかないぞ羅漢と話す
陽だまりに二人羅漢の父と母

佳

握り飯五百羅漢に囲まれて

モナリザはこれ位かと聞く羅漢

八月の羅漢は泣いてばかりいる

陽が温いわけ考えている羅漢

羅漢様やつと初孫生まれます

人

君と僕の喧嘩の顔が似る羅漢

話変えよ羅漢さんが笑うから

地

羅漢さまへご恩返しにきた無学

軸

泣き羅漢数えて五百一体め

兼題「菜」

波多野五楽庵選

いきいきとわたしを洗う菜を洗う

ポパイにはなれなかつたがほうれん草

玉葱の好きな男の虚言癖

菜根譚ひらき生きざま問ひ直し

中国の安い野菜が値を崩し

筒井簡菜の花畑黄に染めて

菜を洗う仕種で分かる妻の乱

泰子

比呂史

一慧

正司

哲男

諷云児

真理子

稚代

健吾

睦子

睦子

扶美代

扶美代

扶美代

扶美代

扶美代

扶美代

扶美代

扶美代

扶美代

扶美代

扶美代

扶美代

扶美代

靖巳

菜の花へ十九の春が通りすぎ
瘦せたくて菜つ葉もりもり食べている

花束の脇役でよい菜の黄色

菜飯なく母がまぶたにある厨

菜の花の海に沈んでいく野望

老いてゆく野菜の命いだいて

賢母でも才女でもなし菜を洗う

意志持たぬバイオウチの花野菜

山菜の豊富な過疎へ嫁が来ぬ

コンビニの惣菜にない亡妻の味

連休帰省老母の白菜漬がある

白髪がほうふつとする菜の花忌

萎れゆく菜よ遺言も残さずに

菜園に育つ私の宝物

ラディッシュの紅がウインクして困る

菜の花の虜になった紋白蝶

七草を送ってくれた母がいた

好き嫌いさせぬ野菜のみじん切り

ザクザクと未練断ち切る菜を刻む

菜の花やまだ雑念がわいてくる

自家栽培いつか菜食主義になる

野沢菜漬スキーの客はよく喋る

菜の花が咲けば詩人となる私

中国の安い野菜にうろたえる

信濃路の方言を聞く夏野菜

菜の花がきれい北前船がゆく

美也子

瑠美子

公誠

房子

鐘造

かりん

寿美

澄子

猪太郎

恭昌

妻子

久子

艶子

完司

桂香

シマ子

春子

シメ子

朝子

恵子

西和子

萬的

正坊

晋吾

洞庵

さだを

農政のひずみを知っているキャベツ

菜っぱは服着ると素顔になる社長

菜の花の中はハミングアングテンテ

青春の飢えをつないだ芋のつる

飾らない自分を探す菜の花忌

間引き菜も頂いてます戦中派

菜の花忌無償の愛をてのひらに

青虫の付かぬ菜つ葉を食べてます

菜の花の海で恋した夢を見る

海女の村菜の花村になりにけり

無人販売でんでん虫のつく野菜

菜の花の真ん中辺を汽車走る

菜つ葉服胸三寸にある誇り

レトルトの惣菜威張り過ぎないか

菜園で時々シコを踏んでます

司馬遼が愛しつづけた菜の花忌

野放図な家に育った菜根譚

白菜の切り口何故か涙ぐむ

一菜のこだわり妻よありがと

間引き菜になろうと先に覚悟する

一面の菜の花欲も得もない

上品にちよつと気取った京野菜

チンゲン菜漢字で書けたことがない

菜の花が咲いて契りが深くなる

菜の花一面やさしい眉をとり戻す

核家族朝の菜ささむ音が

鹿太

陸子

見清

弥生

ルイ子

かおり

寿恵子

さくら

潔

春蘭

千秀

翠公

満州

楓楽

星子

智彦

順風

孝風

可住

しげお

愿

宏至

章子

孝子

美ッ千

棲世

私の原点にある菜っ葉服

もやもやを重ね白菜真つ二つ

菜の花忌まだ憂国が続きます

佳

初恋は菜の花畑に埋めてきた

おぼろおぼろに老後の話 菜のはなし

本当の野菜だ土が付いている

まだ青いトマトは街へ行きたがり

菜種梅雨逢いたい人が多すぎる

人

大根のどこを切ってもやさしいね

地

菜種梅雨女は髪を切りたがり

天

菜の花にふんわり抱かれ眠りたし

芹も妻も賞味期限が切れました

軸

兼題「一步」

一步でも前に出たがるスニーカー

一步ずつ足が地に付くハネムーン

一步出て空の青さを確かめる

一步引く古い女の生きざまに

性善説信じた一步けつまずく

一步先見えぬ明日に賭けている

懷の辞表と一步前に出る

典子
アキ

稚代

森子

慕情

希久子

はじめ

幹斎

冬葉

いわゑ

幸生

伽羅

達子

月子

寿恵子

正子

りつえ

幸生

崩壊の一步手前にいて夫婦

新世紀何も変らぬ一步だな

あの時の一步が人生を決めた

始めの一步はきつと光っていた筈だ

ポリシーがあつて一步がむつかしい

リハールサルの時はすんなり出た一步

第一歩確か味方のはずでした

一步出たモグラで頭叩かれる

蟻の一步を見たことがありますか

一步だけ踏み越している停止線

一步ずつ譲って握手堅くなる

躓きの一步に勇み足がある

今一步ふみきれなくて老年期

八起き目の一步ふるさとかから明ける

狭くなる一步にプラスする依怙地

父の背を越える一步がおぼつかぬ

はるかなる大地へ雑兵の一步

一步だけならちよつと地獄を覗きたい

母さんがゆずる一步は重すぎる

一步退き潮の流れを読んでみる

あと一步さてそこを身をまえる

もう一步と思ふ所にある挫折

一步の差だがライバルに迫いつけず

改革の一步改憲だったとは

一步前へ応じて兄が還らない

艶子

幸枝

射月芳

大輪

扶美代

秋雄

茂

洋

和歌子

哲男

かりん

茜

孝風

弥生

義子

いわゑ

美代子

弘一

義

啓子

れいじ

春子

正美

ダン吉

日の出

ライバルに一步下がって身構える

一步でる勇氣背中に目が刺さる

無器用な男一步も妥協せぬ

一步譲ったとうさんの定年後

一步踏み出すと勇氣がわいてくる

優秀のその差は一步ずれただけ

一步一步が詩になる風の山頭火

ゆつくりでも歩ける老母を喜ばす

試歩一步三步十歩に嬉し泣き

新任の虹を描いてゆく一步

群に居て僅か一步が踏み出せぬ

魅せられて一步が出ないミレーの絵

一步ずつの道は省略電子音

価値観のちがい一步もゆずらない

この道を階段という一步ずつ

家一步出るとわたしも無重力

八起きめを一步踏みだすとき男

頑なに一步も過疎を出ない母

出おくれた一步トンネルまだつづく

礎の一步を刻む蟻の列

屁理屈へ一步下がって二歩進む

一步出る杭を女は打ちたがる

バージロード父の一步がきこえない

馴れ合いにならない距離を一步置く

反省の一步に靴を履き替える

吐来

民

重人

冬葉

紫香

久子

萬的

かおり

あやめ

順風

靖巳

鹿太

健吾

稚代

諷人

ひろこ

朝子

猪太郎

あすなろ

セツ子

しげお

潤子

度

玄也

五楽庵



会場の八尾グランドホテル玄関

一步譲ると押し流されてしまふ愛
喝采の一步は二本足で立つ

一期一会の歩幅を誰も持っている

佳

深呼吸して貴男に一步踏み込んだ
踏み出せぬ一步自虐と苛立ちと

一步ずつ粗末にしない昨日今日
もう一步届かなかった父の靴

この一步出さねば私員になる

人

応募してみようか新緑の一步

地

天

キミの一步ボクの一步にあるいくさ

一步退く勇氣をくれたのは愛か

軸

横並びからの一步に賭けがある

兼題「座る」 泉比呂史選

座る方が楽で失礼しています

渋滞を大袈裟に言う遅刻の座

美しく見える角度に座り替え

いの一番隅の席とは知らなんだ

子が継がぬ居職の固い座りだこ

その先の見えない場所に座られ

車座で聞けば何でもない序列

座ったら動かぬ父の盃よ

座っても立っても見える花の位置

リストラのあとにロボット座ってる

丁寧に座り直してする返事

土下座するトップの背なかやせている

座高なら横の美人に勝っている

年寄りな座れるなんて甘くない

見送らぬつもの腰が浮きかかる

古椅子がばつんと置いてある事実

レンゲ田へ座る全ては夢の中

賑やかな部屋に座っていた母

母さんが座るとみんな寄ってくる

相槌を打たぬ仏間の灯に座る

痴漢とは知らずに座る映画館

座りなおし女さびしい事を言う

あなたの座る位置には聞こえない本音

あきらめの境地で肝玉が座る

西和子

潤子

星子

哲男

たつお

一壺

良子

蘭幸

恭子

睦子

寿子

智恵子

瑠美子

可住

長生

左代子

潤和子

みつこ

夕花

孝子

かおり

玉恵

年代

かりん

座り心地よすぎて席を譲らない
手招きで上座の横へ座られ

座ってるだけでいいからお父さん

座ったら動かんことにしています

ジープの足座布団に収まらず

末席に座って長い耳を持つ

外人に負けて正座の足崩す

同席を拒む目付きが気に入らぬ

まあ座れば留守だが酒はある

定年へ妻の正座に身構える

祝辞続く少し眠たくなった椅子

人間になろうなうと組む座禅

有難い経と正座に言い聞かす

座ったら立つのに難儀しています

母さんが座るとみんなはつとする

横座りしてる女に油断する

正座してラジオを聞いた日の記憶

座りこんだらもう動かない妻と居る

叱られた記憶座ったこのあたり

フルムーン少し離れて座りたい

傍聴席無罪信じて座る母

ホッとして座れる場所のある我が家

この椅子に座ると家が遠くなる

正座して読経しているホームレス

青い瞳が娘もらいに來た正座

仏壇へすこし崩していいですか

邦昭

世津

一慧

月子

正坊

啓子

まさと

英子

玄也

昭子

ルイ子

雅文

黒兎

伽羅

ダン吉

智彦

たもつ

希久子

千津子

八寿子

勇太郎

能子

由一

一風

石舟

幹齊

その隙間座るの無理と思つけど
真ん中にうるさい奴を座らせる

座布団のカバーを変えざる客がくる

日本の心正座でいただく茶

膝小僧抱いて座れば亡母の声

車座の酒に本音をすべらせる

頂点に座ると夢がみたくなる

末席に座っていても男です

譲られた席へ会釈のおはあさん

食事中なみ度立つや小商人

すぐ中座できる末席だから好き

片隅に座ると誰も気付かない

佳

支持率とゆつくりトイレットに座る

人間を仏に問つている坐禪

肘付きの椅子には深く座らない

お化粧がすむと座ってられない

膝曲げて陛下は同じ目の高さ

人

最後まで味方の顔をして座り

地

切り株に座ると旨いにぎりめし

天

盲導犬まっすぐ前を見て座る

軸

正座して聞くほんとうにいい話

兼題「恋」

森中 惠美子 選

恋をする順に色づくさくらんぼ

恋人の大阪弁で癒される

老いてなお恋に恋して元気なり

三寒四温源氏の恋を読んでる

歳月やむかしむかしの恋敵

恋だろうゆつくり開く自動ドア

モノクロの頃は草書のラブレター

シグナルが点滅恋は忙しい

恋の傷日にち薬が効いてくる

草萌えてどのアンテナも恋の中

生きていてよかつた恋がひとつある

Eメール恋を育てているらしい

長生きをして恋文を書いている

百年の恋を仏壇からさます

このほかの恋のすべてを過去にする

お婆さんに恋をされても困ります

朝食を一緒にしたい人がいる

久しぶり恋と言う字を書いてます

助手席の恋人拳式いつですか

訳あってあちこち恋をして回る

野茨の繁みで恋のかくれんぼ

伴せになれと恋人それつきり

ホップステップまでは順調だった恋

片想いショートカットの風になる

恋一途軒の燕は卵抱く

おばあちゃんの恋ユニクロのベアを着る

お弁当届けて恋の蓋が開き

カルピスもたまには苦い味がする

相聞歌春風にきく大和みち

ハンカチを敷いてあなたを座らせる

結婚はしたけど恋はしていない

禁煙をします恋をしています

恋をした数は誰にも負けてない

初恋の話を妻はしながらぬ

恋の遍歴じつと見てきたコンバクト

許されぬ恋が静かに柚子豆腐

ブラットニックラブ介護保険をふところに

花カマキリのジャンプ見てただけの恋

くちびるが乾いて好きが言い出せぬ

恋の果て二百六十余字の経

ふるさとの風よ初恋達者かい

三回忌妻を恋しく藤が咲く

初恋も不倫も恋の美しい

男まだ知らぬ恋です仏さま

春ですわ向かいのネコとうちのネコ

老人手帳と恋と関係ありません

蝶の恋少し浮気がすぎないか

幼なじみの恋はトンボの目の中に

美しい恋は映画の中の事

平行線辿る女の恋ごろも

完次

たつこ

みつこ

さだを

恭昌

重人

泰子

大輪

一壺

金太

雅文

英比古

慕情

森子

秋雄

茂

可住

智彦

洋

雄次郎

淑子

三窓

ゲン吉

度

正子

民

父の日の父にロマンス聞いてみる
果し状のように手渡すラブレター
春の風塾で生れた青い恋

求 芽
清 山
冬 虹

恋はもう明日へ歩いて振り向かず
恋人の窓を望遠鏡で見る

美 司
完 司

恋すれば更に大きく見せる胸
恋果てて女は走ることを止め

順 風
晋 吾

水槽の金魚羨む恋一途

満 州

初恋を包む胸とも思われず

妻 子

雨に風に深まってゆく片想い
こびりと書くとしんそこ溺れそう

玉 恵
楓 楽

佳

ケイタイがエデンの園に落ちている

薫 風

初つばめどうやら恋になりそうだ

扶 美 代

朧月むかしの恋もおぼろ月

章 子

これが恋だらうか飯がほしくない

由 多 香

恋文を食べてポストが肥えていく

久 千 代

人

横抱きの恋が守っている砦

欣 之

地

兄ちゃんの恋人なんて大嫌い

潤 子

天

人間に恋をするのは止めました

磯

軸

人しのぶ恋もしのぶというもののか

事前投句「あわてる」 河内天笑選

あわてなと栗羅漢の声がする

已代一

あの世からあわてて来ないうてはる

蕉 子

賑やかな心音三つ児だと分かる

正 美

あわてない呪文をかけてけつまずく

千 里

一年生荒れて学校あわてて出す

たもつ

ゆく先は同じあわててくことはない

みつ子

走り書き人柄に似ぬあわててよう

まこと

あわてるな赤信号が笑つてる

春 雄

散らかしける時に限つて客が来る

潤 子

優しい声掛けと敵があわてだす

尚 和 子

あわてると欲の深さを悟られる

冬 葉

あと五分言われボキボキ芯が折れ

度

予告なし活断層が暴れ出す

ミツ子

あわてても朝食抜いたことはない

弘 一

あわてても携帯だけは忘れぬ子

伽 羅

兄ちゃんがあわてて隠す化粧品

章 久

慌ててる割には長いお手洗い

つづや

天井が違ふところで二日酔い

一 歩

魔がさしたさしたと夫うろたえる

洞 庵

予告なく娘が彼氏連れてくる

玄 也

釣銭を貰わないうち発車ベル

玄 也

試着室ノックもせずに開けられる

朋 月

着替え中ふいに誰かがピンポン

賢 子



緊張の披露

あわてても運はつかんだシンデレラ
あわててはガラスの靴が壊れない
空港で気づくなくしたパスポート
改札の前で切符が見あたらない
答弁の台本がまだ届かない
のんびりとあわてんぼうで恙なし
あわてずにアクセルを踏む老いの坂
パチンコに夢中子供が消えている
発車ベル エスカレーターまだ途中
鍵穴にカギ差したまま行かかった

桂 香
ひろこ
洋
茶の子
正 雄
いわゑ
専 平
晋 吾
英 子
かおり

あわてるな車つかえて進まない
あわてると貰える物も貰えない
手術すむ使ったハサミ見当らぬ
駅伝の次のランナー出て来ない
抱きついてあわてて握手だけに
図星さす妻へ豌豆はさめない
あわてたらろくなことないひと呼吸
暗証番号忘れて老いのうろたえる
治らないのはほんなのにあわて癖
初恋の人に出会った老眼鏡
あわてると茶漬けも喉を通らない
後ろめたさないからでんとかまえてる
臨終と聞いてあわてて目を閉じる
あわてるな泉ナンバーまだ赤だ
すっぱんの顔でとび込む朝の駅
牛乳だジャコだあわてる骨粗鬆
あわてないよう逃げ道はきめてある
集金に行ったら会社閉まってた
産廃の土に慌てるモグラの子
あわてて上がった反対のプラット
満腹のベルトゆるめたままレジへ
抜擢の内示あわてた五十歳
右左違った靴が残される
喜びの返事はがきを逆さまに
突然にケイタイが鳴る社長室

利武 静 一道 哲男 啓子 朝子 一風 満州 富美子 鹿太 八千代 義 むつみ 秋雄 秋雄 利昭 武庫坊 朱夏 しげお 五月 四郎 完次 千津子 紫香

スクープへあわてたペンの勇み足
あわてさすからつい手抜きしたくなる
リストラで今日から朝餉あわてない
ワイシャツの匂いくんくん妻が嗅ぐ
年金がストップしたらあわてます
クローンには神様少しあわて気味
愚痴ったら妻が後ろに立っていた
寒の戻りちよつとあわてた春の鬼
コンタクトレンズが割れた土踏ます
客用と知らずに食べた上にぎり
美女やから誘ってみたらニューハーフ
酒好きのお客へお酒きらしして
インスタントの味褒められて慌てて
長男が今日から女父あわて
大物にあわてたリール腰が抜け
鑑定へ私のダイヤうろたえる
地下街で迷いあわてる待ち合わせ
本道を正直に言う孫の口
あわてたらあかんで転んでもあかん
墓地も手に入れた慌てることもない
無意識に相槌打ってあわてて
反乱の妻にあわてた振りをする
あわてると何かあるぞと疑われ
変化球時どき投げたあわてさす
単身赴任突然妻がやってくる

寿美 孝子 二二三 澄子 正坊 見清 靖巳 半銭 順風 けい子 けい子 艶子 周信 東雲 りつえ 久千代 由紀子 玲子 房子 正司 乙女 愿 三郎 あすなろ アキ

一九咄嗟に住所でてこない
隣ボヤうちの消火器期限切れ
夫には内緒の株がまた下がり
唯一の十八番を先に唄われる
招待の席が上座でうろたえる
財布ごとくるくる回る洗濯機
あわてると淑女の面をつけ忘れ
あわてずに選手宣誓祈る母
母さんはのんびりしててあわてもの
佳 天命と悟れば何もあわてない
脚本にないアドリブのジャブがくる
リストラの話に妻子取り乱す
適齢期なんて無いのにあわてて
それなりに亀はあわてているのです
人 まさかまさかの男に水を開けられる
地 無くなればあわてる米を軽く見る
天 ばけたふりして息子らをあわてさせ
軸 ばけたふりして息子らをあわてさせ
あわてんば古稀になつてもあわてんば
(記名) 月子・澄子・朝子
(清記) 義・希久子

柳伸 正一 重人 徳千代 諷云児 石舟 石舟 日出子 千枝子 柳伸 正一 重人 徳千代 諷云児 石舟 石舟 日出子 千枝子 柳伸 正一 重人 徳千代 諷云児 石舟 石舟 日出子 千枝子

懇親宴



ギター演奏

参加者の感想

田頭良子さん（番傘本社）

七回忌といえば、もつとしんみりした会になるのかと思っていたら、句会・懇親宴を通してよく笑える楽しい会でした。さすがは、しめっぱい雰囲気がお嫌いだった栗先生、とあらためて人徳がしのばれました。

春城年代さん（同人・尼崎市）

傘寿になりました。目を病んでいますので、久しぶりに大会に出席しました。皆さんにお会いでき、なつかしさが一入でした。川柳をしていて本当によかったと身にしみます。

山門幸夫・タミ御夫妻（同人・唐津市）

栗先生には思い出がいっぱいあります。思いやりのある、人間的に大きいお方でした。先生の人柄そのままの、明るさ、あたたかさ、ユーモアなど全て含まれた楽しい句会でした。先生と出会えたようこそ、私達夫婦は生涯の思い出とさせていただきます。先生「きあと奥様はじめ家族ぐるみのおつきあいをさせていただきます。」

坂田和歌子さん（同人・鳥取市）

栗先生のお顔は存じ上げていませんが、今日出席して先生の存在の大きさを知りました。

今後とも川柳塔を力一杯盛り立てて行きたいと思えます。

早川樓世氏（誌友・吹田市）

川柳雑誌の終りの三、四年不朽洞会員でしたが、句会や大会には出たことがありませんでした。その後、長いブランクがあり、最近作句を再開。今日はじめて大会に出席し、会の充実ぶりや女性の多さにびっくりしました。

（各氏の談話を編集部でまとめました）

+++++

御供えご芳志（順不同・敬称略）

磯野いさむ・森中恵美子・小松原爽介・泉比呂史・本田智彦・中田たつお・小西幹斉・坂本晴美・時の川柳社・翠洋会・川柳塔おとり・川柳塔鹿野みか月・いずも川柳会・長浜澄子・山本義子・西出楓楽・前たもつ・木本朱夏・西口いわる・山本希久子・奥田みつ子・波多野五楽庵・北畑金治・森山盛桜・岩切康子・西田柳宏子・中原颯人・久谷まこと・尼れいじ・板尾岳人・美研アート・川柳塔きやらばく・八尾市民川柳会・堀江正朗 芳子・中塚礎石・本間満津子・小西雄々

電報拝受（順不同・敬称略）

都大路川柳社・木村あきら

懇親宴は定刻どおり四時半から始まった。130名という句会の半数近い出席をみ、今更ながら栗先生のご遺徳としみじみ思う。司会は、柳弘、朝子、開会の辞は、朱夏、乾杯は、四郎の各氏。アトラクションは、オペラ歌手の熱唱、ギター演奏と進み、恒例のカラオケになり、それぞれ喉を披露。なかでも寿美さんの「座り羅漢、一歩出すれば」の句の吟詠は圧巻。西尾社長ご夫妻も席を回られ、最後に「星影のワルツ」合唱。わが川柳塔一家健在なり。

栗先生の思い出

人生の師 栗先生

板尾 岳人

誇り高い導きの師としての栗先生、先生はよく僕を知っていて下さって、何ことも笑って僕を許し、臆病な僕を励まして下さいました。川柳と言う玄関へ土足で入っていった一人の僕だけのことではない。

先生と最後にお会いしたとき、二日後に逝く人とも思えぬ言葉で「又旅行しようなあ」と言っておさらば。

あれから満六年。なにもかも虚しく寂しく、気落ちの深いことも誰よりも一番知って下さっておったと思う。

「岳ちゃん、心細かったり、寂しかったりしたらみんな僕に言ってくる。いずれ手探りで川柳塔を見てもらわなくてはならない時が来るからなあ」と。

想い出の一つに、川柳塔一行の中国旅行で北京動物園内で、栗先生と二人迷子になった

ことが想い出され、出口で一行と会った時、「お前等、迷子になって心配したで」と、僕等二人が迷子になったことを棚に上げての、ユーモアな発言が忘れられない。

ハワイ旅行で、免税店前に集合と言う約束が、悪徳タクシーによって別の免税店へ連れて行かれて、集合場所に一時時間も遅れて着いたのが、心配のあまり先生に大声で叱られた思い出もなつかしい。

僕たちの人生にとって太陽であり、先生の広い大きい愛の力、そして、無数の作品が僕たちの生活の日夜を照して下さいました。今、真つ暗い中に呆然と立っている気がします。

葉の花や人間とやを教われり 岳人

追慕の樹の下で

八木 千代

「コノ木ナンノ木フシギナ木ナントモ気ニナル木デスカラナントモ気になる樹ニナルデシヨウ」

省略された歌詞もただ大きな樹が立っているだけの緑の画像も、此の頃で私のいちばん気に入りのコマージュアルです。

六年前の五月、栗先生がこの世を去られてからというものの、いっそ川柳を止めようか。もう大阪に行く気も薄れたと、体も絶不調に窓の外の新緑も無彩色に見える日々でした。とにかく此の画像と、意味が深く面白いた歌に潤されました。小林亜星さんの作詞作曲なんです。有難う亜星さん。

水鶏院釈真諦と日に三度

千代

今も毎朝、ご先祖さま祖父父母、両親と主人、早世の嫁の次に、かならずご法名を声に出して拝みます。ついにながら智子さんのご戒名も唱えます。栗先生と信じた大きな樹は幻の木なのですが、私に短詩の呼吸を戻してくれました。

桃の季には大和の桃が咲き、桜の季節には、弘前の桜が開き、椿の季になると宇治の椿が咲いてくれます。何ともフシギな木ですから、桂林の金木犀も匂えば、飛騨路の合歡の花も揺れ、北京の石榴までたわわに生るのです。

葉すれには人恋いの波音さえします。

川柳塔の旅での一駒ひとこまが臉に残って栗先生の樹はますます濃緑も深く枝を張り、追憶の林檎も香り高く実ります。

栗先生はみ仏になられても川柳塔の未来をきつと守って下さいます。ナントモヤサシイ樹の主（あるじ）になられましたから。

川柳大会参加者

総数 二九二名
順不同・敬称略

青森 櫻庭順風 富士慕情 波多野五楽庵
京都 稻葉冬葉 高島啓子 都倉求芽
山本 礫 一 天 阪 浅野房子 秋山シメ子
安達忠央 穴吹尚士 阿萬萬的 安達はじめ
池 森子 池田淑子 石堂潤子 安藤寿美子
石原靖巳 石森利昭 井尻 民 生嶋ますみ
板尾岳人 井上照子 岩井三窓 磯野いさむ
岩崎公誠 内海綾子 内海幸生 指宿千枝子
江口 度 榎本吐来 榎本舞夢 岩佐ダン吉
海老池洋 江見見清 大谷篤子 内田美也子
大橋鐘造 籠島恵子 加島由一 榎本日の出
笠井欣子 鍛原千里 梶本哲平 太田とし子
河井庸佑 河内天笑 河内月子 太田扶美代
川原章久 観野 宏 川端一步 梶川雄次郎
神原 文 北畑金治 北村賢子 片岡智恵子
吉川寿美 橋高薫風 楠 昭子 神夏磯典子
熊代菜月 栗田久子 桑原道夫 源田八千代
後藤正一 児玉 蛙 小西小雪 川久保睦子
小西幹斉 酒井一壺 坂上高栄 鴨谷瑠美子
坂本晴美 沢田良子 志田千代 川島颯云児
清水利武 田頭和子 高杉千歩 神原まさこ
高田星子 高橋夕花 武田 将 岸野あやめ
田中正坊 谷口 義 玉置重人 小池しげお
辻 葉 土田欣之 妻谷重三 古今堂蕉子
津守柳伸 鶴田遠野 寺井東雲 齋藤さくら
寺川弘一 寺田甚一 中井アキ 坂本ミヨノ

中川 楓 中澤伽羅 中野健吾 澤村猪太郎
中村穀子 那須鎮彦 西浦一慧 西尾美與子
西尾舜介 西出楓楽 西村幸子 砂田八寿子
服部春子 早川棲世 板東倫子 住田英比古
樋口冬虹 日野 愿 福田悦子 瀬戸まさよ
福田満州 藤井正雄 藤田泰子 高須賀金太
藤本一道 藤村亜成 藤村メ女 高田美代子
芳地狸村 本田智彦 前たもつ 田中由紀子
前田登子 前原正美 町田達子 綱木けい子
水谷正子 水野黒兎 宮崎弘直 津守なぎさ
宮西弥生 三好専平 村上玄也 出口セツ子
初山隆盛 森 茜 森本弘風 徳山みつこ
矢倉五月 安永 春 矢野 梓 富山ルイ子
山本半銭 山本三郎 山本翠公 友田茶の子
山本安至 吉岡 修 吉川晋吾 中川千里志
吉村雅文 吉村一風 西村梨里 中田たつお
望月遊美 小林周信 篠原いつふみ
西田柳安子 西村りつえ なかなかみあんず
長谷川会美 長谷川春蘭 平松かすみ
藤井一三 星野さくら 増田左代子
宮崎シマ子 宮園射月芳 宮本かりん
村上ミツ子 村田巳代一 森中恵美子
八十田洞庵 山川日出子 山岡富美子
山本希久子 山本憲太郎 和田つづや
渡辺さだを 兵 應 朝倉尚子 泉比呂史
井上松煙 井上清山 櫻谷郁子 内田美也子

北野哲男 黒川紫香 黒田能子 奥田みつ子
小山紀乃 住谷石舟 高杉 力 久保田千代
田辺麗太 遠山可住 中井昭子 小松原爽介
長浜澄子 西内朋月 春城年代 嵯峨根保子
御影 静 山本養子 和田恭子 前川千津子
昌木世津 竹内満寿蔵 西口いわゑ
春城武庫坊 村山勇太郎
奈良 良 安達孝風 石岡正司 居谷真理子
稲葉長生 乾 春雄 大内朝子 井上むつみ
尾崎 潔 河合茂雄 天正千梢 飛永ふりこ
西川國治 西村 茂 菱木 誠 中原比呂志
福田秋雄 坊農柳弘 牧浦完次 御園孝子
宮口笛生 米田恭昌 和歌山 牛尾緑良
川上大輪 木本朱夏 楠見章子 野村太茂津
桜井千秀 福井桂香 福本英子 古久保和子
細川稚代 堀端三男 松尾和香 宮本三喜夫
松原寿子 山口三千子 鳥取 上田宣子
太田幸枝 小西雄々 新家完司 黒田くに子
田村邦昭 中原汲香 中原颯人 小谷美ツ千
西川和子 西原艶子 福西茶子 小川由多香
宮本一夫 坂田和歌子 徳田ひろこ
中原みさ子 鳥根 尼れいじ 久谷まこと
園山多賀子 園山 小林妻子 福原悦子
山本玉恵 大石あすなろ 戸田さだお
戸田眞左子 矢内寿恵子 伝島 小島蘭幸
香川 清川玲子 池内かおり
福 田 外山あきら 佐賀 仁部四郎
山門幸夫 山門タミ 熊本 岩切康子

老地神壇

毎月25日締切・30句以内厳守

編集部

ローズ川柳会

山崎

君子報

あの日から目のない母に桜餅
神もびっくり合格祈願の絵馬の数
どつと笑つて桜は散りぬ未練なく
梅桜名所は人の花盛り
生れたは桜咲く頃母二十
のど自慢合格の鐘ハワイまで
不合格そこからひろく道もある
ミール落ち日本列島桜湧く
ワツと菜の花いい一日になる予感
良妻賢母不合格です平和です
軽いジョーク通じぬ人と居て疲れ
合格点を貰わなくても生きられる
合格発表幼い笑顔アルバムに
合格の絵馬ぬけ出して春の野へ
堀越しの桜の誘う昼の酒

岸和田川柳会

長谷川呂万報

艶話仕入れひとりであふふふふ
トラフグの姿に似ないうまい味

すみえ
昭二

嬬やかに稜線揺らぐ露天風呂
なさけない男の姿鼻ピアス
姿見にバントマイムのおてもやん
疾走をするもの全て美しい
責任者誰かわからぬ無責任
責任の鏡の下にある機密
責任は秘書に押しつけ首つたぐ
責任者あなたなんです宮沢さん
エリートに責任感の顔がない
責任のないお喋りがよく弾む
上げ下げの上だけ見てた相場馬鹿
ニューヨークに一喜一憂する相場
こらつ相場たまには俺の読みも聞け
我輩の相場も底と辞任決め
お祝いの相場気になる招待状
手放した株の動きが気にかかり
親方はカンナのクズで腕を見る
だんじりの花形屋根の大工方
口出しの施主が大工に叱られる
三階の足場でけいた鳴っている
豪邸を建てた大工の部屋住まい
千年の命を建てる宮大工

川柳若葉の会

宮崎シマ子報

笑司 倅子 松風 甚一 蛙城 富志子 ダン吉 狸村 さよ子 練太 一脩 仁緑 みつ江 穰一 東雲 盛之 東吉 苑子 路子 呂万 能子 欣史子 喜美子 あずき 香住

落の臺春の扉を開けに来る
どの城も桜の花がよくにあう
花好きを素通りさせぬ花屋さん
身のまわりどんなにしても片づかぬ
傘一つわすれられてる過疎の駅
風紋をはいて砂丘の風走る

川柳塔おっぱこ吟社

木村あきら報

一瞬の心のすきをつく悪魔
折返し点から夫婦仲がよい
これ以上言えは傷つく人が居る
ブライドを根こそぎ捨てて楽になる
生きる夢託して植える桜苗
下心あるのか歯の浮くホメ言葉
道問えはみんな振り向くランドセル
軽口を叩いて空気軽くする
七分咲きまだまだ惜しい友が逝く
人間の油断笑うて伸びる草
花咲けば父母同じ日の忌が巡る
満開の桜がオイデオイデをする
友の計や花いちもんめの輪の中に
急いでも手抜きはしないメーキャップ
桜湯に添える笑顔の祖母元氣
桜満開花見の客は皆笑顔

川柳会梨花

石上

悦子報

雪合戦するほど雪が降りません
青梨の青キリキリと雪模様
とつとりの雪がとけたら梨の花

ふまれても去年の所でタンボボが

手相見の行灯の灯が迷うてる

妻の留守お天道様が消えたよう

危険物取扱いは慣れた妻

盗られるぞ鳥取県で子を産むな

他人事興味しんしん無責任

裏切りの背にしんしんと薄氷

月冴えてしんしん夜に地酒飲む

しんしんと着を深めて湖黙す

真打ちが扇子で舟を軽く漕ぐ

泥舟に挑み続けた父も古い

これからの荷は少なめに私の小舟

吃水線も知らず無闇に乗せる欲

賛美歌に阿弥陀如来がくしやみする

ドラキュラの如く血を吸う消費税

無氣力を如月の芽に笑われる

如月の炬燵に老いが残される

如意棒を振れば機密費湧いて出る

百事如意夢を承知で見続ける

首飾りにして見たいなあ赤椿

真心をこめて真つ赤になる椿

極楽は隣椿の花の下

菜の花も椿も食べた男と逢う

利休椿が静電気を放つ

ひと言の弁解もなく椿落つ

川柳塔みぞくち

小西

雄々報

内臓も脳も輪切りの検査すみ

五臓の錆ちよ一杯でこびりつく

蛙

ただし

重忠

東雲

蟹郎

求芽

節子

多哥由

芳光

章久

（彌）枝

（悦）子

高栄

忠良

克枝

彬

行男

よしえ

宏

きみ子

螢

典子

和歌子

石花菜

美恵子

豊枝

智恵子

内臓からのサインが年歳共に出る

内臓が嫌というのにはし酒

やめられぬ酒に肝臓悲鳴上げ

早食いも二十回かみ胃を守り

内臓の元気に感謝食すむ

検診へ祈りを込める内視鏡

不機嫌な肝臓夜を拒んでる

内臓が強く前進する人だ

歳月の海よ内臓おとろえた

東大阪市川柳同好会

森下

あだし野にしんしんと冬迫る音

しんしんと更けてまばらになった通夜

少年の涙を猫が拭いている

風が叩く雪が野性に戻る音

しんしんと冷える心をほぐす孫

ヒーローになれる挑戦者のこぶし

裁ち鉄凶器となった日の悲劇

嫁が来るみかんの花が咲く頃に

熱弁の拳が机叩いてる

女系家族今年限りのみかん山

目覚しのベルより先に猫のひげ

裏木戸を叩いて麗夜を忍ぶ

葛藤を幾たび妻の裁ち鉄

春のみかんは呆けた私のような味

お隣も貧乏でした夏みかん

ロボットに叩き出された首がある

叩かれる度に口惜しい蝸牛

石橋を叩く親父の遠い春

久子

公美枝

和代

鈴枝

弘子

静江

正光

康女

雄々

愛論報

萬的

晋吾

猪太郎

章久

宏

雅文

柳宏子

典呼

太郎

ばつは

のぼる

湖風

美弥子

シマ子

巖

あや子

左代子

緑

佳句地十選（5月号から）

大橋政良

老いたかな玉虫色が好きになる

鬼は外 福も外へと逃げたがり

絵になれば蛇もなかなか愛らしい

縁あつて貰うた猫が家出する

他人には見せぬこころの冬景色

欠点を包んでくれる人がいる

ゴミにならぬように散骨たのみます

新人の目には上役はもう化石

生きようと一段ごとにある戦

飛ぶ鳥もリコールという矢で落ちる

残り火が燃えそつなので切る鉄

雪しんしんひとり静かに酒を酌む

新聞の切り抜き一つ今日終わる

拾ってきた子猫と外で泣いている

いっぱい涙で母の平手打ち

誇らしくテープカットをする鉄

叩いたら響く男が減ってゆく

叩き上げの腕は無口でしゃばらず

深々と寒さ身にしむ都落ち

憎しきは寒夜の鉄ひらいたまま

しんしんと雪降る夜は人恋し

素人の鉄は余白ばかり切る

竹原川柳会

時広

一路報

朝ねぼう犬が起こしにきてくれる

（大）千枝

良

楓楽

むつみ

一枝

紫香

風云児

優女

愁風

快風

美代子

良雄

半蔵門

庸佑

三重子

度

朝子

賢子

信治

和代

とみを

英一

道子

哲矢

雛まつり猫は私の膝へ来る

雛壇に飾っておきたい孫二人

父さんも白酒によい雛祭り

両親の愛がつまってお雛さま

男雛には負けたことない女雛です

どん底で勝つ方法を思い出す

泣いて勝つ孫には負ける好々爺

勝つことの空しさを知る白い髭

裏づけがあるから勝つと決めている

V奪回狙うカーブに旗を振る

めっちゃ悔し世界で二位の勝者言い

産声の力強さに勝てますか

墓参り誰かお花をありがと

春らんまん恩師を囲む幼顔

ひとつだけ恩師のおしえ守ってる

親の恩皆んなで話す兄弟会

師の恩は濃いに深く海の彩

恩人に僕の倅せ見て欲しい

一つずつ恩を返して老いてゆく

恩など言わず家族そろって墓参り

折り返し地点で恩をかえす旅

小川さらさら昔は恩も流れてた

平成の辞書から恩の字が消えた

恩という字をゆつくりと書く静水忌

二千年の恩頂いて新世紀

サークル檸檬

小林

一夫報

一呼吸おけば買わずにすむ言葉

満腹になったら思案はじめよう

蘭幸

汎美

孝枝

年子

静風

半覚

一枝

鮎

笹舟

正宏

民恵

力

房子

敬子

栄恵

節夫

夏喜

貞子

万年

比呂子

笑子

菁居

不朽

一路

カーテンを開けるニコツと鉢の花

すり鉢に隠した味が生きてくる

駅前を抜けると記憶よみがえる

食卓の薔薇も疲れているようだ

新世紀などは知らないつくしんぼ

托鉢の中に溜まっている我欲

根ぐされで亡母のあと追う鉢の花

鉢植えになどしてはほしくない野草

鉢植えに生気を貰う朝の靴

托鉢も絵になる四条河原町

通じないジョークが宙に浮いている

高槻川柳サークル卯の花

川島颯云児報

消印が春のおとすれ連れて来る

定年と言う消印の持つ重さ

茶柱が立つたあの人きつと来る

一寸舌が滑ってキツと睨まれる

きつと来る私の愛を確かめに

心交りはきつと誰かを庇ってる

きつとまた会おう大きな樹の下で

きつと抜くかすかな風を読んでいる

修羅抜ける度ふところが深くなる

プロの業力抜くツボ心得る

目から鼻に抜ける男にある油断

まあいいや呪文が心の刺を抜く

蜜吸った手抜き工事が暴かれる

抜かれても亀は身分を知っている

敵方に名前知られているキャリア

出世した最後を飾る死亡記事

いわゑ

義子

保子

希久子

あずき

哲夫

遠野

正坊

靖巳

澄子

房子

義一

泰雄

五月

吉之助

満寿蔵

稲的

萬的

節子

石舟

庸佑

スミ子

秀夫

武史

しげお

紫香

尚士

ミクロンの薄さを誇る鉤脣

母さんのキャリアに勝てぬ塩加減

ゆきずりの町で出逢った春一番

ゆきずりでしたさわやかな女でした

ゆきずりの衝動買いが上手です

ゆきずりの未完のドラマ抱いている

ゆきずりの地へしっかりと根を下ろす

安心を買った保険が倒産に

アルバムの過去から歳だなど思っ

老いらくの恋はフィクションだけに

上品に笑う仮面をつけている

銀行へ目出し帽では行かないで

スランブになると影まで薄くなる

生きている確かな音でめしを食う

三幸川柳教室

三宅

保州報

親切な裏に意外な刺がある

手の中の毬が意外な方へ飛ぶ

意外だな昼行灯が的をつく

絶望の淵で意外な縄梯子

言い勝って意外に寒い視野の風

百歳の秘訣何にもないと言っ

回らない椅子で思案が欠伸する

不器用に生きて思案を繰り返す

思案している間に輪から外される

結局はやはり思案の外の恋

句読点思案の種が胃に溜まる

ほろ酔いの行こか戻るかおぼろ月

戦友の長い手紙にひとつ誤字

咲二

活恵

比ろ志

礫

あやめ

ゞ女

澄子

治三郎

晴美

無禄

きよえ

千鶴子

靖巳

颯云児

信子

昭枝

かず子

三千子

さち子

保州

豊太郎

秀男

美子

碧

章子

朱夏

清

千金になる字金にもならない字
 八方美人になれず楷書で生きている
 ガミガミと母の小言は字余りに
 画数がどこのこののと名付親
 色紙なら似合う私の乱れ書き
 ワープロで個性豊かに誤字脱字
 弓と矢は無用リングに立つ男
 弓なりの竿は周りに睨まれる
 弓張り月そつとあなたへ放つた矢
 職退いて弦のゆるんだ父の弓
 ITの弓が窓際攻めてくる
 踏まれても一矢報いの弓を引く
 理不尽な権力の弓を引く
 決断の明日へ向けて弓を引く
 弓なりの月が恋文から昇る
 弓矢尽きそれから探す捨て台詞
 キヤッチボールしてから弓が弛みだす

川柳ささやま

酒井

靖子報

ライバルを意識した日の濃ゆい紅
 輝いていなさる恋をしてなさる
 口出した結果孤独の夜となる
 ぬぎ捨ての靴から元氣見る安堵
 ふる里に元氣な母が留守をする
 許す気になって結果を見届ける
 掌の中の元氣弾んで飛びたがる
 一針の千人針も遠い夢
 苦勞した結果が佗し母独り
 プロセスはどうでもいいの結果だけ

正 當 桂 和 千 公 起 正 満 嘉 町 栄 利 美 和 鉄 登
 代 香 代 秀 子 世 一 洲 平 進 治 ね 子 治 美 代

年金をテレビゲームに狙われる
 火を守り陶工の待つ窯開き
 結果から見るとやっぱり薦の子
 健やかな笑顔へ未来賭けておく
 いつか命を神にお返しするゲーム
 袖の下が効いたと思いたくはない
 待針に少し油断をしてしまふ

川柳塔わかやま吟社 牛尾 緑良報

枕木で終る人生かも知れぬ
 円満な家庭主人が下敷きに
 下敷きに君が命と彫つてある
 こころ一番下敷きとなり質となり
 下敷きへ講義ききつつ描く漫画
 酔っぱらいの下敷きになる花むしろ
 下敷きも笑い袋も過去に伏す
 下敷きがいいつも乱れて反抗期
 僕の今父の背中を下敷きに
 ラブレターの熱き思いが下敷きに
 差し入れの聖書ひとこと添えてある
 差し入れてやろう大樹に育つまで
 差し入れは猫の手がいい農繁期
 初戦敗退差し入れたんと余つて
 語りかけ餌差し入れる籠の鳥
 差し入れはママの魂胆とも知らず
 塩胡椒足りぬ男が効くなり
 じわじわと胡椒が効いている話
 一言のジョークが効いている胡椒
 妻の乱だらうか胡椒効き過ぎる

房 江 美緒子 富美 寿子 芳郎 可住 靖子 佐代子 佐一 泰子 豊太 信子 英子 輝子 紀美女 射月芳 君枝 稚代 和子 大輪 三男 あつむ 克子 保州 優子 富美子 和重

塩胡椒少し控えて愛を盛る
 えらいこっちゃや胡椒と七味かけ違い
 小粒でも味の主役となる胡椒
 きき過ぎた胡椒で家に寄りつかぬ
 均等法ギヤルの神輿にハッパかけ
 担がれた総理の御輿宙に浮く
 有頂天御輿の上で風邪をひく
 日曜日妻の誘いに御輿あげ
 運動会親子で担ぐミニ御輿
 片肌を脱いで御輿が熱くなる
 はびきの市民川柳会 徳山みつこ報
 好きだから今日まで続く趣味ひとつ
 好きな娘へ揺さぶる恋のブーメラン
 味よりも好きな娘のいる喫茶店
 好きに起き好きに寝てます顔の艶
 同居などするもんですか虎と獅子
 メリハリが効いて賑やか三世代
 坪庭に春が一ぱい同居する
 同居して絆の深さ噛みしめる
 物干しの風に同居が揺れている
 縁談の話も弾むひな祭り
 握手したその温もりの縁となり
 天秤に掛けているから縁遠い
 無縁墓老女が添えた菊の花
 手を合わず縁切り寺のいい女
 良縁に先ず母がはれ父が折れ
 縁起物の猫がときどきよそみする
 縁遠い娘は常にマイウエイ

利 三 正 千 良 精 紀 和 寿 利 重 一 忠 一 利 泰 志 一 美 漢 敦 久 洞 章
 治 喜 博 寿 子 一 子 久 香 武 人 壺 宏 洋 知 喜 喜 子 仁 庵 司

価値観の違いで縁のない話

カタカタとネットで残業してるパパ
聞きなれぬネット販売孫に聞き

あちこちにネット絡めた選挙戦

立ち上げたネットにかかるアイラブユー

勝因はあの一球のネットイン

悪者を大きなネットでからめ取る

菜園のネットを揺する春の風

情念を蜘蛛のネットにひそませる

ネットタツチばかりで思い届かない

はまゆう川柳会

中後 清史報

エリートが夢が重たい塾範

エリートも家に帰ると恐妻家

エリートの足元すくう色と欲

エリートも金の呪縛で身を潰す

エリートになって我が子は遠い人

あの人もエリート君も白いシャツ

一步退くことで広がる視野もある

その内にボツクリ寺も視野に入れ

近づけば視野から消える虹の橋

広い視野持たない人が上に居る

のんびりと余裕を持てば広い視野

ダム湖畔視野いっぱいのはだ道

空青し心の視野を広げたい

湯上がりの肌をうっとり見る鏡

うっとり心あずけて花の下

散る桜うっとり眺め春惜しむ

流麗な文字にうっとり澄む心

庸佑

桂子

昭平

吐来

かつみ

専平

敏

さとみ

りつえ

絢子

利ばん

佳子

泰作

公治

てる坊

さだ代

生米子

美佐子

清史

平和

登

苗子

雄造

太一

修也

サト美

恵美子

うっとりしてる間がない癩の虫

川柳塔なら

坊農

柳弘報

光

偶然にしてはカメラが先にいる

九条に触れる気配のする不安

治療食皿に祈りのミニトマト

みつばちが寄つてたかつて花の宴

偶然に裸のホクロ同じとこ

お触りがふえすぎ女性専用車

皿割った母が一日おとなしい

新生児こわこわババの触る顔

宴はてて幹事それから飲み直す

花見酒下戸は目立たぬとこに居る

老夫婦欲しいと思うお茶が来る

不景気の底で宴がはずまない

聞き上手話の芯に触り出す

野心家の涙をそっと見る宴

偶然の出会いに残り火を燃やす

コンサート指触れあつて外は雪

春一番触つて行つたミニの膝

バイキング他人の皿が気になる

等分に愛盛り分ける母の皿

毒盛った皿がいちばん美味しそう

点字読む指には神の目が宿る

店を持つ夢へせせと皿洗つ

戦友と飲めば異国のハーマニカ

触らずにおこう無口の妻の乱

紅しようが女の意地を皿に盛る

触れないで下さい繊細な私

花の宴桃源郷の中にいる

偶然に頼る淋しくなっている

巻きずしの崩れた分は母の皿

西宮北口川柳会

亀岡

哲子報

病む人と花のはなしを雲の峰

溜め息がたまると雲が厚くなる

結果へ棒一本が置いてあり

一本の棒をたよりに生きている

相棒に先に逝くなと念を押す

味方なら金棒持った鬼がよい

老父の打つた突つか棒がまだ生きた

相棒がドジで笑いが止まらない

生そば屋のめん棒老舗の艶がある

糸電話可愛い内緒にしばらく

花明り内緒の話聞かせたい

ここだけの話と内緒が動き出す

日日好日苦勞は内緒がたない

子と思う母の内緒があたにか

容赦なく浚つて行つた恋泥棒

永田町金と内緒の花が咲く

あの世でも言えぬ内緒が一つある

思いやりきらりきらりと乱反射

キラリと光った眼には嘘がない

鳶の子キラリと光るものがない

父と子にきらりと光る夢がある

星一つきらりと僕へメッセージ

漁火がきらきら父を待つ夕餉

美千子

隆盛

ダン吉

一風

富喜子

武庫坊

哲男

いゝゑ

尚士

周信

義子

春蘭

奮水

求芽

絹子

千代

松煙

澄子

五一

五月

靖巳

文

比志

正坊

風云児

無禄

鹿太

ビー玉を透かせばきらり子の未来
春の胸きらり女を炎えさせる
好きなことしている時の目はきらり
坪庭に心が和む春の色
ほどほどの暮しに春の陽はやさし
建前に疲れ本音が風邪を引く
ろうそくの炎仏へよく話し

川柳塔唐津支部

久保

正剣報

遊園地見らは何処へ行ったやら
わが病なると言うは友一人
二人居る一人こけたらどうしよう
不況風払うタクトを待ち侘びる
次期総理同じいじめが待っている
深いミールの終焉学ばんか
行間を読まぬ夫婦で恙なし
田圃から声かけられる里帰り
川柳の功德人生丸く生き
順番はまだ来ないはず死亡記事
明治歌えばすぐに大正ついて来る
嫁不足街は厚底ギャル溢れ

尼崎尾浜川柳会

田辺

鹿太報

露天風呂生きててよかった月の色
湯たんぽの差入れが来る山の宿
野良猫が好きな物だけ食べてゆく
お酒より人ごみに酔う花の下
いつも開く家の扉に子が背く
ロボットが絵馬描き欄間彫りあげる

たす子
晴美
能子
光久
トミエ
房子
しげお

兵八郎
實

タミ
晴翠
水笑
幸夫
勝視
高明

輝夫
四郎
虹汀
正剣

その
幸子
江美
鹿太
昭三
孝一

金庫を開けてびつくり何も無い
夢だった夢が叶った夢の中
桜から生気をもらう春のうつ
有難う口癖だった姉が逝く
花吹雪ハローワークは人だかり
高校生そつと叱れば気を開く
鶯を独りじつめる山の宿
まどろみを孫がゆすらす日向ぼこ
決断をする時亡父の顔がある
無理矢理に開いて見たい福袋
夕月が花の白さと競い合う
火種あるうちに自画像描き足そう
世の不況打開と許り桜咲く
鈍行が着いた駅でも咲くさくら

川柳塔鹿野みか月

土橋

義父のお茶真似のできないまま老いぬ
家一步出れば火元が気にかかる
二歩すすみ一步を引いて土を練る
すみれたんばば永雨に少し身繕い
郷に来て晩なりましたほつとする
会うも別れもあいさつが決めである
あいさつの順番がある華燭の日
お日様も笑顔園児のあいさつに
少年のあいさつだけは元気だが
舌だして蛇があいさつして通る
お早よう朝の空気がやわらかい
あいさつに誰彼なしにキスをする
あいさつが空の高さに弾んでる

哲嗣
尚利
亀与子
まさ
義芳
弘治
正治
満寿藏
澄子
十四郎
求芽

風云児
柳宏子
紫香

螢報
武子
幸枝
喜与志
きみ子
実満
みどり
かつ乃
八重子
みさ子
節子
くに子
はるお
きみゑ

螢報

あいさつが上手になつて老いてゆく
大いはいは若いすねとほめられる
花を褒め隣の機嫌とっている
褒めるからまた失敗をしてしまふ
褒められた寿ぎの日も遠くなり
押し黙り階段ひとと降りてみる
階段をあがるかけ声かけている
階段をおりる足音変えていく
段一つ二つと踏んできた樹齢
保険満期非常階段も畳む
人間の階段人間が造る
階段にでんと座っている春陽
階段の下は水没したらしい
一日のゲームが終るおそい夜
毎日がゲームのような老い二人
ゲームセットのかたちを花で埋められる
田周を走りつづけているゲーム

うぶみ川柳会

上田

宣子報

紅白の幕に入れば心浮く
後押しの妻は屈んでばかりいる
あいまいに屈んでおこつ煙い人
姿見の中の他人を見て屈む
散歩する野に土を割る路の臺
野の花を語り飽きない散歩する
散歩する心で句集読んでいる
肩よせて若い散歩は遠回り
徘徊か散歩か見分けつきにくい
童心と一緒に散歩の足軽い

弘子
汲香
睦子
和子
富久江
公子
房子
茂

孔美人
石花菜
宣子
盛桜
菊乃
久枝
忠良

螢

くにお
一京
天雀
美ツ千
良男
芳江
茂

完司
あづま

空耳かまだ見ぬ貨車の音がする

まだ冬のテーマ曲ですちゃんちゃんこ

ペン執ると血湧きまだまだ肉踊る

春立つてまだ夢を見る土蛙

恐しい社会に屈み癖がつく

言いくいことはいついつい後回し

うらぶれた私を影はまだ捨てず

まだ五時かも五時だなと朝な夕

花が咲く音を屈んで聞いている

まだまだと頑張り過ぎた総入歯

化けの皮は倒産に追い込まれ

老化した頭古本から研く

春の芽も太陽に向け化粧する

おはようおやすみと大小屋に屈む

大皿で自我のめばえた紅生姜

カルシウム不足だったか腰屈む

桃桜すくれないの指をして

城北川柳会

川久保睦子報

老人会昔話に花が咲く

外反拇趾靴も歳には逆らえず

お節介少し過ぎたか嫌われる

幼妻短絡的で兄の災難

いのち抱く桜に春の旅プラン

脇役でいいから長生きしてやろっ

凍て土も何のそぞろと露の臺

どつして木の芽とさころ浮かれたす

過ぎし日の思いを馳せる老いの日々

どしゃぶりの後で出る虹待ってます

静生

きみ子

黙光

和枝

健一

ひかり

葉士人

ユリ子

螢

也恵

華子

雄人

睦子

登美枝

ひろこ

天人

宣子

登美子

トヨ子

志華子

政子

達子

とし子

高栄

修

久留美

昭子

タンポポの準備万端風を待つ

強いとてたたかれ弱いとつぶされる

大切な用件切手真つ直ぐに

地団駄を踏んでもあかん血の絆

お大師さん少し拜んで縁日へ

濃ピンク使ってみたい春霞

大津絵の鬼も花見の酒をかう

バラサイトはた目は仲の良い親子

本当の私にもどす里の風

三寒の手足をだます酒少し

主義主張秘めて大樹の根に群れる

若者は理解できぬと理解する

意地っ張り一つくに捨てた一人旅

花畑一期一会の春帽子

無にひたり母とぼんやり日向ぼこ

旅プラン約束をする回復期

よその子も叱る人情持った街

この街の瓦礫の下に本籍地

裏口のやりとり見てた昼の月

この指に止まれと呪文かけてくる

川柳塔みちのく

小寺

燃えつきた男は靴を履き替える

燃え盛る火から答を探し出す

断崖のあなただんとに死ねますか

入學式父母も子供も嬉しそっ

長男の一言で閉店決断す

めらめらと夕日が燃える日のカルテ

頂上を間近に涙のむ勇氣

道子

あい子

一枝

あやめ

順三

典子

求芽

綏子

ひさ乃

春蘭

白峰

倫子

藤子

柳弘

義江

照子

はじめ

史風

千里

公一

花叢報

きよし

ヒサ子

妙子

てる

隼人

順風

慕情

春風にのって絵葉書飛んで来た

トンネルの出口嬉しい春の絵馬

決断のにぶさを笑う薔薇の刺

親ひとり置いたホームが遠くなる

決断が不吉になるか椿落ち

燃えつきた指のダイヤは泣き上戸

ふるさとへ蛙の真似して帰ろうか

嬉しさとを描いてばかりいる余生

嬉しいと笑ったらしい猫の顔

尼崎いくしま川柳会

春城

年代報

汚職とは無縁と威張るコップ酒

新任の教師迎えたのはさくら

先生になった娘に叱られる

熱い血を持つ先生が消えてゆく

字の書けぬ母が私の先生です

藤長けて緑のドレスよく似合う

緑陰に幌はすしやる乳母車

緑陰の遠慮のなさに引きこまれ

新一年画面いっぱい緑の野

核心をつき激怒されしゆんとなる

花の衣の重さを競う夕桜

薬師寺は極彩色の仁王立つ

マイ日記アリのバイのためつけている

筆洗う水にも春のぬくもりが

病床の窓から花見元気づけ

プランコが風にゆられて子供待つ

手を洗う冬の記憶の消えるまで

大根をすばと抜いたあとの穴

ふさふ

花匠

愁女

ツネ

井蛙

黙人

一花

五葉庵

満寿蔵

和子

みち子

静

千恵

糸子

東園

郁子

しづ子

吉太郎

美也子

正子

弘一

愛

節子

保夫

芳子

富江

有るだけの軍手洗つて連休す

さくらさくら信じる事に致します

桜ちるちるおぼろの闇で妻を抱く

続ければ心の張りにきつとなる

川がきれいで心の痛み少しとれ

影に押されて一歩一歩と歩を進め

書いて消す心のあやに溜る春愁

恋は奔放だからポストは赤い色

満開の花に雪降り歌右衛門死す

ほのぼのと春いっぱいクレヨン画

花吹雪する校庭に友ら幻

花の絵に草餅の眩しい逆光

わかあゆ川柳会

松本はるみ報

一言が泣いてしまった腹の虫

つり橋を渡り終って深呼吸

日本中橋でつながるおそろしさ

ロケットに月の未来をのぞかせる

あの月の兎はとうに逃げていた

出掛けます一寸月まで句会で

昼の月川の流れにさからわす

征く朝に手を振った橋がこわされる

月旅行今から予約しておこう

借り方へ回ったときの目の高さ

かわはら川柳会

上田 俊路報

甘いことば聞けばへソクリ飛んで行く

リハビリティも手抜き甘いは徒となる

ランドセル甘い坊の背を叩く

昭三

恵子

光穂

幸子

紫香

武庫坊

義芳

比ろ志

久子

孝一

年代

孝一

孝一

民子

ちよえ

はるみ

かつ子

聖子

恵美子

好栄

博利

清泉

白汀

白汀

登生

一薫

寿子

新婚で甘い夫婦の膳二つ

天職と思つていたがリストラだ

ロケットに天下取られ世も近い

青田刈りやがて天から裁かれる

天性の素敵な笑顔福を呼ぶ

底辺の祈りを天は見捨てない

川柳ねやがわ

江口

星と森美酒の交野を飲み歩く

肩張って歩けば雲がついてくる

今日もまた歩く夢見る車椅子

反抗のかたち缶蹴るバケツ蹴る

反抗期大声で泣く癖がつく

耐えながら反抗僕の青春譜

男はんに笑いながらの口答え

せめてもの反抗食事つくらへん

反抗の火種を抱いた人と寝る

家内には反抗して勝てまへん

小学校の匂いをさせて孫帰る

出身校を大きな声で聞かばん

学校より先行してる塾カバン

体操と給食時間好きな孫

学校で習わない事よく覚え

スベリ台の風に登校拒否はない

学校の帰り楽しい秘密基地

いじめなどない校庭にこぶし咲く

ひと振りのコショウが導くプロとアマ

刺激ない日が続いている嫁姑

パソコンを孫の刺激で習いだす

輪多郎

静子

悦子

泰良

余吏子

俊路

度報

三郎

とし子

一風

朝子

ルイ子

勇太朗

一笑

賢三

順三

修

茜

弘一

柳弘

日出子

仁清

度

利昭

三代

博泉

冬葉

忠央

もう刺激ないわと妻の置き手紙

刺激には縁ない二人茶をすする

アイラブユーぐらゐで刺激にはならず

刺激など求めぬ母の暮し方

刺激ガス帰島の願ひ遠ざける

釘煮する匂い神戸を春にする

生臭さが抜けないように生きている

ピカピカの一年生を待つ桜

懐に納めた刃に曇りなし

ほたる川柳同好会

田辺正三郎報

バツイチも勲章となる世の移り

あふなげに茶柱立つた祝膳

少子化へはつとして祝金

お祝いはお金と言えず口ごもり

祝日の夫婦イタリヤ料理店

人の字を吞んで祝辞のマイク持つ

校歌などみんな忘れたクラス会

勉強は塾で遊びは学校で

不登校理解できない歳になる

校庭にあった銅像今はない

歓迎も送別会も同じ店

サヨナラの後も親指忙しい

イヤリング大きく揺れている別れ

蛍雪の別れし昭和遙かなり

門前で別れメールで話す恋

感動と笑顔のこして出る宜野座

これほどに別れ待たれた総理なし

波留吉

たもつ

かすみ

恵子

庸佑

洋

磯

弘風

亜成

昭子

喜美子

桂子

まみ子

実

幹治

保三郎

正三郎

緑骨

千里志

いさむ

正安

祥風

ただし

ようろう

セツ子

柳童

見清

さよならは別れの言葉桜散る
 冬枯れの別れ楽しや新芽待つ
 相部屋で別れを惜しむ退院日
 おだやかに老いて別れる準備する
 袴姿晴れの日の孫大人びき
 遺影写真賞味期限の姿撮る
 芸の粋姿で魅了した女形
 丸くなる背を伸しては見る鏡
 満月を浴びて夜桜晴れ姿
 数の子のつまみ食いする難しさ

飄々と歩く流浪は風まかせ
 石仏見つめ流浪の風さやか
 終いの住処求めて一茶の旅衣
 流浪して温い冷たい手に触れる
 養蜂家花から花へ春の旅
 晩学で流浪の日々を文字にする
 経百巻納め流浪の旅終える
 青っぱい情熱があり流浪する
 山の峰さすらう雲を見て倦さず
 蛙の子オペラの声に仰天し
 カルメンの悲恋声量朗々と
 振り向けばオペラ喜劇のような過去
 オペラ館その頃祖父もモボだろう
 スタンド総立ち沸き立つサヨナラホームラン
 ウエルカムいつでも風呂は沸いてます
 座布団が飛んで金星沸く土俵
 啓蟄へまた出始めた流浪癖

南大阪川柳会

吉川

寿美報

黒 兎
 春 子
 賢 次
 須 美子
 直 次
 馬 洗
 久 子
 雪 子
 長 一
 信 男
 雅 文
 柳 伸
 柳 美
 庸 佑
 幸 子
 ひろし
 柳 弘
 叙 子
 なぎさ
 志 華子
 たもつ
 千里
 柳 宏子
 萬 的
 重 人
 遠 野
 ひさ乃

へそが茶を沸かす国会のやりとり
 応援団栄光の旗たかだかと
 七回うら歡喜に満ちる甲子園
 山びこが歡喜の歌を響かせる
 ぬか床の美味さに欲しい余寒の日
 初デート余寒なんかは気にしない
 胃袋です癌でなかった歡喜する
 沸点を越えて勝負へ鬼となる
 場内を沸かし引退するらしい
 春本番歡喜の声は花芽から
 全身が耳となり目となるオペラ
 パーティーバット入れて雄たけびあけている
 逆転の優勝満座沸き返る

川柳塔まつえ吟社 恒松
 花の宴行き交う人はさくら色
 定年にさくらの宴はまぶしすぎ
 山桜時の流れに乗らず咲き
 サクラ咲く向こうの山も老木だ
 わたしにもあつた昔のさくら色
 散る時も桜は燃えたままの色
 搜索へ脳裏が湧える宵明かり
 悩殺の言葉覚えた適齡期
 脳少し老いて呆けたと思う日も
 洗脳して生きざまを模索する
 全脳が黄砂かぶつたまま眠る
 女には強いが高所恐怖症
 嘘をつく度にお鼻が高くなる
 高い木を振り返るくせ直らない

修
 東 雲
 のぼる
 日出子
 章 久
 敏 子
 珠 美
 千 梢
 朝 代
 蛙
 洞 庵
 久 峰
 瀧 丘
 俊 一
 長 吉
 煩悩児
 きみえ
 昭 二
 房 子
 たけし
 早 苗
 多賀子
 久 枝
 螢
 小 鹿
 満 江

重ね着の高い目標はいでゆく
 煩惱に負けたピアノがかん高い
 高すぎて真下の動きわからない
 高所からたまにはおちる餅拾う
 失敗を重ねて技が磨かれる
 賞罰も特技も無くて生き延びる
 咲いて散る見事な技のさくら花
 真剣に組んで技あり認められ
 じわじわと攻めに転じた技の冴え
 いっぱいにバラ咲かすのも技だろう
 わだかまり洗い流した秋日和
 髪洗う少女へ女見えはじめ
 デイサービス洗髪終えて笑い顔
 暗い冬断ち切るように髪洗う
 洗いざらい見せて男が一人住む
 幸せな音で二人の皿洗う

川柳塔きやらばく 政岡日枝子報
 菜の花が食卓にのる春の色
 谷渡りまだとどかない残り雪
 すずなりの花と目線が合う回廊
 花の名もわからず回る花回廊
 箭は真実一つ隠し切る
 遊覧車の行く回廊の花に酔い
 陽に達つてぱとはじけたチューリップ
 シヤトルバス名残り桜の下を往く
 ロボットくん庭の草取り頼みたい
 回廊の花も収支が気にかかる
 道ばたの小さい花と話す

アキエ
 太 泡
 ひふみ
 秀 山
 ちえこ
 昌 枝
 すみこ
 静 恵
 義 良
 知 恵子
 茂 美
 桂 子
 幸 子
 紫 晃
 与根一
 町 紅
 八重子
 ふ み
 日 枝子
 時 枝
 春 枝
 瑞 枝
 千 春
 千 代
 麗
 正 子
 ゆ き

百花繚乱みんないい顔してますね
花見に行つてタイヤキ三ツ食てくる
や え

京都塔の会 都倉 求芽報

二代目の世渡り上手は親ゆずり
逆らえぬ雲の流れと人の世と
気心を知り睦まじい三世代
世話焼きのオッチョコチョイが傍に居る
夫の恩あの世で返すつもりです
世の憂さを忘れさせてる旅葉
愛しながら時につれない振りをする
日々感謝 経あげながら眠くなる
勝手ながら休業します花見時
乗りながら車社会に腹を立て
想い出をたどる 日記を読みながら
移る世に小走りながらついてゆく
パツと咲く桜見ながら出勤す
読みながらふともらい泣きしてしまふ
七転びしながら守つてきたのれん
反対をしながら領くことではない
一存で組んだローンに縛られる
金婚旅行 孫一存で決めて来た
一存で何でも決めてしまふ妻
一存でできる癖あるキャリア妻
一存で無理を包んだのし袋
戦力外 薄々感じていたけれど
どの駅も乗客居ない縄電車
粉々のパレンタインのチョコ屈く
達筆でないが誠意のこもる文字

歩け歩けとまいにち春を探してる
自画自賛こんな欲目が恥かしい
ワイングラスの影が今宵はよく喋る
聞き流したはずの言葉が耳に住む
手も足も妻の名儀になっている
とし子 英 旺 庸 佑 柳 宏 子 友 照 吉 之 助 典 子 克 治 輝 美 芳 子 求 茅 紫 香 美 智 子 女 磯 英 一 萬 的 益 子 幸 代 百合子 てる だ だ し 春 蘭 武 庫 坊

八尾市民川柳会 宮崎シマ子報

ひとときを詩人にさせる花の庭
人生はいろいろお隣りの芝生
日日好日春秋を知る庭いじり
庭の石ひとつが何か言いたそ
坪庭で大きな顔をしてる苔
高望みしてはなれない縁遠い
自然死を望む延命措置いらぬ
子にとつて不幸は親の高望み
高望みせんといてんか蛙の子
学期末望みたくして絵馬を書き
父の辞書今日も助けてくれます
余計なことするなと助けて叱られる
噛みついた意見に会社助けられ
ライバルを助けて恩を売っておく
救助犬の匂い知っている
絵手紙の世界へ敵から逃げてくる
花びらひとつ書いて花見に來いという
絵手紙から北アルプスが呼んでいる
絵手紙の川からむかしが流れつく
子はみんな明日を攜んでいる眼
糸電話ぶつり切つて子は巣立つ
腕相撲子供に負けてうまい酒
ひとときを詩人にさせる花の庭
人生はいろいろお隣りの芝生
日日好日春秋を知る庭いじり
庭の石ひとつが何か言いたそ
坪庭で大きな顔をしてる苔
高望みしてはなれない縁遠い
自然死を望む延命措置いらぬ
子にとつて不幸は親の高望み
高望みせんといてんか蛙の子
学期末望みたくして絵馬を書き
父の辞書今日も助けてくれます
余計なことするなと助けて叱られる
噛みついた意見に会社助けられ
ライバルを助けて恩を売っておく
救助犬の匂い知っている
絵手紙の世界へ敵から逃げてくる
花びらひとつ書いて花見に來いという
絵手紙から北アルプスが呼んでいる
絵手紙の川からむかしが流れつく
子はみんな明日を攜んでいる眼
糸電話ぶつり切つて子は巣立つ
腕相撲子供に負けてうまい酒

親の顔みたい子供の自己主張
山を越す雲にのせたい子らの夢
許せないこと子にしっかりと教えこむ
柳 伸 洋 弘 一

川柳大阪 高木 信醉報

虹を追つ女の辞書がすり切れる
不言実行キラリ男の顔ひかる
やつてます嘘を見破る聴診器
流行を追つて個性を見失う
しもといった愛の言葉をそつと出す
何一つ芸を持たないウーロン茶
今だけねママと泣いては追つてくる
一芸を極めた女優子に溺れ
猿まわしまわされてるのはさあどっち
遅れたがだまって待つてくれた彼
芸しない犬を叱つて噛みつかれ
実行へ静かに靴を光らせる
あとを追う孫へ財布の口ゆるむ
持ち合の半分実行して三べん回つとく
計画の半分実行しています
十メートルのちを拾う六百余
一筋の芸花道にたたら踏む
実行へ階段がない天狗鼻
落書きに芸術もある無人駅
だらしのない私を追つて日が暮れる
悲しい日も芸は客席笑わせる
こつこつと努力が今日の芸に生き
芸談に女出て来て盛り上がる
実行へときめきがある旅靴
秋 雄 朝 子 聴 一 鉄 心 美 花 潔 真 紀 喜 楽 圭 民 子 ひ さ し 重 人 柳 宏 子 金 太 一 步 本 蔭 棒 洛 醉 章 久 希 久 志 丹 吉 一 風 雅 巢 利 昭 笑 風

しもといった所忘れた銀行印
家事全部済むと心が楽になる

しもといったはずが無くってお慌て
追憶を友と語って露天風呂
夢を追う男でいつも金がない
優しさは心にそつとしもといて

川柳ふうもん吟社

杉本

孝男報

影法師だつていいえと叫びたい

極楽はいいえ心の中にある

死の予定日無くて人生おもしろい

銭の花ひたすら励む人に咲く

提案をいいねとほめて反故にする

愛だけでいいです何も望まない

ちようさいば言うな遺産は何もない

前世はへびとカエルの似た夫婦

正直に生きて遅れをとっている

予定日のない靴妻が磨いとる

ボーイ捨てに鳴き砂鳴くに泣けません

比呂志
芳香

柳昌
まつお
信醉

洋々
主一郎

鬼桜
忠良

蟹郎
美恵子

裕子
あけみ

美雪
佐智枝

茶人
一京

一瑤
由美子

のり代
昌鼓

雅女
茂登子

志げ緒
修

健一

馴れ過ぎて空気のような妻になり
愛国心あればボーイ捨てなどできぬ
明日の風見抜き予定の日を変える
良心に恥じぬいいえが言えますか
神の決めた予定日なのか夫が逝く
いいえとは言えぬ女の意地もある
煩惱がボーイ捨てしてもよいと言つ
予定日はないが何れは無に還る
にここにこいいえの返事歯が立たぬ

むらくも川柳会

毛利

花びらが色気添える露天風呂
盃に桜吹雪が心地よい
盃へ花一ひらの幸せを
温泉の湯舟がかもす旅の味
悲しみの再会香の揺らぐ部屋
楽しみにするから笑顔の語り合い
花見各温泉招待和む宵
未練などないさきよし花吹雪

仲子
安男
定子
幸報

信夫
明朗
寿

ます美

岩美川柳会

石谷美恵子報

病院の大株主はお坊さま
作品にとけた味がまだ出せぬ
死んだ目の鯛に油断してしまふ
法事だと言つておきますかんにんネ
欲びがわからぬままに呆けている
にんげんを避けてキーボードを叩く
病院代安いがバスは高くなり
医者の背なにも病名が書いてある

蟹郎
主一郎
一瑤

和歌子
螢

完司
喬水
芳光

喬水
鐘馗
金祥
孝男
三津子
悦子
無限
春名

幸報

仲子
安男
定子
幸報

信夫
明朗
寿

ます美

豊中もくせい川柳会

病院へ安心買いに行つてくる
病室の日にち薬がよく笑う
台所うちで一番ひかつとる
踏台になつてあげたい人がいる
蛸焼きも屋台もみんな花に酔つ
台風がくすぶっている胸の奥
台所嬉しい妻の声がある
簡単に嫁が土台を塗りかえる
指切りしとばけて見せる愛もある
叩かれて耐えて育つた戦中派
一度だけ叩いた父の目がうるむ
数台の農機具に詫び離農する
台所私の城も古くなり
名僧の門を叩いて道極め
叩き売り最後の声が気に入つた
春咲いてまた秋に咲くボケの花
うつぶんがあるのか鯛雲去らぬ
とばけ上手で人気者ですそして花
病院で怖い点滴させられる
君おもつ心叩くとほこり出る
病院の付き添い長いながい夜

節子
忠良
一京
李芳
睦子
克枝
重忠
雅女
多哥由
裕子
たぬ
公乃
希久代
孝男
一夫
よしえ
静生
きみ子
かつみ
大漁
美恵子

正坊報

夜雨のしずかに今日をしめくくる
空き缶を蹴れば虚しい夜のしじま
夜目遠目美人霞んだ春の雨
日溜りでパイプの手入れする紳士
そんな事求めるのは無理あの人に
おかげさまで元気求めるものはなし

節子
忠良
一京
李芳
睦子
克枝
重忠
雅女
多哥由
裕子
たぬ
公乃
希久代
孝男
一夫
よしえ
静生
きみ子
かつみ
大漁
美恵子

やすらぎを求めて風と旅に出る
春求め人より早くコート脱ぐ
過去の夢求めて無人駅に立つ
求められ嫁いだ先でいじめられ
稚魚だつて話相手を求めてる
ロマン追う男 数字にこたわらず
数字には出ない夫の深い愛
四と九の数字を嫌うおばあちゃん
挨拶にあなただもですか花粉症
各停の電車の中で春に逢い
慇懃に会長様が使われる
流行を追うからいつも遅れてる
きっかけを失い出るに出られない
春風がみない人にしてしまふ
廃校の庭の桜はひとりぼっち
惜しまれて散りたい母のひとりぼ
背比べをして来た孫がたくましい
嬉しきは辞表を握りつぶさる
何もせず一日過ごし楽し老い
ある夜ふと別れた人のこと想う
念入りに写経 心の手入れする
車椅子つくり笑いが巧くなる

倉吉川柳会

松本よしえ報

諷云児 蘭英子 萬 的 高 栄 喜美子 正 坊 田英子 英子 絹子 石 舟 緑 骨 柳宏子 求 芽 庸 佑 紫 香 重 人 吉太郎 正三郎 薫 風 つえ子

良妻の愛のヘドロに子はねじれ
カラスめが人間笑う知恵くらべ
姿現にねじれた心かくせない
花吹雪浴びて散り際考える
ねじ花に負けぬ程です胸のうち
喪服着てカラスはいつも鳴いている
特攻の散った桜に熱いお茶
ねじられた心を春の野に放す
美しく素直に咲いてねじれ花
へその緒のねじれた父にあつた志
喪服着てカラスお墓のリング食う
花散つて日程表を組みかえる
カラスが一羽夕陽まみれになっている
ITと頭の上で鳴くカラス
いのちみつめて散り際を惜しむなり
数珠持ったカラス寡黙なお葬式
神さまの森にカラスの城がある
クロンでボクを百億人つくる
母ちゃんか気圧の谷をつくり出す
点ほどの黒がねじれを深くする
金かけて作った家は兎小屋
ゆうゆうと茶髪カラスが飛ぶ平和
坂道でカラスに帽子蹴飛ばされ
はいチーズ作り笑いの出来上がり
性悪のカラスが今日も家に来た

川柳高知

川竹

松風報

十三男 蘭喜美子 康子 久子 秋 草 賀寿恵 芳 光 龍 枝 紀美子 重 忠 節 子 登美枝 宣 子 和 枝 かつみ 石花菜 季 芳 和歌子 照 彦 次 男 ゆり子 悠 子 一 夫

看板も右書きであり旧家なり
看板を継ぐには重い三代目
墓参り輪ゴムはすした花の愚痴
両腕に輪ゴムをはめた村の市
輪ゴム一つもつたはないと拾う癖
正直に書けぬ日記に長い夜
正直が死語となつたか世の乱れ
近すぎて息子の心読みにくい
近すぎる職場へ遅刻ばかりする
欲捨てて少し小金がたまります
招待をされると妻の服が増え
貧乏神招いた覚えはないけれど
幸せを招く猫なら飼つてみる
招待券二枚で嫁を釣り上げる
歯ブラシをくわえて妻が招いてる
招待状過去を寿の字が包み込む
横浜あおば川柳会 清水

訓 生 哲 史 和 史 美 々 功 幸 京 子 竹 萌 圭 風 啓 郎 佳 風 三 郎 快 風 孝 雄 潮 華 報 絹 子 あ たら 早 智 笑 子 和 可 雅 子 広 和 裕 峰 道 子 政 勝 鈴 美

老妻の優しい頃が懐しい

優しすぎる男なんだかもの足りぬ

いつもより早い帰宅が慌てさせ

肩寄せする屋根は港に続く坂

朝市の港で旅の土産買っ

ドラが鳴り海鳥空を舞いはじめ

リハビリへ優しい妻も鬼となる

仏壇を磨いて亡父と話す

菩薩様の優しいさに立ちつくす

受診後の妻の優しさにかある

大漁を迎える妻の薄化粧

寒村に沸きたつ活気大漁旗

昇進の靴念入りに磨かれる

脇役に磨きがかかるいぶし銀

叩かずに一度でついた古テレビ

風向きが変り意見へ耳を貸す

他所の人にもやさしくてつまらない

翠 洋 会

穴 吹

尚 士 報

車座に社長も並ぶ花の下

梅漬けが上手で妻の座はたしか

場所取りに犬も一役座つて

新幹線富士を見ている自由席

頭数で来ているバツで座がねむい

居座った猫いつしか家のバラサイト

車座を白けさせて寒いギャグ

ポリシーがないから揺れる座標軸

いろいろと整理するうち自己嫌悪

蕉 子 叔 子 周 信 富 子 恭 昌 千 枝 子 東 雲 千 梢 士 尚 士 潮 華 德 三 だ だ 三 達 也 亜 希 子 満 秋

三 郎

為 佐 子

街 湖

八 重 子

敏

か づ 子

良 子

省 子

サ ト 子

純 子

句 多 留

達 也

亜 希 子

だ だ 三

潮 華

德 三

だ だ 三

達 也

亜 希 子

だ だ 三

潮 華

德 三

だ だ 三

達 也

亜 希 子

だ だ 三

死亡記事歳を先見る癖がつき

情報的大海で溺れて貝になる

情報を持つていて内寝でしまい

開かれたホームページに落し穴

全快の祝い飯粒光つて

亡母に約束果たせぬまの通り抜け

暗のドラマ行き交う改札口

お花見にヤアヤア友と会い

看護婦の笑顔みださに医者通い

総裁選エゴむき出しの小競り合い

花満開何をおいても出かけます

花吹雪浴びて団子を忘れて

うわさの種まくも拾うも軽い罪

ピラニアの餌で生涯閉じる雑魚

ワンルームこけしと話すくに訛り

丁寧な言葉で腹をさぐり合い

堪忍袋のスペアを置いてるゆとり

叩かれて人の痛みを知りました

叩かれて父がきわめた剣の道

川 柳 塔 お と り

原

み さ を 報

車座になると楽しい歌が出る

マイウェイを必ず歌うお父さん

大声で歌えば胸が空になる

わらべ歌心の隅にいつも居る

上役の十八番は誰も歌わない

思い出をみんながうたう戦友会

カラオケが移ろう世相歌い継ぐ

ふるさとの思いをうたう童謡歌

義

楓 楽

舞 夢

靖 巳

真 理 子

絹 子

蛙

会 美

さ だ を

久 峰

伽 羅

照 子

志 華 子

喜 美 子

正 雄

宣 司

石 舟

日 の 出

春

せ つ 子

真 一

幸 次 郎

征 子

水 楊

千 秋

雅 通

庸 二

御詠歌の流れる里に旅衣

ていねいに包んで過去にしてしま

ていねいに薔薇の漢字を見て写す

ていねいに触れてもこわれそう命

ていねいに嘘を一枚はがしてる

ていねいな挨拶うけて肩がこる

ていねいに重いコートをしまふ春

ふかふかと頭を下げた嫁話

ていねいに飾ってみたがつかない

デパートの人もていねい生き残り

割箸の膳が主婦にはごちそうだ

花びらの絨緞踏んで春の風

ない袖にふりまわされている春の義理

春宵の添寝も義理ということか

義理欠いた男の帽子風にとぶ

軸足を何時でも義理に乗せていた

義理果たす袷紗の色も褪せて来た

これも義理選挙事務所に顔を出す

義理で書く名前大きく書いておく

まごころととりた義理の一半

ごみ箱へ義理捨て古い殻をぬぐ

川 柳 塔 打 吹

米 田

幸 子 報

仏滅に結婚したが続いている

やすらかな仏の母に救われる

過去は過去今は互角だ負けられぬ

可能性秘めた息子を信じよう

仏間から先祖の母が注意する

伝 住

羅 奈

ひ かり

艶 子

邦 昭

孝 子

富 貴 子

紀 子

清 子

仁 子

小 生

憧 子

一 弘

登 美

妻 子

雄 々

風 花

彰 雄

正 人

愛 恵

和 子

善 江

龍 江

松 盛

京 子

楨 元

互角なら優越感で押しまくれ

スリルなくただ息してる冬ごもり

天辺に無能なドンを置くスリル

性善説遠い話になりました

本性をかくしデートをしています

相性の合わない隣家にちろみ合い

双児って心の中もかよい合う

均等法男女互角に物を言う

道行くに春陽背中にボカボカと

互角の勝負どちらにも刀折れている

二番手が伸びて互角に渡り合う

求愛の羽は血の色フラミンゴ

生まれ付き性悪説の落とし胤で

ミス日本と互角の胸を持っている

ヒョットコの面でかくしている魔性

毎日のニュースはスリル満載だ

互角より女性優位がやはり良い

お手並みは互角麻雀ツキで勝つ

午後三時噂播いたり拾ったり

縄ばしご月に切られるかも知れぬ

あの日から飢えを感じるひとり傘

選挙戦互角で火花散らし合う

互角なら金持つ方へ味方する

性を洗めて紫色の花になる

産声はみんな互角にあげたはず

大原川柳社

矢内寿恵子報

不器用が習う努力を道連れに
七十の手習い墨を摺る夜長

はるみ
あすなろ

幸香

順子

芳光

克枝

定明

久芽代

貴恵

たけ代

セツ子

やえ

よしえ

和枝

和等

螢

勝見

玲泉

玲坊

博文

孝恵

美ツ千

きみ子

かつみ

雄々

節子

幸子

人の世の悩み辞書には書いてない

長電話ストレス解消にも使い

無駄話結構ふくらむ夢がある

またしても辞書のお世話になってます

習う事まだあり余生理めてくれ

習うより慣れと農婦で鋤を振る

任せると言つて結構口を出す

結構と言つたばかりに頼まれず

習わせる親の過信が重すぎる

八十の手習いですとお茶をたて

習いごと忘れ上手になつて老い

幸せは喜寿まで続く習い事

習うほど奥の深さに心知る

何もかも習い宝の持ちぐされ

父の背がやつぱり好きでUターン

習うより慣れよと母のしつけ糸

愛嬌と笑顔習つたものでない

七十の手習いやつぱり付けやき刃

今更に思いながらの習いごと

ヘルシーと言えば飛びつく習い事

また間口広げた趣味の入門書

川柳藤井寺

高田美代子報

河内から宇宙の扉叩きます

そこまでは言つなと扉閉めに来る

どの扉あけても男対女

扉から子らの笑いが洩れて春

真実の扉を開ける正義心

面会謝絶そんな扉が痛ましい

絹子

静子

ひでの

たづ子

寿恵子

美佐子

みさえ

南花

敏子

こふゆ

巴子

喜美子

悦子

妻子

辰江

玉恵

さち子

あや子

しず

みずえ

はじ芽

喜代子

春蘭

シマ子

雅枝

千里

美代子

扉にも貴様のある古い寺

無料です夫も少し役に立つ

只酒の怖さを知らぬネギ坊主

空気買うことなどどうぞないように

生き過ぎて今は無料の人生で

深呼吸吸梅の香りを持ち帰る

軽い愛盛れば粗品の皿笑う

デバ地下で味見満腹して帰る

デリケートな妻で涙をすぐ溜める

デリケートな女の視線浴びている

デリカシーの無い人だけ頼りです

古傷が疼いて知れる空模様

待合室咳込む人多すぎて

女ひとり風の音にもデリケート

本命と義理の間のチョコらしい

春の歌ピアノシモから聞き分ける

デリケートが集まる春の神経科

胃薬と縁がきれないデリケート

繊細な人には読めぬ社会面

図太くて繊細どちらもわたしです

見掛けより神経質な三枚目

国の椅子そうやすやすとゆずれない

土壇場で逆転弾の底力

朝起きて何をしようか宿の下駄

川柳クラブわたの花

吉村

一風報

益子焼笑顔が浮かぶ子の湯呑

あせつても歳には勝てぬ老いの足

石庭の声なき声に充たされる

道子
江子

瑠美子

昭子

鐘造

重人

絹歌

栄一

悦子

淳一

利武

桂子

一知

恒雄

花梢

かつみ

一筒

正一

和樹

六点

扶美代

志洋

昌子

史郎

敦子

春子

ボランティアもう打ちとける紙コップ
 検尿のゆるりゆるりと紙コップ
 なんだ坂こんな坂の機関車
 定年の夫に感謝の花束を
 計算器片手に回る土産店
 炎天下コップの水をグツと干し
 孫の絵手紙はめたるわくるわた
 ふきのとう絵手紙にのり春運ぶ
 手品する初めのネタはわって見せ
 手土産がみんなにあたらぬ大家族
 島いくつ聞いて忘れて瀬戸の旅
 税務署と聞くと慌てる癖がある
 のど自慢人生共に鐘一つ
 こんなには愛想よく言い誰だっけ
 庭付きは住宅展で夢をみる
 絵手紙で無口な父が語り出す
 球根と一緒にうめる悔いひとつ
 リハビリーへ生きる望みに灯をとます
 根性も希望もでかいお母さん
 絵手紙はにが手と言いつて手付き
 おにぎりと春を楽しむ寺の庭
 遣伝子は正直で子もあわて者
 急いでも高が知れてるかたつむり

いずも川柳会

佐藤

治代報

一風 幸枝 隆盛 美千子 恭一 奈良司 友甫 正純 一道 ますみ トシエ まさと いづみ 春江 知佐子 美代子 民子 明 八寿子 彌道子 宏至 徹剛 治 ミツ子

願望が私の川を深くする
 平成の川を汚して生きている
 逢いたくてボチが泳いだ向う岸
 わたくしも潮もゆつくり満ちてくる
 満足の尺度はどこに当てようか
 満潮になると許せることばかり
 革新が満ち満ちている屋敷そば
 誠実生きて迷ってばかりいる
 もうひとつ誠意が掴めない私
 誠から出た一本の筆である
 誠から有精卵を産み落とす
 真心はやはり誠意がこめられて
 おしゃべりな人形捻子を止めておく

美江子 文子 満江 多喜 きみえ 昌枝 芳枝 治代 芙佐子 久子 彬 桂子

第32回 奈良新聞川柳大会

日時 7月29日(日) 10時開場

会場 奈良県文化会館(バス「県庁前」)
 宿題 「切符」福田秋雄選・「向こう」大村
 美千代選・「ふくらむ」杉野睦朗選
 「舟」鶴本むねお選・「信じる」杉森
 節子選・「頑固」西村茂選・「責任」
 田中新一選 席題・黒川正之選選
 各題2句 出句締切11時30分

会費 3000円(昼食・発表誌含む)
 出席申し込み 7月19日まで左記へ
 〒630-8686 奈良市三条町606 奈良新聞川柳係
 TEL 074-2126-1335

欠席投句 5000円・7月16日必着

〒630-8261 奈良市北市中町71 杉野睦朗宛

第32回 川上三太郎賞作品

雑誌 5句

■ 未発表作品 審査 時実 新子

■ 一次審査 全作品を無記名で審査、成績 大野 風柳

上位10名を一次審査通過者とする。

■ 二次審査 一次審査通過者10名を対象に
 5句1組として無記名で審査、審査員2
 名の総合成績で川上三太郎賞1名・準賞
 2名を決定。

■ 表彰 川上三太郎賞(大野風柳半折作品
 ・賞状・副賞3万円) 準賞(大野風柳半
 折作品・賞状・副賞1万円)を11月25日
 の柳都全国川柳大会席上で表彰。

■ 投句 8月20日着・千円(小為替) 同封
 〒956-1869 1

新津局私書箱15号 柳都川柳社宛

おしゃべりの奥底にある涙壺
 ほのぼのと般若の心とけてくる
 虫めがねも見えぬほのぼのしたニュース
 人間が人間の声するほのぼのと
 人生とさくらほのぼの風に舞う
 ほのぼのと人の情けが手に残る
 おしゃべりの中から明日の知恵もらう
 おしゃべりが得意淋しいのは私
 しゃべったら泣きそう黙って肩を抱く
 玉葱の青いところがよくしゃべる
 賑やかなおしゃべり続く手話の指
 人去って海は静かに夕陽満つ
 秘密みなおしゃべりカラス皆暴く

カツ子 昭二 ちえ すみこ 明朗 篤子 蘭水 玲子 寿美 章峰 茂美 房子 れいじ

柳界展望

高郡「貝がら荘」で開催された。当日の本社関係者秀句は次のとおり。

蒼天を撫むと火口湖も笑う
中原 諷人

金のない気楽さ枕高く寝る
羽津川公乃

★豊中もくせい川柳会は平成12年度の年間優秀賞を決定、4月16日の総会で表彰した。もくせい賞は玉置重人氏、得点賞は①田中正坊

★第9回紙上投句川柳大会

(うぶみ川柳会主催)は、

229人の投句を得て2月28日締切られ、各賞が次の通り決定した。

〈鳥取市長賞〉

神夏磯典子

〈新日本新聞社賞〉

中井 アキ

〈湖山西地区公民館長賞〉

上田 宣子

〈各題天位〉

深呼吸すると大きくなる

翼 中井 アキ

鼓打つ指に命のたぎる音

宮崎シマ子

地を這うてやがては土に

なる鼓動 池 森子

★第一回春はくろばこ川柳

大会は、4月8日鳥取県気

★第三回川柳会梨花吟行大会は、4月21日鳥取県県民文化会館で開催された。当日の本社関係者秀句は次のとおり。

骨太に阿と書く命盛んな

日 長浜 澄子

この道を明日もきつと歩

いてる 城 多喜

女がおんなを憎いと思う

紅の鶴 小谷美ツ千

恍惚の母が忘れぬ梨の味

西原 艶子

七十年生きて桜の美しい

前 たもつ

ほおずきの明るさほどの

夢を見る 小谷美ツ千

食卓は豊か会話は減って

ゆく 山本希久子

人の世の地図迂回路はき

つとある 八木 千代

★NHK学園川柳大会の受賞作品のうちから、平成12年度文部科学大臣奨励賞が八王子市の宇都幸子さんに決定。

よく笑う家族の小さい薬箱

なお、選考委員として本社から西田柳宏子氏(相談

役)、波多野五葉庵氏(参

与)が参加した。

★『尾道文化』2001-

No.19(4月1日発行、尾道

市文化協会刊A5判250頁)

に、畠中美恵子さんが「川

柳界の巨匠・麻生路郎さん

のこと」を7頁にわたって

執筆。多くの句と共に、路

新同人紹介

田

中

笑

子

— 薫風・満秋推薦 —

保

田

絹

子

— 薫風・満秋推薦 —

小

川

注

湖

— 町紅・与根一推薦 —

津

川

紫

晃

— 町紅・与根一推薦 —

榎

本

日

出

— 薫風・天笑・月子推薦 —

第4回 鳥取県川柳文芸大会

日時 平成13年7月8日(日)午前10時開場
締切午前11時30分

場所 新日本海新聞社大ホール(鳥取駅歩3分)

お話 「鳥取の民話」 鷺見定雄

題と選者 「脱皮」 河内天笑 選

「魔」 長谷川博子 選

「コント」 三村舞 選

「縄」 土橋螢 選

「ほどほど」 野口節子 選

「遊ぶ」 春木圭一郎 選

「流転」 西浦小鹿 選

「魅力」 山下蟹郎 選

会費 2,000円(軽食・大会誌呈)

欠席投句 1,000円

表彰 1句1点、上位10人(出席者優先)

欠席投句締切 6月25日(用紙自由)各2句

〒680-0713 八頭郡若桜町赤松928

藤原鬼桜宛 TEL・FAX 0858-82-1490

宿泊(ニュー鳥取ホテル)申込みも上記へ
5月末日迄

主催 鳥取県川柳作家連盟

2001 尼崎川柳大会

日時 7月20日(海の日)12時開場

会場 尼崎市立労働福祉会館中ホール

尼崎市東難波町4-18-32

Tel 6481-4561

会費 1,500円(大会報呈、食事なし)

お話 「今様おんなの子気質」中野文擴氏

(園田学園女子大)

兼題 「杖」 坂本晴美 選

「詰まる」 筒井祥文 選

「満ちる」 久保田半蔵門 選

「渡る」 石井冬魚 選

「袋」 西出楓楽 選

「砂」 佐藤純一 選

「音」 田頭良子 選

「自由吟」 森田栄一 選

出句締切 午後1時 各題2句(欠席投句拝辞)

表彰 尼崎市長賞・市議会議長賞・市教委

会長賞・市文化団体協議会長賞他

懇親宴会費 3,000円

連絡先 尼崎市大島2丁目1番15号

世話人 森田栄一

Tel 06-6417-7701

郎・霞乃夫妻の生涯を紹介。

▽人事往来△

■4月1日、21世紀記念ふ
あうすと川柳大会は、兵庫

県民会館で開かれ、西出楓

楽副理事長が選考、板尾岳
人事部長ほか同人数が参
加した。

■第一回春はくろぼこ川柳
大会出席のため4月8日、

河内天笑主幹は鳥取県気高

町行。

■4月21日第3回川柳会梨

花吟行出席のため、橘高薫

風名譽主幹、河内天笑主幹

前たもつ副理事長ほか数名
鳥取市行。

▼計報▲

■村上剛治氏(同人・八尾
市・村上ミツ子さん夫君)

は4月17日病氣のため逝去。

享年65歳。4月19日自宅に
於て葬儀が行われ、柳友多

数が参列した。

■岡田保蔵氏(同人・川久保

睦子さん御尊父、元同人岡

田フミさん夫君)は、4月

3日胃癌のため逝去。享年

90歳。

▼訂正とお詫び▲

■4月号P126(柳界展望)

2段8行目小池しげを氏↓
小池しげお氏。P42(川

柳塔)下段5行目「時は金

なりのんびりと日向ぼこ」
を本人申し出により削除。

P42(川柳塔)上段4行

目「幸せなドアは何度もノ
ックされ」は本人申し出に
より削除。

榎

本

舞

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

齋

藤

さ

く

ら

ら

ら

ら

ら

ら

ら

中

澤

伽

羅

羅

羅

羅

羅

羅

羅

羅

句 会 名	日 時 と 題	会 場 と 投 句 先
城 北 川 柳 会	16日(土)午後1時から 割引・抱く・切る・自由吟	中宮老人憩いの家 地下鉄千林大宮駅2号出口徒歩8分 〒535-0002 大阪市旭区大宮4-10-8 神夏磯典子
川 柳 会 梨 花	16日(土)午後1時から 水・藤・結・ふりこ・雑詠	鳥取勤労者総合福祉センター(鳥取駅南) 1F会議室 〒680-0841 鳥取市吉方温泉4-268-205 宮本方 坂田和歌子
岸 和 田 川 柳 会	16日(土)午後1時半から 筋書・折角・底抜け・太鼓	市立福祉総合センター2F 南海線岸和田駅東歩3分 〒596-0827 岸和田市上松町610-85 芳地狸村
川 柳 ねやがわ	17日(日)正午から 違反・恥づかしい・拘う・自由吟	寝屋川市立総合センター4F 京阪寝屋川市駅からバス総合センター前下車 〒572-0063 寝屋川市春日町9-9 高田博泉
岬川柳会	17日(日)午後1時半から 折れる・波・つもり	岬町淡輪公民館 〒599-0301 大阪府泉南郡岬町淡輪3592 八十田洞庵
もくせい 川 柳 会	18日(月)午後1時から 比較・伏す・玄関・自由吟	豊中市立中央公民館 阪急曾根駅南東歩5分 〒561-0826 豊中市島江町1-3-5-801 田中正坊
高槻川柳 サークル 卵 の 花	21日(木)正午から まぐれ・降る・ダイヤル あいまい・自由吟	高槻現代劇場306号室 阪急高槻駅徒歩7分 〒569-1142 高槻市宮田町3-8-8 川島諷云児
川柳クラブ わたの花	22日(金)午前10時から 夜・人間・気まずい	八尾市生涯学習センター 〒581-0866 八尾市東山本新町9-3-16 吉村一風
東大阪市 川 柳 同 好 会	23日(土)午後6時から 登る・シャツ・根気・霧	東大阪市立社会教育センター 近鉄布施駅北長堂小学校隣 〒578-0925 東大阪市稲葉3-3-21 片岡湖風
はびきの 市 民 川 柳 会	24日(日)午後1時から タイム・責める・よちよち 「太鼓」	羽曳野市立陵南の森公民館 近鉄高鷲駅北東徒歩10分 〒583-0882 羽曳野市高鷲8-31-11 塩満 敏
川 柳 ふうもん 吟 社	24日(日)午後1時から 時々・アレルギー・恐くない	JR鳥取駅構内 シャミネホール 〒680-0033 鳥取市二階町3-102-2 植田一京
京 都 塔 の 会	25日(月)午前1時から 厄・……くさい・一致	ハートピア京都 地下鉄丸太町駅南改札⑤番出口すぐ 〒600-8428 京都市下京区弁財天町328 都倉求芽
川 柳 塔 みぞくち	25日(月)午後8時から 傘・利息・雑詠	溝口五区集会所 〒689-4201 鳥取県日野郡溝口町溝口757-3 小西雄々
南 大 阪 川 柳 会	27日(水)午後6時から 犯す・苦勞・屋台・マスコット	玉造老人憩いの家 JR環状線玉造駅西徒歩3分 〒543-0012 大阪市天王寺区空堀町15-18 寺井東雲

★日時・会場などが変更になる場合は、本社事務所(06-6629-6914)へご連絡ください。

6 月 各 地 句 会 案 内

(開催日順)

句 会 名	日 時 と 題	会 場 と 投 句 先
尼 崎 いくしま	1 日(金)午後 1 時から 影・紫・雑詠(A・B)	サンシビック尼崎 3 F 阪神尼崎駅南西徒歩 5 分 〒661-0035 尼崎市武庫之荘 5-25-17 春城年代
富 柳 会	2 日(土)午後 1 時から 皿・這う・自由吟	富田林市立中央公民館 近鉄富田林駅南出口徒歩 3 分 〒584-0043 富田林市南大伴町 4-1-10 池 森子
倉 吉 川 柳 会	2 日(土)午後 1 時から 風呂・さしもの・目指す	倉吉市 明倫公民館 〒689-2221 鳥取県東伯郡大栄町由良宿 2072-17 谷口次男
川 柳 塔 みちのく	2 日(土)午後 4 時から 河豚・ごろごろ・断わる	弘前市桶屋町 4-7 居酒屋とんぼ 2 階「川柳道場」 〒036-8002 弘前市元大工町 50-5 波多野五楽庵
川 柳 塔 唐津支部	3 日(日)午後 1 時半から 墓・ドラマ・街	唐津市 栄町公民館 〒847-0082 唐津市和多田満町 1-2-13 仁部四郎
川 柳 塔 な ら	7 日(木)午後 1 時から 気分・胸・走る	船橋フロムワン (船橋商店街内) 近鉄奈良駅西へ 7 分・JR 奈良駅北徒歩 5 分 〒636-0144 奈良県生駒郡斑鳩町稲葉西 2-4-23 中原比呂志
川 柳 塔 打 吹	9 日(土)午後 1 時から じわじわ・腹(肚)・黒幕	倉吉市上灘町 上灘公民館 〒682-0805 倉吉市南昭和町 21 野口節子
川 柳 塔 まつえ	9 日(土)午後 1 時半から 空・地図・油	松江市雑賀町 雑賀公民館 〒690-0859 松江市国屋町 381 竹内すみこ
川 柳 塔 わかやま	10 日(日)午後 1 時から 玉・宙・杖・水族館	近鉄カルチャーセンター 2 F JR 和歌山駅前 〒641-0012 和歌山市紀三井寺 111-2 牛尾緑良
八尾市民 川 柳 会	10 日(日)午後 6 時から 奥・マンネリ・悪口・歩く	八尾市文化会館 4 F 近鉄八尾駅東へすぐ 〒581-0845 八尾市上之島町北 1-15 宮崎シマ子
西宮北口 川 柳 会	11 日(月)午後 1 時から 離れる・爪・すっきり・自由吟	西宮市立中央公民館 阪急西宮北口駅南出口徒歩 3 分 プレラにのみや 〒662-0841 西宮市両度町 2-19-515 山本義子
ほ たる 川 柳 同 好 会	12 日(火)午後 1 時から 傘・泊まる・半ば	豊中市立螢池公民館 阪急・モノレール螢池駅西へ 150 米 〒561-0864 豊中市夕日丘 1-7-5 田辺正三郎
尼 崎 尾 浜 川 柳 会	12 日(火)午後 1 時半から 雨・スリル・自由吟	尼崎市立立花公民館 尾浜分館 阪急武庫之荘北口からバス 49 番尾浜 2 丁目下車 〒661-0976 尼崎市潮江 5-2-47 田辺鹿太
堺川柳会	14 日(木)午後 1 時から 当たる・仏・めだか	堺市総合福祉会館 3 F ラウンジ 南海高野線堺東駅市役所西入る 〒593-8305 堺市堀上緑町 2-16-3 河内天笑

編集後記

これまで夫を通して自分のものにしていった事柄を、徐々に遠ざけている。政治、経済、スポーツなど、うっかりしているところオンチになりかねない気配である。

☆西尾菜七回忌川柳大会には、270名という当初の予想をはるかに上回るご出席をいただき、有難うございました。本号の特集で出席者には思い出を新たにさせていただき、止むなく参加出来なかった方々には、少しでも雰囲気味わってもらえれば幸いである。

☆わたくしごとで申し訳ないが、夫が他界して三年半が過ぎた。三十七年も共に暮らしていた人が、居なくなることは想像を遙かに越えた大きな喪失感であった。「余命は本人の持つ生命力だけ」と宣告されてから一年、覚悟する時間はあったはずなのだが…。

☆近頃、身辺を見回してみると、世の中を見る視野が狭くなったことを感じる。

(ふ)

ひとこと

も一度一緒によろしく

三十年ぶりに、作句を再開することになりました。久しぶりの塔誌は、同人、誌友、豪華絢爛、まばゆいばかりです。出句もしましたが、なかなか選に入りません。朝日新聞に歌壇俳壇の欄があります。一つの投稿を、四人が選を、共選作には星印がつきます。ところが毎週星印はまず出ません。ある選者が絶賛した作品を、他の

選者はまったく無視します。

芥川賞の選評も、十人の選考委員がばらばらの意見になります。

結局多数決という妥協です。文芸の宿命だとも、非凡な才能は予選段階で落ちるなとも思います。

いま私は、凡句の山を築くより一年に一句、自分なりにいのちある句を残せたらと思っています。

没句累々供養しても浮かばれず
(早川 樓世)

△編集集の手伝いを始めて半年が経過。毎月19日25日は本社事務所で、月の10日過ぎには自宅で校正。赤鉛筆と辞書は必需品である。△国語辞典は勿論、カタカナ語辞典、インターネットとエチケットの合成語)と教えられた。

△△と△△で漢字の筆順でその人の年代が判るとある雑誌に出ている。「上」という字をどこから書きますか。

△先日「ネチケツ」な縦棒から？右の横棒から？ケツの間違いと違う？

△これが参ったことに縦棒から書くのがタダシイ、そしてワカイとその雑誌は言うが、私には納得がゆかぬ。△漢字の「涙」には右上にチョンがあった。そのチョンが涙の雪のように見えた。いま涙に雪は無い。納得がゆかぬ。

△そう言えば田周率が3になった。納得がゆかぬ。少数点以下切り捨てられた数字にそのうち復讐されるだろう、きっと。

(朱)

川柳塔・水煙抄投句用紙

種目「

」発表（8月号）

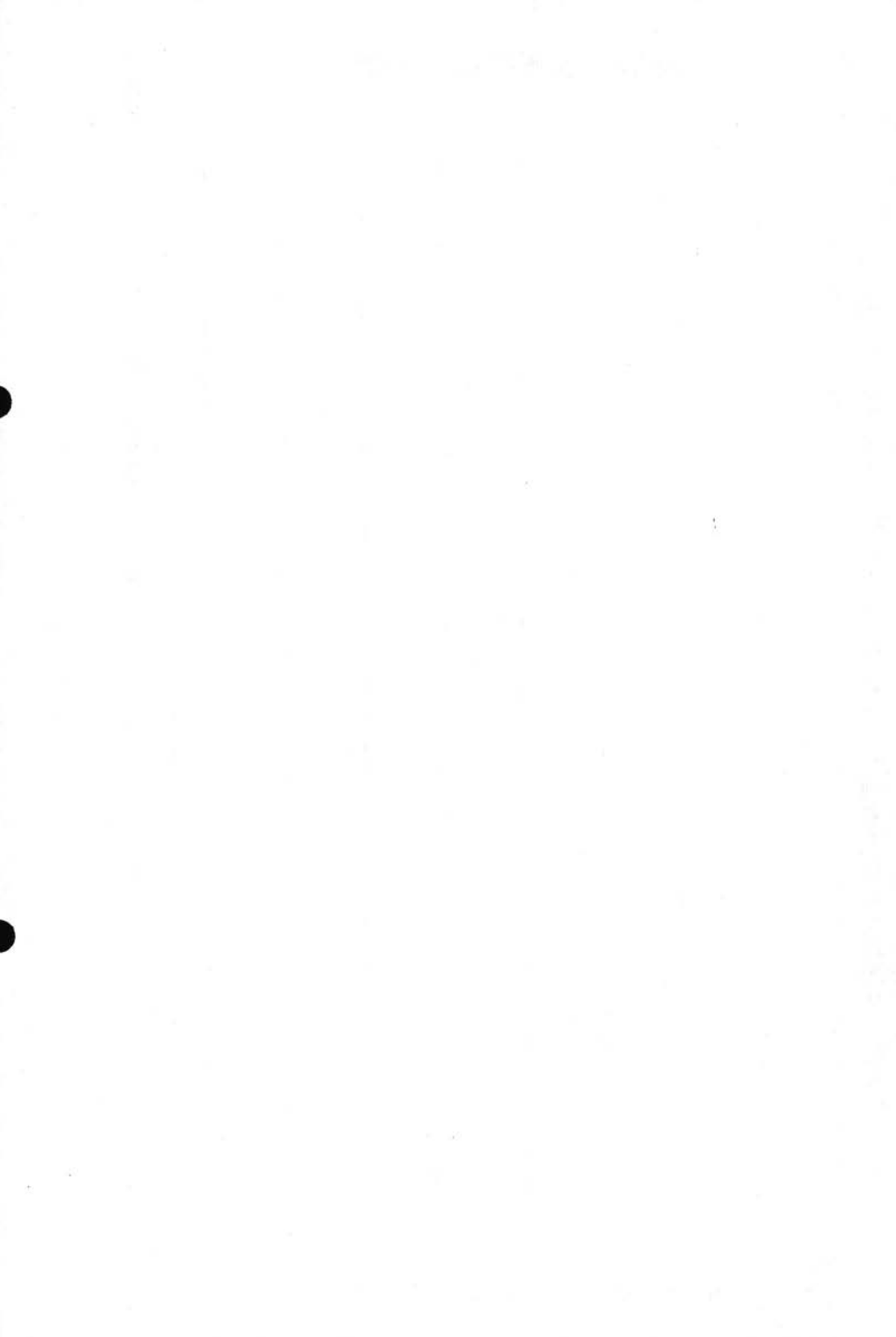
地名

姓・雅号

きりとらせん

◎ 8句を楷書で正確に書き、15日までに到着するようお送りください。

同人・誌友 マルで囲んでください。



作品募集

8月号発表 (6月15日締切)

川柳塔 (8句)	河内天笑 選
水煙抄 (8句)	板尾岳人 選
愛染帖 (3句)	波多野五楽庵 選
茴香の花 (3句)	西出楓楽 選
課題吟 (3句)	岩切康子 選
「ドラマ」	石倉美佐子 選
「街」	内海幸生 選
初歩教室「困る」(3句)	吐田公一担当

9月号
課題吟 「シンプル」「人妻」「うるさい」
初歩教室「引く」

本社6月句会

とき 6月7日(木) 午後5時半
ところ アウィーナ大阪 4階
天王寺区石ヶ辻町19-12 電06・6772・1441
地下鉄谷町9丁目徒歩8分・近鉄上本町徒歩3分

兼題 「ゆかた」

「青い」 福井桂香 選
「騒ぐ」 玉置重人 選
「今更」 川島諷云児 選
「鳴る」 河内天笑 選

席題 1題 当日発表(各題2句以内)

会費 1000円 投句料 5000円

路郎忌 本社7月句会 7月2日(月)
兼題 「むざむざ」「使う」「欲しい」「信」「ゆらぐ」

夜市川柳募集

第1回「幕」 小島蘭幸 選
ハガキに3句 6月末締切
投句先 〒593-8305 堺市堀上緑町2-16-3
河内天笑方 堺川柳会

「川柳塔」への投句について

- (1) 川柳塔欄への投句は同人、水煙抄欄へは誌友(誌代半年分以上前納の定期購読者)に限り、本誌最終ページの投句用紙を使用してください。
 - (2) 愛染帖・茴香の花欄・一路集(課題吟)および初歩教室への投句は、同人・誌友に限り、川柳塔柳箋を使用してください。ただし茴香の花欄は女性だけ。
 - (3) 各欄への投句は、必ず氏名と住所(県・市名)を明記してください。
 - (4) 各欄への投句数および投句締切期日の厳守をお願いします。
- 川柳塔本社事務所へのご連絡は、土・日曜、祝日を除く平日の10時から16時までにご利用いたします。

定価 六百元(送料84円)

半年分 四千元(送料共)

一年分 七千九百元(同)

二〇〇一年(平成十三年)六月一日発行

編集兼 発行人 河内権治

印刷所 美研アート

大阪市阿倍野区三好町二一〇一六

ウエムラ第2ビル202号室

発行所 川柳塔社

電話(06)691-14番

振替 〇〇九八〇一五 一三三六八番

麻生路郎・葭乃句碑建立記念川柳大会

＜除 幕 式＞

と き 7月7日(土)午前11時から
と こ ろ 尾道市志賀直哉旧居前文学公園

＜川 柳 大 会＞

と き 同日 午後1時開会
と こ ろ 尾道市役所前公会堂別館

挨拶 尾 道 市 長 亀 田 良 一 氏

川柳塔社名誉主幹 橘 高 薫 風

祝 辞 (株)全日本川柳協会会長 仲 川 たけし 氏

島 本 実 夫 氏

謝 辞 西 村 梨 里 童

おはなし 弓 削 川 柳 社 濱 野 奇 童

入選句発表 午後2時～3時半

「踊 る」(事前投句) 河 内 天 笑 選

「晩 酌」 西 出 楓 楽 選

「似 る」 木 下 草 風 選

「道 」 小 林 由多香 選

「海 」 八 島 白 龍 選

「情 熱」 石 原 伯 峯 選

当日投句締切 午後0時半・各題2句・欠席投句拝辞

事 前 投 句 6月10日(当日消印有効)までに葉書に2句

投 句 先 〒722-8501 尾道市久保1-15-1

尾道市観光文化課 宛

会 費 2,000円(記念品・軽食・発表誌呈)

尾道市・川柳塔社共催

○ 貸切りバス 大阪駅 午前7時出発・午後7時頃帰阪予定

費用(往復)7,000円(予定) 6月10日締切・先着40名
申し込みは本社事務所へ

○ 直接現地へ行かれる方のアクセスのお問い合わせも事務所へ